

# 奇譚クラス

3

グラビヤ  
組写真  
暗黒の麗人



奇譚クラス

3

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan







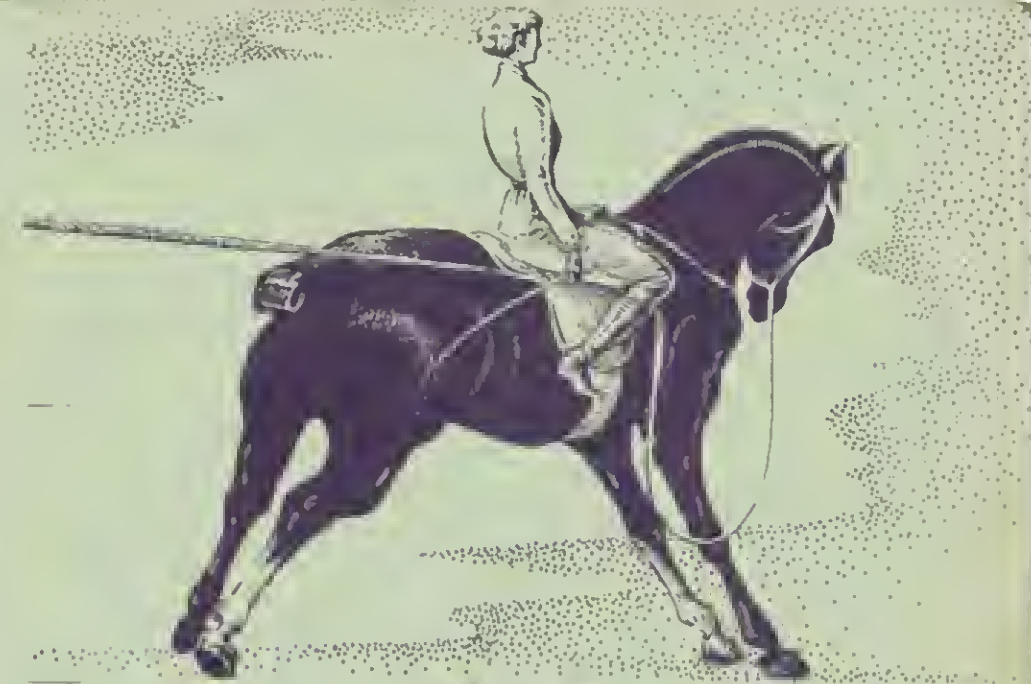
どお 似合うでしょう



おじさんが教えて

下さった緋上





# 奇譚クラブ

三月特大号

## 目次

目次裏「風流いろは歌留多」……三十九夜同人作・滝れい子画  
盤面「どう似合うでしよう」……南村俊平

### 第一グラビア

組写真 暗黒の麗人……構成・塚本鉄三  
「柔肌は裸にくびれて」「手吊りのポーズ」  
「逆海老の態勢」「二等辺三角形」

### 一口絵

女相模熱戦「激突」……宮崎京人  
滝れい子画集  
「真紅の色彩」「離室の一夜」……四馬 孝  
「密輸品運搬」「夜空に浮かぶ鳳」……南村俊平  
少女検診  
こんなにしてやろうか？……黒川不二夫  
高原の散華……滝れい子

### 第二グラビア

嵌口に憑かれて……構成・辻村 隆  
「さるぐつわ哀歌」「囁まされた黒布」  
「美しき嵌口」

### 第二口絵

緊縛フォト撮影の実際……塚本鉄三  
〈水責めと煙草責めのテーマ〉

### 編集手帖控から

追想小説「黒衣の若妻」……編 集 子 44  
女性の切腹 切腹を賭した恋……秋 寄 咲 56  
連載SM小説 宇宙のどこかで……佐治麻造 60  
通信レボ 浣腸相談……栗 瀬 長 76  
女斗美鑑考 柔肌の激突……宮崎京人 81  
シリーズNo.9 麻婆密充開機機絶話 泣き濡れし肌……鏡銀聖一郎 82

### 第三グラビア

#### Mフォト組写真 人間馬の調教

「女主人と奴隷—飼育中」 「足掻めの構図」  
「女奥にむせぶ」 「マノの境地—花豹の凌辱」  
「法悦境—足掻き台」 「捕えられた女の哀愁」

体験小説「ある娼婦」……西田 仁 99  
マニヤの手帖 ビニール雑考……阿留品又郎 106  
創作 暮夜の戯れ……井田南枝 112  
ウイクリー 僕の禪日記……東 輝一 120  
戦国哀話「残照」……石井章造 124  
ルポルタージュ 未決監に養めく……速池和邦 130  
メンチストの告白 メンス考現学……古井真哉 143

### 奇クサロン

テレビにおけるサジシーン 新年号を読んで思うこと……マニヤ 放屁譚  
通信—僕の 面白い 告白 座食職人の空想  
時「破れ 易き紙」 告白「昆 禪 記」  
マゾ女性を結婚の対象と 最近号の読後感  
したい男性からの便り 小麦色の肌  
生活の中のM 尻に敷かれる アブストラクト  
モデル嬢の飼育日記 女性切腹「夜散る梅」  
切腹 小 咄 集 女体切腹「夜散る梅」  
まぞ川 五のおん手 M写真「舌釣り」「穿孔」  
ガン作・マニヤのノート お灸を得意とする  
フエチ通信我が愛するもの 離母を求めて

告白小説 輝ける星を見て……武中 郁 163  
フィクション K子の手記……羽村京子 168  
ある生活「襪 襪抄」……関根 彰 174  
奇譚三十九夜物語……辻村 隆 184  
通信・読者モデル誕生に想う……近藤 一 200  
名作小説に描かれた女性の素足……木村 清 202  
私はこの醜態さを受する……とやま・かずひこ 208

### 第四グラビア

連続組写真 女性の切腹 「吊りへの移行」  
「マニヤの切腹ポーズ」 「耐える女体」  
「切り裂く皮下脂肪」

読者通信



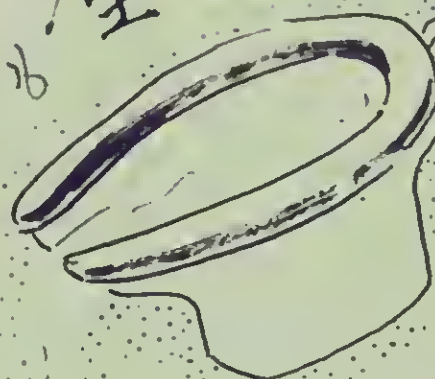
# 風流いろは歌留多

三十九夜同人作  
淹れい子画

ち

塵

積る  
つえ



トイレが  
つまる

ぬ

次四人に手錠腰縄



も

草

草便

由心



わ

我が身

縛られて人の痛さ



かみられ

る

瑠璃

女も磨けば光る



り

理屈

縛り合  
めまで  
い



か

果報は歸りから  
亭主を馬にさせ



組写真 暗黒の麗人

構成 塚本鉄三





柔膚は縄にくびれて





梨花悠紀子



手 吊 り の ポ ー ズ

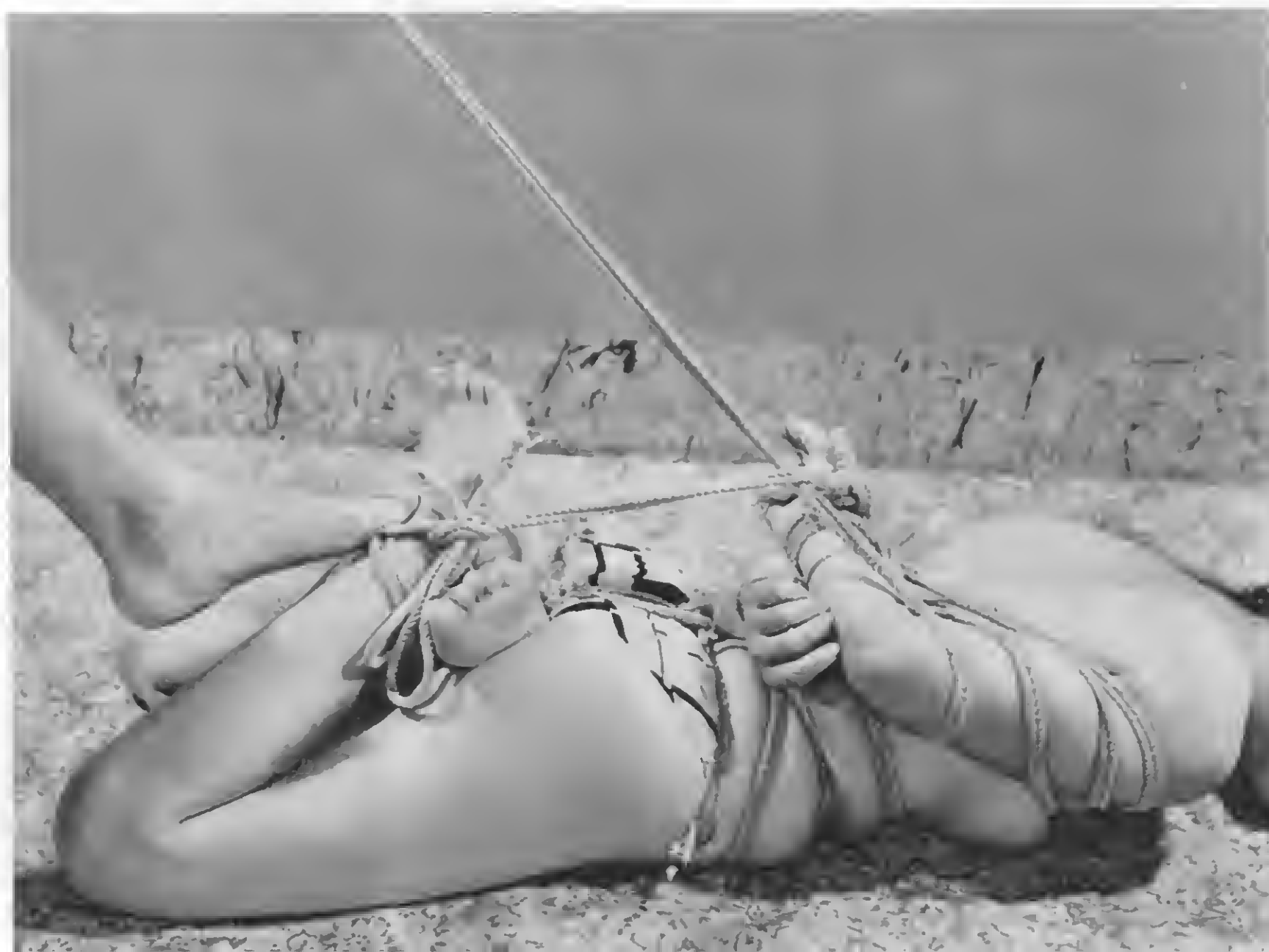








逆海老の態勢





# 二等辺三角形

大塚啓子





女相撲熱戦譜  
激突

〈雪崎京人提供〉

二人の美女は組合ったまま、地響を立てて、土俵下へ落ちた。









密輸品運搬（四馬孝画）



夜空に浮かぶ尻（四馬孝画）



少女検診（南村俊平画）

なんだか知らないが、中から悲鳴やすすり泣きが聞えてくる。





こんなにしてやろうか？ （黒川 不二夫画）

〈中華料理店主の陥穽に落ちた給仕娘〉



高原の散華（滝れい子画）

高原の湖畔で小鳥の声を聞きながら、静かに……。

# 山 口 に 憑 か れ て

辻 村 隆 ・ 構 成





せろぐつわ 哀 歡





竹野ひろ子

噛  
ま  
さ  
れ  
た  
黒  
布









美  
し  
き  
嵌  
口





梨花悠紀子

# 緊縛フォト撮影の実際

△水責めと煙草責めのテーマ▽

塚 本 鉄 三



## 撮影の要領

- 一、モデル……………絹川 文代
- 一、撮影……………塚本 鉄三
- 一、カメラ……………ローライ・オートマツト
- 一、レンズ……………ビオメタール80ミリ
- 一、フィルム……………ネオパンSS
- 一、現像液……………D76及びD72
- 一、印画紙……………月光F2
- 一、照明用具……………ウエスト三〇〇Wフラッドランプ三灯、コード、クリップ若干
- 一、場所……………和室(六帖と四帖半)

## 撮影の実際

読者からの通信や私宛の便りによると、この「緊縛フォト撮影の実際」について、大変期待を持って愛読して下さいているようで、二、三回でもって止める予定のところ、このように毎月、ずるずると連載するような恰好になってしまっている。

その間、いろいろの御不満というより、こうしてほしい、ああしてほしい、という希望を沢山頂いているので、今後は出来るだけ、そういった要望にそったものにしてゆきたいと思っている。





自分でモデルを使って実際に撮影しているのだが、どうも縄の捌き方が円滑にゆかないので、写真でもって、図解的に順を追って解説してほしいとか。或は自分では、モデルもないし、そんな機会もないので、せめて、写真の上でなりと、そんなムードに浸りたいので、そういう雰囲気をも分に盛り上げた内容にしてほしいとか。その立場によって、種々の便りが寄せられる。

中には具体的に略図を示したり解説や詩なんかをつけて、こういったアイデアでやったら、どうだと激励してくる人もある。その人の嗜好が特別に変ったものでない限り、多くの



場合、それは私達に大いに参考になり啓発させられるのである。そして沈退気味だったマンネリリズムのひとときを、そういった機会で払拭させられることがある。

只、モデルの関係や場所、時間の関係で、と言っても根本的には経費の問題に帰着するのであるが、そういった都合で御希望のものに中々着手する機会がないのは残念だが、又私達の微力のため、機会があっても期待通りのものが出来るか否かは疑問といえるが、とにかく、各種の制約の中で、努力だけは十分にやってゆきたいと考えている。

先月号で傑力作とはやされたものも、今

月号では、もうすでに陳腐と排撃される移り変りの激しい時代であるから、次々と新しい意欲を燃やして新機軸をうち樹ててゆかねばならないと思う。

### いたぶりの構想

女体に対する「責め」といっても、これは各人各様にその趣好の傾斜もちがっているので、厳密に言えば百人百色ということが出来るだろう。縄を使うということを嫌う人も、中にはあるだろうが、「責」ともなれば、先ず八、九〇パーセントのところが縄によって代表されるといってよいだろう。

さて、この縄によって女体の自由を束縛してからの責めの変化であるが、擦り責めによって、全身のうねり、自由にしている足の苦悶の表情を楽しむといった技巧派もあれば、又、整然とした縄の掛け方で美しい緊縛ポーズをとらせて、それを眺めて楽しむといった鑑賞派もある。私の知人で、自分



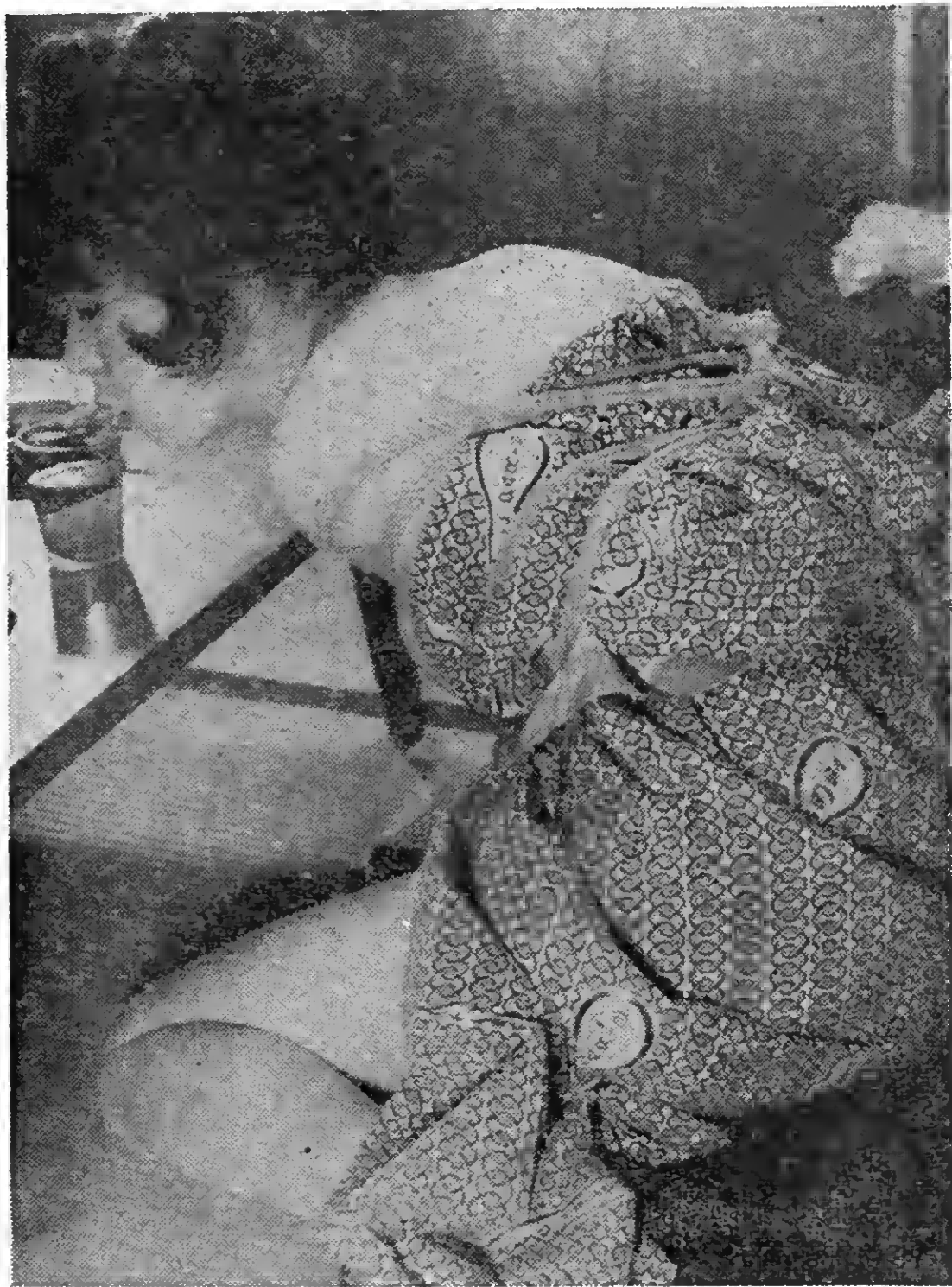
では絶対に手を下さないといった純鑑賞派の成金氏があるが、彼は芸妓を美しく着飾らせて、それを他人に縛らせて、只眺めているだけ、といった極くあっさりした趣味であった。

いずれにして、縛られた女体にマゾヒスティックなムードが漂うところに、いたくS男性の琴線に触れるわけであるから、そういった意味から、只単にひどいことをしたから、といって、責めの醍醐味が味わえるといったものでもない。実際にモデルを使ってフォートを撮っている際にも、モデルに依り、或はその時に依って、カメラを操作している者に、いたくアブ感を起させる時もあるし、又、そうでないときもある。

絹川文代嬢なんかは、どんな役柄でも十分にこなすことが出来る素質も持っているし、又、中々努力家でもあるので、こちらの意図をいち早くのみ込んで動いてくれるため、非常にやり易いし、気が楽でスムーズに仕事が行進してゆくため有難い。

後手高手小手に縛られた両手の自由のきかない文代嬢の頸に縄をひっかけて、右に引き左に倒し、いたぶりにかける動感を十幾コマにキャッチした中で、その二枚をこ





ここに掲げた。他にも何ポーズも撮ってあるので、いずれグラビヤにて口絵を飾ることがあるかもしれない。頸にまわした縄を操って、思いのままに一個の成熟した美しい女体をいたぶるということは、S男性ならずとも、まことに心楽しいことである筈だ。

可愛い口元から悲鳴を挙げ、恨みの言葉を述べ、或は時によつては、もっと厳しいたぶりの催促を吐くかもしれない。真白い足を宙に蹴りあげて倒れ伏しても、めくれあがって浴衣の裾で太股を掩うことの自由すら与えられない。こうして、この基本ポーズから

発展して、各人の好みのままに、種々の変化を与えることが出来るだろう。

例えば、鼻責めの好きな人は、頸に巻いた縄を卓の脚に固定して顔面を動けぬようにして、美しい鼻翼をひねりあげたり、鼻腔の中に紙コヨリを押し込んでクシャミをさせたりクリップで挟みつけてやったり、思いのままにいたぶりを発揮することが出来る。

又、擦り責めのお好きな方は、頸の縄を両足に固定し、足の裏をこちょこちょと擦ってやると、足の指をくの字に曲げて、擦ったさを耐えることだろう。余りの擦ったさに足を伸ばそうとすれば縄で頸が締まるので、どうすることも出来ず、海老のように身体を曲げて、目から涙を流して苦しむだろう。

お灸責めの好きな者にも、恰好のお灸のすえ場所がいくつもいくつも、貴方の目の前にその誘惑的な白い肌をくりひろげて待っていてくれる。まことに、むんむんとするSのムードが、この狭い部屋いっぱいに漂っているといつてよいだろう。

### 水責めの構想

飲みたくないという水を無理矢理に飲まそうというところにも、Sのムードが快く漂っ



自由のきかない彼女としては、自分勝手にトイレへ行くことが出来ない。何らの理由をつけて、この縄を解いて貰う必要がある。しかし、意地の悪い男は、ニヤニヤと笑いながら知らぬ顔をしている。そして、結局自分の口から、彼女が自分の生理的な欲求を訴えぬ限り、相手になってやらぬことにする。

ている。飲みたくないが、それでも、強制的にやっても飲まなければいけないという女性の立場にも、同じことが言えると思う。更に、女体に、どんどん水を飲ませるということの後に、男性にとって、まことに楽しい現象が残されているのだ。

勿論、これは両手の自由を奪ってしまっている、という前提が必要なのであるが、冷たい水をどんどんと飲まされた女性は、必然的に激しい尿意を催してくる。しかし、両手の

いわば、彼女は飼われた可愛いペットである。主人が飲ませたくば、口から溢れるくらい水を飲ませることも出来る。ぶっくりと膨らんだ水腹をさらけ出して見ることも自由も持っているのだ。羽村京子さん好みの蛙腹を、この水飲み強制によって実現させることも出来る。最初のうちは、飲めといえば、口だけでコップからジカうつしに飲んでいの





だが、やがて、満腹すると男の手によって強制的に注ぎ込まれることになる。

水をこぼさないように髪の毛をわしづかみにされて、無理無体に口中へ水が次から次へと注ぎ込まれる。やっと一杯のコップの水を死ぬ思いで呑み干しても、水差しからは遠慮会釈もなく、次の水が注がれる。

かくして、女体の腹はもうこれ以上、ふくらまないと思われるくらい、水ばかりで一杯になる。次に起ってくる激しい尿意。こらえにこらえた挙句の末、やっこの思いで訴えた「トイレへ行かせてほしい」という恥ずかしい言葉も、男の冷たい意志で黙殺される。

男の真意は、一体にどこにあるうか。彼はやおら立ち上ると一個の便器を持ち出してきた。両手を後手に縛られた不自由の身のまま、この便器の中へ用便せよというのではなにか。如何に可憐なペットとはいえ、畳の上に置かれた、この小さな便器の中へ用足しせよというのは、余りにも無惨という外はないだろう。

彼の水責めの真意をはじめ知った彼女は、もうせい一杯の忍耐力をもって、この生理的欲望を辛抱しようと決心する。しかし、そのはかない覚悟も、今まで、飲み込まれた



大量の水を体内に保有してのことだから、いつまで保つだろううか。

寒中というのに、彼女の額からは、ふつふつと脂汗がにじみ出し、やがて、がたがたと全身をふるわせはじめた。

こんな時、オシメマニヤのかたがおられたら、オシメとカバーを持ってきてくれたら、

まことに都合なのだが。特にその方に、手の自由のきかない彼女のために、オシメの装着とその後始末とをお願いしたいものだ。

### 煙草責めの構想

いろいろ変った嗜好の持主のある中に、この煙草責めといった、一風変った「女体責」



に異常な関心を示すマニヤも少くない。

両手の自由を奪った女の口へ火のついた煙草をくわえさせる。といった一種の猿ぐつわ的な役割を果させる方法が第一に考えられる

アイデアである。最も普通の紙巻煙草もいいし、長煙管や葉巻煙草も考えられる。長煙管は、長い間、これをくわえさせておくということは、実際やってみると、口がだるくなつて、落さないでいるということ

は、中々大変なことである。だからだと口から涎が垂れて（本誌の口絵にもあった）まことに若い女性としては無惨な恰好になる。

平常、煙草を好む女性であつたらよいのだが、煙草をのまない女だったら、紙巻煙早にむせて、それだけでも甚しい苦しみで文字通

り「煙草責」になってしまう。それに、だんだんと煙草が短くなつてくると、火で唇を焼くように熱くなつてくる。それでいて、くわえた煙草をはなすと、膝の上に火が落ちてくるので、それも出来ない。火のついた煙草の猿ぐつわは意地悪く彼女の心と身体とをさいなむのである。

次に火のついた煙草を鼻の穴へ挿し込むのである。或は最初、紙巻煙草二本を、それぞれ両方の鼻の穴へ挿し込んでおいて、時に応じて火をつけるといった方法も面白い。呼吸をするたびに鼻の穴の先にある煙草の火が、ぼうと明るくなり、次いで口から煙がぱつぱつと吐き出される光景は、思いだしても愉快である。

普通、女性には自分の鼻の穴に煙草をさし込まれて先に火をつけられると、非常に不安な感じに襲われる。まして、自分の両手が後手に縛られて自由がきかないのであるから、尚更その不安は掩い難いものがある。顔面の中にいる誇らしげな鼻、その鼻の穴に火のついた煙草が挿し込まれているのだから、不安になるのも、尤なことである。これは一種の鼻責めに通じるスリルでもある。

しかし、この鼻腔に挿し込まれた煙草責に

於て、最も高度のものは、猿ぐつわの併用に於て發揮される。口中に詰物をして手拭で猿ぐつわをされると、必然的に呼吸は、その二つの鼻腔を通じてなされるより外はない。しかるに、その呼吸の通路である鼻腔には、火のついた紙巻煙草が挿入されているのである。

るから、嫌でも応でも、鼻から煙草を吸い、煙を吐き出さざるを得ないのである。

煙にむせながら、涙を流しながら、尚、それでも、煙草が燃えきってしまうまで、火を灯し、煙を挙げて、悶え苦しむのである。煙草を取り除こうにも、手の自由はきかない。



なんという厳しい責地獄であろうか。煙にむせ、息苦しさで戦った末、やがて、短くなくなった煙草の火は、鼻翼を焦しはじめる。

### 基本ポーズ

以上、いろいろと空想の發展を描いてみたが、ここに掲げた基本ポーズだけでは不満足に思われる方も少なくないかもしれない。しかし、基本ポーズはあくまで基本ポーズであつて、これからは、一枚でも応用ポーズの透逸作を以てグラビヤ誌上を飾りたいと念願している。幸いベテランの優秀モデル嬢をはじめとして、新しい氣鋭のモデルの方も、協力して下さる態勢にあるので、今年は、この「緊縛フォト撮影の実際」の欄も一段と躍進したものだと思ふ。

どぎついものよりも、より美しく婉曲なものへと進展させてゆきたいと願うので、一部の方には或は不満に思われる向もおありかも知れないが、その点、何卒御諒解下さるようお願いしたい。

尚、本欄は單純な緊縛ばかりでなく、特殊な趣向のものも手がけたいと思つていたので、そういう御希望があれば、御申出次第実現したいと考えている。



新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

三月特大号



1962年 3月 号

(第16卷 第3号 通刊第163号)



＜編集手帖控＞から

最近本誌の誌上を賑わしたKK論争は、本誌読者の真面目な態度を裏付けるものとして、大変好感の持たれた寄稿であったし、それだけに、私達としても、本文の巻頭若しくは『奇クサロン』の冒頭に収載したものであった。

事の起りは、本誌四月号の読者通信で小林孝氏が本誌に対する不満を述べた文章に対して、六月号の巻頭で、中谷正夫氏が「奇ク随想」と題して批判を加えられたのが、そもそもの始まりであった。

それが八月号の巻頭で千草忠夫氏の「奇ク私見」で訂正され、以来連鎖反应的に波及し、今年二月号の「奇クサロン」に於ける中村清氏の「奇ク論争に寄せて」に至るまで、数カ月以上に亘って、中谷正夫、千葉忠夫、岩崎一生、榊一、衣軍一、宇宙人、南村俊平、中村清等の多くの諸氏が、活発にそれぞれの意見を展開されたのであった。

このような華々しい論争の場になろうなどは、当初、八月号の巻頭「奇ク私見」の末尾に八編集部注として（反駁或は賛成等の御意見をお持ちの方々は、どうかどしどし御寄稿下さるようお願いしております。）と書いた際には、考えても見なかったことだった。

公開可能の分の投稿は大体忠実に掲載したつもりであるが、中でも、千草忠夫氏の八月号の文に対して、九月号では岩崎一生氏が批判の一文を寄せられ、それに対しては、更に千草氏が十月号で激しい反駁文を投じ、それを追って十二月号では、宇宙人氏が千草氏に

詰め寄るなど、本誌ならではの真摯にして熱心な応酬であった。その取り上げられた題材が、本誌のあり方やゆき方に対して示唆を与える重要な事項だけに、私達にとっては大いに参考になったし読者諸氏にしても、代弁者の登場で大変興味深かったことだろうと思う。

数年前のことだが、特別会員を募集した時、千数百人の読者から非公開ということと、相当詳細なアンケートをとったことがある。その時に書かれた希望事項からしても、凡そ想像されることだが、四月号の読者通信に投じられた小林氏の要望も或る意味では、当然と言えないこともない。

累次の論争で本誌の立場を擁護する発言をされた方もあり、又鋭い批判の鞭を加えられた方もあったが、此の種発行物の限界のむずかしさに編集の苦心がある。しかし、言っておきたいことは、法律で規正された線を逸脱するということは、法治国家の国民としてやってならないのは勿論だが、法規

を逸脱しないからといって、何にをやってもいいということも、決して言えないということである。

○

私は最近、本誌のかくれた愛読者であるという方から、一通の手紙を受取った。その文の要旨は「私は奇譚クラブのかくれた愛読者ですが、実にすばらしいと思います。箕田様に敬意を捧げたい気持で一杯です。正に一服の清涼剤です。今後ともこの偉大な仕事を益々発展させて下さい。私も少々の年末ボーナスを得ましたので3万円位貴誌の発展のためキフしたいと存じます。つきましては、今年いや一九六二年一月号の一六〇頁に根岸悦夫氏の「春日ルミ女史に奉仕する三日間」にシゲキされておねがいしたい訳です。」という前置きはいいのだが、さて、その願いの筋というのが、「私は春日ルミ女王様に、足舐めに始まる凡ての奉仕をささげるチャンスを与えて頂きたいのです。私は女王様にのりつぶされるまで馬にしてみたいのです。そし



て最後に女王様の一匹のドレイとして女王様の尊いハ中略V頂きたいわけです。その時女王様に上記3万円をさし上げさせて頂きたいのです。どうか私の切ない希望をおききとだけ下さい。同封の封筒で女王様（ルミ様のお顔は写真で充分存じ上げています）と待ち合せの場所日時を御指示下さい。」

というわけである。短兵急と云おうか、一方的と云おうか。此の手紙の主は、若い人かどうか知らないが、近頃の若い人の中には、こういった相手の事情は一向に構いなしという自分本位の人が多い。若い人はいいとして、相当思慮分別のある年輩の人の中にも、こういった傾向の事柄に関してだけは盲目的になったり、無軌道的に走ったりして、理性のブレーキがきかない人がよくある。

うまい使い途があるように思う。見ず知らずの者から手紙一本を出して、早速、日時場所を知らせて貰えるなどという甘い夢を考えたのだろうか。マニヤの夢を破るようで大変悪いのだが、冷静に考えると、常識では及びもつかない所だ。しかし、そこが自分本位と云うか、一方通行たる所似であろう。

新年号の「奇クサロン」に載った根岸氏の文をよく読めばわかるように、私が彼と逢って半年以上も経ってから、初めて春日女史を紹介しているのである。その間、私は彼と幾度となく逢って職業や年令、経歴等から、その私生活に至るまで熟知した上で、安心して春日女史を紹介したのだ。私が彼女に紹介した、たった一人の人の根岸氏なのだ。今までに数十人にかぞえきれない位の方から、そういった希望や申出を受けたことがあるが、すべてお断りしている。

第一、見ず知らずの人から、そういう依頼を受けて、すぐ誰彼なしに、紹介するといった無責任なことが行われていいものか、どうか。これはなにも春日女史に限らず、他の緊縛モデルにしても、そのものであるし、寄稿家や投稿家についても云えることだと思うが、如何。

○

『英語に強くなる本』は軽く百万部を売り尽して、一躍ベストセラーになった単行本だが、新聞の報道によると、韓国では既に二、三の海賊版が出ているそうである。海賊版といえ、本誌のようなものにまで、海賊版が出てきて驚かされたものだ。

表紙から口絵、本文は勿論のこと、紙質に至るまで、そっくり本物と同じで、最初それを見せられた私も、余りにも寸分も違わず作られているので、これはニセ物じやないですよ。と答えた位だ。

然し、本物の本文は凸版（活版）であるのに、ニセ物の方は、平版（オフセット版）で刷ってあるのだから、よくよく見れば、玄人には、その差がわかるのだが、写真にとってシンク版にそっくり、そのまま焼付けてオフセットで刷ったものだから、素人眼には全然区別がつかない程巧妙に作ってある。それに用意周到にも、用紙まで同じものを使っているだから、この本誌の海賊版を作った奴は、決して発覚しないという自信を持っているに違いない。

しかし、他人の苦心して作り上げたものを盗んで不労所得を計る強たか者だけあって、印刷所へ支払うべき印刷代金も満足に払わないところから、訴訟問題になってきた。印刷した物件が既刊雑誌の複製というのだから、注文者も印刷所も、もともと海賊版を作って一儲けしようと企んだ同じ穴の貉で、その分け前のことで、ごたごたが起るのは、これは悪事を企む者の宿命であろう。

そんな仲間割れから、東京で行われた悪事が、遙か離れた大阪の私のところへ、その作成された複製のニセ物と共に、詳細が知らされてきた、というわけである。本を一冊買ってきて、それをそっくり複製する。なんとインスタントな出版方法であろうか。（編集子）

## 追想小説

## 黒衣の若妻

瀬戸澄子

黒衣の若妻

これは、二十数年も前のお話なのです。私が十六の時、ある方のお世話で中田と言うお屋敷に、小間使奉公をして居りました二年間に見聞した、怖ろしいお話です。

中田様のお屋敷は、東京の山手の静かな屋敷町の中でも、大きなコンクリートの塀に囲まれ、庭も広く、昼間でも人の声もしない様な静かなお宅でした。御家族は五人と、私を含めた召使い四人でしたが、大奥様とおっしゃる四十二、三の美しい未亡人の方が、総て家内の事を御命令になって居られました。

私は、大奥様附の小間使として働いて居り

ました。その頃の私は、全くの子供でございました。それから解りませんが、大奥様は、先代の後妻の方で芸者の出とかで、所謂一見して素人でない美しさだった方です。前の奥様には若旦那様が一人だけで、大奥様には、お嬢様が二人居られました。若旦那様は、私が同う三年ほど前に、お美しい若奥様をお迎えになったのだそうです。でも、私がお伺いした時には、若旦那様は、お家に居らっしゃいませんでした。ですから、御家族は、大奥様の外にとってもお若くて美しい若奥様と、若奥様と同じ年頃の二十三になれる上のお嬢様

と、二十になる下のお嬢様の四人でした。御主人である若旦那様が、どうして家に居られないのかは、数日後になって解りましたが、何でも思想的な関係で牢に入って居られたのだそうです。結婚二年目に若旦那様は、突然お屋敷に特高係の警官が来て捕えられてしまったとの事です。この大事件のため、それまでも長い病気で寝て居られた大旦那様は悲しさの余り急に亡くなられたということです。それは、そうとして、中田家には、御家族の外には、お嬢様附の小間使のお絹さん、女中頭のお里さん、それに台所の事をするお松

さんの三人は、もう十年近くも居る人ばかりです。この他に、毎日の様に来て、時には、三日も四日も泊って居る、大奥様の相談相手で経済の事をやって居られる浜田さんと言う中年の立派な男の方と、上のお嬢様の家庭教師なのか、恋人なのか解らない山下さんと言う大学生の方と、庭仕事をする岩さんと言う人だけです。

この他の人は、お出入の商人の他は、私が二年間居た間、殆んど人の出入を見た事がございませぬ。小さい子供さんが居られるわけでもなし、広いお屋敷ですから、全く静かなもので、御用も少なく、楽な勤めでした。その上、お給金が大変よく、これでは他の女中達も長く居るわけだと思います。

唯一の事、これからお話する事以外は、大奥様も、御家族の方も皆、私達に対してはとても親切で、浜田さんも山下さんも、平素は愉快な事ばかり言う方で、何一つ奉公の苦労はなかったのです。

でも、岩さんと言う人は、私には不気味な人でした。名前の様に岩の様に大柄で、年は、若いのか老人なのか解りません。多分、あれで三十ぐらいだったでしょう。顔は醜く、全くの無口で、莫迦の様な男でした。この岩

さんだけは、他の人と全く別で、一人で庭を作り、食事も、裏門の近くの小さな小屋で食べ、本宅に入る事もめったにないと言う変人振りでした。

それから申遅れましたが、もう一人、この家で、全く別者の様な生活をして居られる方があります。それは、このお話の女主人公の若奥様です。

私は、このお宅に伺って、もう三日目頃から、驚く事ばかりなのですが、第一に、驚いたのは、若奥様の姿です。他の方は、皆さん、美しい着物や洋服姿なのに、この若奥様だけは、真黒なモンペイを着て居られるのです。それも、実に粗末な布でダブダブに出ていて手首と足首を出したへてんなものなのです。初めの日は、何かお仕事の都合と思いましたが、毎日毎日その姿なのだから驚きました。

日が過ぎるにつれ、私は、いろいろの事を皆から教えられましたが、ここで働くのには絶対守らねばならぬ事があるのです。それは皆、奥様に関した事です。

一、若奥様だけには絶対に言葉を掛けたり、返事をしないこと。

二、何を見ても、若奥様に関しては喋らない

こと。

三、若奥様と呼んではならないこと。

四、何をして居ても手伝わないこと。

以上の四つの事でした。これを守らねば、即日、この家を追出される事になると、幾度も念を押されたのです。

私は、一カ月過ぎ、二カ月たつにつれ、この四つを守る事が、どんなに難しい事かを知りました。と申しますのは、私は、若奥様が可哀そうでならなかったからです。

朝は、誰よりも早く起き、晩は遅くまで、女中達より忙しい荒仕事をさせられて居られるのです。それだけではありません。大奥様からは犬畜生の様にされ、お嬢様を始め、皆がそれはそれはひどい扱いをするのです。大奥様と上のお嬢様の町子様は、特に激しいのです。

お二人は、あの真白な優しい若奥様の顔を平手で毎日の様に打つのです。いえ、平手の時はよろしいのです。時には鞭でビシリと打つ事もございます。蒼白い頬が、パッと桃色になる時等、私は、自分が打たれた様に思っ

ある寒い冬の朝の事でした。フト私は目が覚めまして、まだ起るのには二時間も早い時間なので、お便所に行つて帰ろうとしますと、お風呂場で水の音がします。オヤと思つて、お風呂場に行つてみますと、まだ外は真暗なのに電氣をつけ、お風呂場を洗つてゐる氣配がするのです。

硝子戸から覗きますと、この寒いのに、若奥様が裸で、バケツの水でお風呂のタイルを洗つて居らっしゃるのです。どうせまた大奥様の御命令なのでしょうが、余りのお氣の毒さに、私は、ソツとお風呂場に入りました。お手伝いをしようと思つたのです。

若奥様は泣いていらしたのでしようが、氣配にハツとなさつたご様子で後も向かず「お母さま、もうすぐ済みます」と一生懸命にタイルを拭いていらつしやるのです。

私は思わず「若奥様」と叫んで、お手を取ろうとしたのですが、ギョツとして立ち止りました。それは、その時初めて、若奥様のお肌を見たのですが、まあどうでしょう。思った通り、色白で美しいお肌なのですが、背中に痛々しく血のにじみ出た線が何本も何本も見えるのです。

若奥様は、入つて来たのが大奥様でないと

わかつてホツとされたらしく、手を休め、私の方を見られました。

「まあ、あなただったの」

と溜息をおつきになると様子は、お美しいだけに余計おいたわしい感じでした。何と言ふ美しい瞳でしょう。フランス人形の様な長い睫には涙が一杯になって居られました。私は黙つて、若奥様の手から雑布を取ろうとしました。

「いいの。さあ、向うへいつて。後で叱られることよ」

とニツと淋しくお笑いになりました。私はその顔を見たとたんに、訳もなく泣けて来ました。

そして、泣き声を押える事が出来そうになつたので、ここに居ることが知れては大変と逃げるように部屋に帰つてしまいました。

この事があつてから、私は出来る限り若奥様の味方になつてお仕事のお手伝いをしようと考へ出しました。大奥様も私には、とても優しくして下さいますが心の中では鬼婆のやうに思えてなりません。又、お嬢様方の行動にも、自然と充分の注意を払うようになりました。

そうして氣を配つて見ると、今まで全く氣

のつかない事が解つて来ました。お嬢様達はよく芝居や映画にお出掛になりますが、若奥様は一步もお屋敷から出ません。庭にさえ出られません。若奥様が一人で行動する事は全くないという事にも氣がきました。何か仕事をして居る時は、必ず誰かが一緒に居ます。又、庭では岩さんが常に番をしていることも解りました。皆が監視出来ないような時は奥の一間に監禁同様になつて居ります。尤も、これは後で知つた事です。若奥様自身、本当に逃げる氣があれば出来ない事でもなかつたでしょうが、若奥様は、どう言ふ訳か、あんなに激しい責めに会つても、ジツとして居らつしやるのです。又、浜田さんや山下さんまでが、若奥様を苦しめる役を喜んでして居る事が解りました。それから、あの白痴のやうな岩さんが拷問役の主役だという事も発見しました。

それは、ある晩のことでした。浜田さんがお泊りになる日でしたが、何が嬉しいのか皆さんとても御機嫌がよく、宴会のやうな騒ぎでした。女中達は何時もより早く寝むやうにと命令されました。女中頭のお里さんは「さあ、さあ、早く寝ましょうよ。こんな時起きてると、またあのいやな声を聞かなきゃ



いけないからね」

と意味ありげに、お絹さんと顔を見合せて居るのです。私も仕方なく、お松さんと隣の部屋で床に入りましたが、何となく若奥様が心配で眠れません。隣のお松さんの寝息が耳につくので益々眠れないのです。お里さん達も眠ったらしいと思ったので、私はソツと床を出ました。

寒さにガタガタするのを怯えながら、私は足音をさせぬように、暗い廊下を奥の方へ忍んで行きました。

人声のするのは、一番奥の廊下の突当りで、若奥様の部屋です。この部屋には廊下に頑丈な格子戸があり、大きな鍵がかかって居るのでいつもは行けないのです。ところが、幸いなことに、その夜は格子戸が開いていました。

ぬき足、さし足で入って行くと、部屋からの人声も、次第にハッキリします。部屋の戸は閉っていました。その時、私はある事に気がつきました。それは若奥様の隣の部屋が納



戸になっていて普段使っていない事です。それも、その部屋と若奥様の部屋との間に硝子戸があることを思い出しました。私は納戸に入ると、音のしないように荷物の間に忍び入りました。小柄な私はこうした時は便利でし

た。ところが、硝子戸は私の期待と違っていました。ところが、硝子戸は私の期待と違っていました。唯、僅かに、上部の一段だけが素通しで、それも蜘蛛の巣や汚れでまっくろでした。私は荷物の上に昇ってみました。音のしないように荷物に乗るのは楽では



なく一汗かいてしまいましたが、それでも高い所から、やっと若奥様の部屋を見下すことが出来ましたが、一眼見て、私は胸が早鐘のように鳴り出しました。

部屋の真中辺りに置かれてある台に、若奥様が大の字になっているのです。そして、両手、両足とも四方の壁から延びた細引で強く曳かれ、首は台から垂れ、黒髪は床まで下っています。その台の廻りには、大奥様、浜田さん、上のお嬢様、それに岩さんが椅子に掛けたり、立ったりして若奥様を見つめて居るのです。岩さんは、何か太い棒の様なものに、若奥様を突きまわって居るのです。その度に、若奥様は猿轡をはめられてはいましたが、それでも呻き声が聞えます。

私は、怖ろしさに慄えるのを覚え目を閉じましたが、同時に何とも言えない好奇心で見ないわけには行きませんでした。

「岩さん、今度はこの綱をもっと締めておくれ」

大奥様の声です。岩さんは、棒を小脇にかいこんだまま、若奥様の乳房の下を締めつけている細引に手をかけて更にぐいぐいと締め始めました。途端に若奥様の白い体が、ググと苦しげなもたえ方をするのがよくわかり

ました。

大奥様達三人は、お灸の道具を持ち出してきて、それぞれ勝手なところにもぐさを盛り上げてから大奥様が、若奥様の猿轡を取りました。

「さあ、お前の返事一つで許されるのだよ。あの子供は岩吉の子供だと牢の信一に手紙を書けばそれで済むのだ。岩吉はお前を愛してるのだよ。さあ、返事をおし！」

「……」

「そうかい、いやならいいよ。さあ、火をつけて」

と大奥様が命令しました。

「アレ……お母様……アッ！許して」

若奥様が叫びました。大奥様は余り若奥様の声が高くなると、手に持った何かの布で口を押えます。両肩、腕、乳房から、お灸の煙が一斉に立ち昇り始めました。

「どう？、手紙を書くかい……お前が、どんなに強情を張っても信一とは別れさせますからね」

憎々しげにいいながら大奥様は、又、新しい灸を据え始めるのです。若奥様の苦しげな様子は眼を覆いたくなるほどでした。

私は救けることはもとより声一つかけられ

ない身の上が情けなく思われ、同時に、余り部屋を留守にすると目ざといお里さんに発見されたらと心配になって、部屋に帰ってしまいました。

しかし、私は、それから機会ある度に見に行く事にしました。でも、大抵は廊下の格子が閉まっているので、ガッカリしてしまう事が多いのです。

若奥様が、いつもあの黒い手首まであるダブダブの着物を着せられているわけも解りました。あれは、体についた責め傷を小間使達に知らせないためでした。

そんなことがあってから若奥様を責める事は日に日に激しくなってきたようです。若奥様は私が伺った初め頃は蒼白いお顔でしたがフックラとした頬をして居られたのが、今では眼が窪み頬が骨ばった様に思えました。

ある日、大奥様の御命令で若奥様の生んだお子様が預けられて居るお宅にお金を持って行った事がございます。帰って来てから、偶然の機会に廊下で若奥様に声をかけられ「ねえ、子供元気だった？」と問われ、「御元気でしたわ」とお答えしたのを、運悪くお里さんに聞かれてしまったのです。私は、叱られただけで済みましたが、若奥様は早速、大奥

様の部屋に呼ばれたまま夜になるまで、お姿を見かけませんでした。その翌日も見えません。私は若奥様にすまないと思ひ。何とか、若奥様の様子が知りたいと苦心致しました。第一、若奥様が何処に居られるか心配だったので。

大奥様の部屋には、それから何度も行きましたが居らっしゃいません。二階の上のお嬢様は山下さんと遊んでいらっしゃいますし、下のお嬢様はお友達と御旅行でお留守です。若奥様のお部屋でもない事は廊下の格子が開いているので解っています。

私は、それとなく大奥様やお里さんの行動を見て居ました。そして、やっと気がついたのは土蔵だということでした。

床に入っても寝つかれない私は、その夜、遅くなってから庭に出て、別棟になっている土蔵へ忍んで行きました。鍵は、何時も置いてある処を知って居りました。

今夜は幸いな事に大奥様の処へは、浜田さんが、上のお嬢様の処には山下さんがお泊りだから明日の朝までマージャンをしたり、お酒を飲んだりして土蔵にはお出になるまいと思ひましたのです。危険は百も承知でした。若し、発見されて追い出されてもいいから、一目、

若奥様にお逢いして慰めて差上げたいと思ひました。そこで大胆にも、鍵を持ち出して、土蔵に出掛けたのです。

倉に入ると持って来た蠟燭に火をつけました。倉には電気がありますが、これをつけると思ひ、発見されそうだったので蠟燭にしたのでした。

荷物と私の影が、大きくゆらゆら揺れて不気味でした。辺りに気を配りながら奥に進んで行くと、荷物と荷物の間に広い場所があるのです。そこに若奥様が居ると思ひ、私の力ンは適中しました。しかし、私は生れてからあんな怖ろしいと思ひた事はございませんでした。

若奥様は例のように両手を斜め上に上げ、土蔵の板壁に縛りつけられて居るのです。両手首の細引は、釘で板に短く打ちつけられ、髪の毛は何本か束にして一本一本、壁に打たれた釘にからけてあるのです。このため、若奥様は下を向くことも、何も出来ないだけでなく、目は吊り上り、広い額の生え際からは血が浸み出ているところさえあるのです。

口は猿轡をされて居ます。若奥様の体は弓のようになって背中には太い薪を五、六本一緒にしたのを背負い、これが、脇と胴に結び

つけられているのです。両足は折り曲げられ、合わされた足首と太腿がギリギリと細引で縛られ、その膝のところにも一本太い薪が差入れられていて、若奥様は膝頭で立って居れるのです。

しかも、膝の折れ曲った所に差入れられた薪は壁の鉤からピンと綱で引かれているではありませんか。

これでは体の重みは何処といって一箇所にかかる事は出来ません。結局は両の手首と僅かに両膝ではないでしょうか。こんな姿で何時間も居られるものでしょうか。私はともかく何とか若奥様を楽にして上げなくてはと思ひ、綱を解こうとしましたが、その結び目はとても固くて、とても私の力では、どうにもなりません。仕方なく猿轡だけでもと思ひ直して、大急ぎで取りました。でも、これでは若奥様は身動き一つ出来ないのです。

「あのね……水、水を……」

若奥様は、かすれた声でいわれました。私は水を探しました。幸い横の台に大きな水差しがありましたので、それをお口に持って行こうとしましたら、若奥様は強く首を横に振って

「駄目よ、その水は……シ……塩……水なの……普

通の……」

といわれました。首を振ったため若奥様は、それは痛そうになさって居られます。私はあわてました。でも水を取りに本宅に行く事は出来ません。土蔵の外へ出てどうしようかと考えた末、庭に水散き用の水道があったことを思い出して走りました。

でもその水道は洋間の横にあるのです。洋間では皆さんが麻雀をやって居られます。薄氷を踏む思いでしたが、そっと音のしないように倉にあったお茶碗に水を汲みました。水道の蛇口から音をたてずに水を汲むことが、どんなにむづかしいものかを私は初めて知りました。洋間では大声で何か笑ったり、喋ったりして居ります。皆さんが眠る前には必ず、倉に来るものと思い、ホッとする間もなく大急ぎで土蔵に帰り、若奥様に水を差上げるとニッコリと淋しく、それでも嬉しそうにお笑いになりました。

「有難とう、塩水ばかり飲まされて苦しかったわ」

細い声でした。私が綱を解こうとすると「いいのよ、もうすぐ許されるわ……それよ、あんたが見つかったら大変よ」と心配そうに言われるので、私も仕方なく

あやまりながら元通りに猿轡をし、明け方、又来る事を約束して倉を出ました。そして、もとのところへ鍵を返して部屋に帰ってホッとすると同時に、大奥様達が洋間から出てくる気配がしました。

「さあ、眠る前に、様子を見て来ようよ」という声が聞え、大奥様と浜田さんが倉に行かれた様子でした。

私は、「今夜は一睡もしまし」と決心しました。時計は二時を打ちました。三時を打った頃、大奥様もお帰りになり、暫くするとお屋敷中が寝静まりました。私は再び部屋を出て台所から玉子を二つ持出して、倉に行きました。冬のことですから、六時頃まで明るくなる心配はありません。

倉に入ると、若奥様は前と違って床の上に倒れて居られました。両手は後手に縛られ両足は別々に曲げられたまま矢張り固く縛られて居りましたが、棒や薪は取り除かれています。だがどうでしょう、若奥様の髪の毛が短く切られて居るではありませんか。驚いて見ますと、板壁の釘には髪の毛がからまったままになっています。きっと取る事が出来ないのて短く切ってしまったのでしょうか。

私は若奥様をそっと抱き起しました。若奥

様は氣を失って居らっしゃったのです。でも猿轡を取って幾度か肩をゆすって差し上げるとやっと氣がつかれました。私は持って来た玉子を茶碗に割りました。生玉子は一番元氣をつけるのによいと父が言って居ましたの思い出したからです。

「私、これで二日間、何にも食べていないのよ！」

若奥様が悲しそうにおっしゃいました。私は後手の綱を解きましたが、足の方は固くてどうしようもありません。生玉子を飲んだ若奥様は、氣のせい少し元氣になられて、細い声でお話をなさいました。私が今度倉から出されたら、何とかしてお逃げなさいと申しましたら

「逃げたら、私は一生駄目になるわ。例えここで殺されても勝てないのよ。あなたはまだ若すぎてわからないかも知れないけれど、私は夫と別れる事は殺されるよりもいや。子供を捨てる事も出来ないの。……でも、もう、こんなお乳になっては子供に飲ませられないわね」

と、ホロッと涙をお流しになるのです。実際、先刻は、それ程とも思わなかったのですが、今、近くで見ますと、これはまた、何ん



とむごいことをする人達でしょうか。片方のお乳は、紫色に脹れ上り、片方は、乳房のふっくらした処に、細い針金を通して輪になっ

ているではありませんか。これは、今通したばかりなのでしょう、両側から血が流れ出たままになって居ります。それだけではなく、

乳房のふくらみには、お灸の跡、針の穴が黒く点々として居ります。

私は夜明けまで若奥様とお話をしているいろろのお約束をしました。子供さんの預けられて居る家の番地を教えて上げたり、牢に居らっしゃる若旦那様との連絡を取る事や手紙を出す事等です。若奥様は希望に輝いたお顔の色になりました。

その翌日、幸いにも若奥様は許されて倉から出られました。私は若奥様のお手紙をそつとことずかり、自分の家に送り、そこから、若旦那様の処に出すようにして貰いました。

若奥様とは、あの黒い着物で激しく働かされている間、巧みに連絡を取る事が出来ました。しかし、こちらからは紙一つ差上げられないのです。それは、大奥様の日々のお調べが厳重だからでした。でも半年以上も私達の間のこの秘そやかな連絡は知られませんでした。

ある日、私が預け先からことずかつて来た赤ちゃんの小さな写真を見せて



差上げたところ、若奥様は、この写真だけはどうしても手離さないとおっしゃって持って行かれてしまいました。

ところが、遂に、これを大奥様が発見されてしまったのです。サア大騒ぎです。誰が手渡したのかと激しく女中達が調べられました。特に赤ちゃんの預け先に行く回数が多い私が一番疑われたのも当然です。

私は、知りません、存じませんの一点張りで押し通しましたが、その夜、遂に大奥様に連れられ土蔵で調べられる事になってしまいました。

土蔵には前の日から若奥様が監禁されて居りました。お嬢様方も浜田さんも岩さんも一緒でした。

そこは、この前と違って荷物が取り片づけられ、広くなっていて床の中央に若奥様が坐らせられておられました。その囲りに皆が座を占めるのを待って、大奥様が私を睨んで言うのです。

「お前は今迄こんな可愛がって来たのに、大変な悪い事をしたものだね。お前が知らないと言うなら、もう訊ねないよ。お前は他人様の娘だから、打ったりなどはしません。唯、そこで見物して居ればいいのだよ。体に訊く

のは家の嫁に訊ねますから。さあ、始めましょう。浜田さんと岩吉お願いしますよ。この女は強情で普通では仲々白状しませんから、今日は極刑にかけますからね。先ず岩吉、その薪を並べて、その上に坐らせるのだよ。そう、それから細いのを曲げた足に入れ、細引で縛って……そうそう、浜田さん、済みませんが、両手を後で押さえていて。それから、庭の石があつたろう、あれを膝の上に乗せて……」

忽ち若奥様の猿轡の中から唸き声が湧き上るように洩れて来ます。

「ホホ……どう、これから拷問が始まるのだよ。お前は、スミから写真を貰ったのだろう……」

大奥様が憎々しげに訊ねます。若奥様は私をかばうおつもりでしょうか、首を横に強くお振りになりました。

「右手を出させて……」

大奥様が、若奥様の右手を掴むと机の上に乗せ、手の平を開いて押さえつけました。

「岩吉、これを押えて居るんだよ」

と言うと自分は太い針を持ち出し、若奥様の爪の間に一本ズブリと刺し入れました。「ヒイ！」という悲鳴が猿轡にせかれながら

も強くほとばしって私の胸をつきます。

「どうだい、スミが犯人だろう……」

若奥様は、それでも首を横に振るのです。

若奥様が首を横に振る度に、刺される針は一本一本と増えて行きます。机の上には血が流れております。それをどうでしょう。お嬢様方は、さも面白そうに眺めて居るのです。そればかりか、上のお嬢様などは、「私にもやらせて」と、今度は浜田さんが掴んで居る左手を釘抜きを持って来て、指の爪を挟むではありませんか。

「私は、お母さんのように血の出る責めよりこの方が好きよ」

と、一本一本指先を挟んで行くのです。この人達は一体どういう神経の持主でしょう。

私は、もうたまらずに大奥様に

「私が持って来ました。どうぞ、若奥様を許して上げて下さい」

とお願いをしてしまいました。

「そうでしょう。お前以外にはないものネ。

お前は、こっちへお出で。さあ、私はこの子連れれて向うへ行きますから、後は好きなようにして白状するまで責め続けておくれ」

そういう残して大奥様は私を連れて倉を出しました。そして、その日のうちに私はお屋敷



を追出される事になってしまいました。

「お前が、ここで見た事を他人に少しでも喋ったら、すぐにお前は泥棒としてお巡りさんに捕まるからね。チャンとそうした順序は作り上げてあるのだから。家の女中や浜田さん達が口を揃えて言い立てたら、お前などはすぐに牢屋に入れられるよ。その代わり、何も喋らなかつたら、これからも、いろいろ世話をし上げるからね」

と何度も言われました。

私はお屋敷から帰っても両親以外には何事も喋りませんでした。親達も、この事については何も触れない方がいいと言うので、その後も何も起りませんでした。そうこうしているうちに戦争になるやら、私の身の上にもいろいろの事が起り、忘れるともなく、忘れてしまったのです。

ところが、先日偶然に小間使いのお絹さんに会ったのでございます。懐しさにいろいろ話をして居る間に昔の話が出て参りましたので、私は若奥様の事を、胸をドキドキさせて訊ねました。

「本当に、お互に、あれはいやだったわね。あんたが追い出されてから一年程で私も出ちまったから、その後のことは知らないけど」

お絹さんも当時のこととなると眉をひそめます。

「あれからも毎日のように拷問が続いたので若奥様は半死半生になってしまったんですって。私達は若奥様は、もう死んでしまったのだらうと噂して居たところが、一カ月程して、又、例の黒い着物を着て働きに出て来られたわ。でも、綺麗だった顔は痩せ衰えて、お婆さんのようになってネ、ほんとに気の毒だったワ。前から口はきかなかったけど今度はそのせいで全く何も喋らないので不思議に思ってたたら、何でもお里さんの話では、毒物を飲まされて喉が枯れてしまったのですって。私達、それを聞いてゾーッとしたワ。それからしばらくして若旦那様がお帰りになってネ。でも、それは召集されたので牢から出して貰ったそうで、たった二日間しか家に居られなかったのよ。若旦那様は、その間、片時も若奥様を離さずいたわって居られたわ。

私は若旦那様が泣きながら、済まない済まないって若奥様の体を洗って上げて居られるのを見たの。ほんとにあの鬼婆ったら、鬼どころじゃないワ。あれは悪魔中の悪魔よ。

若旦那様は、どんなに心残りで出征した事でしょうね。その後も再び例の如しよ。戦争

で物資は少なくなるし、私もおいとまをする事になったの。多分あれから若奥様は死んだのではないかと思うの。本当に怖ろしい事ね……」

私は、お絹さんの話を聞いてから、再び、あの頃の事を思い出しました。それで、こんなお話をするわけです。

私は今でも不思議に思います。何故あんなに責められながら、若奥様は逃げ出さなかったのでしょうか。それに、あんな非人道な人達を警察や、お役所の人々が気付かず置いておく社会です。でも天は敵の手を借りて、懲しめられました。

中田様のお屋敷は、一番最初の空襲で焼け、悪魔のような人達は今は何処にどうしているのか知りませんが、幸福である筈がないと思います。

何とか、その後の事を知りたいと思って、今迄誰にもお話をした事ないお喋りを致したわけでございます。

もうあの時の赤ちゃんだったお嬢様も、立派な娘さん、いえお嫁さんになっていられるかも知れませんが……。

(おわり)

## 女性の切腹

## 切腹を賭した恋

数・寄

咲

戦争の犠牲者は、いつの世にも、女性でした。だけど、わたくしたちは、戦争の非文化性を悲しんだり、男性のわがままをいきどおるまえに、もっと人間の肉の奥底に燃えている、真赤な性の炎に目を向けなければならぬいでしよう。明治維新の戦争に従軍した、官軍の部将（監軍という肩書なんです）三好軍太郎の手紙をお目にかけましょう。これは、維新の奥羽北越の戦争の中で、最大の激戦といわれている長岡落城の後で、軍刀がのこぎりの刃のようになってしまった三好が、新しい軍刀を、急送してくれるように依頼した手紙です。

「……御詮索下され、早々御送り方、伏して望み奉り候。新潟に至るに、刀が見苦し

くては、登楼ができかねもうし候。御一笑下さるべく候。」

これは、長岡落城の五日目に、三好監軍が、郷里の尾川、神保二人の侍に出した手紙です。刀が破損しては、新潟へ行っても、みっともなく、遊女屋へ登楼することができないから、早く刀を送ってください。越後第一の色街をはこる新潟の遊女屋で、久しぶりで越後美人に接したい、というのです。まことに哀切な願いを、この手紙は伝えております。

奥羽征討軍の参謀世良修藏は、福島遊女屋で、刺客に刺し殺されております。故郷を出発してから幾月、脂粉の香りにも遠ざかって、毎日毎夜、山に寝、野に伏して、殺りく

の連続に、明日の命も知れません。絶望の底に、ただもえにもえるのは、青春の血だけです。それは、平和な時代に生きるわたくしたちが、どんなにしても想像し得ない、性の暴風だったと思います。

官軍も幕軍も、将士のこんな気持のはけ口を、芸妓や、遊女に向けるようにしました。しかし、一般の女性への事故は、到底防ぐことができませんでした。しかし、両軍とも、さすがに日本のさむらいの軍でした。軍紀の厳正を命じました。もし、この規律を乱す者あるときは、即座に切腹を命ぜられました。奥羽征討軍の記録によっても、大戦争の直後には、一部隊で、毎日三人か四人の切腹者が記されております。

諸国の浪人や脱藩者の集合―鳥合の衆であつた新選組でさえ、婦女暴行―脱走―捕縛―切腹というコースをたどって、結極、腹を切

って死んだ若者が、十数人ありました。まして、正規軍であり、規律の厳正であつた官軍では、女のこと切腹して死んだ青年たち

は、維新の前後に、何十人あつたことか、たいへんな数だと思ひます。

ある年の四月の末でした。盤梯山に登るのが目的で、わたくしは、学校の先輩に連れられて、上野を發つて、その晩は会津若松に泊りました。あくる日一日は、遊覧客のお定まりのコースで、昔の城を見物したり、飯盛山で白虎隊のお墓に詣でたりしました。その時、先輩が、白虎隊の飯沼貞吉の家を知っているから、訪ねて見ましよう。と申しますので、云うままについて行きました。そこで偶然、維新の戦争のことをよく知っている老人にいました。その老人のお父さんが、幕末に会津藩士の家の下僕をしていたので、父から聞いた話だと云つて、色々珍しい話をしてくれました。

この下僕の主人である藩主は、会津の城下からはだいた離れた田舎に住んでいました。主人と老妻との間には一男一女がいましたが、長男は京都の戦いで討死にし、主人と妻は城に入り、娘は、いわゆる女白虎



隊の一人として、薙刀を持って出陣しました。

慶応四年旧八月（新暦の九月末）のことです。まだ会津のお城は落城しませんが、四方の国境から官軍の諸隊がなだれ込んで、この会津藩士の邸の附近も、幾度か両軍の接触の地点になりました。どこの家も立ち退いて、空家ばかりです。主人の家の門の近くに、小さな住居をあたえられて住んでいたこの下僕は、立退きもせず、それとなく主家の留守を預るつもりで、戦乱の真中にひっそりと毎日を過しておりました。八月のある朝、ひやりと涼しい初秋の朝もやの中から、一人の若い女性が、あたりをばかのように、主家の門に近づきました。「あっ、お嬢さんだ。」出陣の時の薙刀も持たず、衣服もよごれてはいましたが、まざれることもない主家の一人娘です。女性の姿は、吸い込まれるように脇門の中へすべり込みました。下僕の脳裏には、直観的に、「敗戦！ それから自刃！」ということがひらめきました。早く自分の住居へ帰って、温い食物でもこしらえて持って行つてあげよう、と引返そうとする瞬間、——こんどは恐ろしいものが迫ってきました。官軍です。お嬢さんの跡を追いかけるようにして、官軍の——ああ、少年隊士です。今開いたば

かりの主家の脇門へ、いきおいこんで走り込みました。さあ大変。何事が起るだろう。下僕は立ちすくんでしまいました。耳をすまして、恐れでわななく膝を、じっとおさえました。ことりと音がして、脇門の扉が閉まり、かんぬきが下されたようです。そうして、あとはひっそりと物音一つもしません。一ときも、二ときも、主家はしんと静まりかえってまるで廃屋のようでした。

城下の街道筋にあたるこの辺の道は、夜となく昼となく、官軍の縦隊が進撃して行きました。下僕は、主家のお嬢さんの運命が気になりつつも、外へ出ることができません。住居の納屋の中で、息をこらして、官軍の通り過ぎるのを待ちました。かれこれ五日か六日も過ぎたでしょう。風のたよりに、若松のお城も、とうとう落城して、藩主は官軍に降参したとのことです。藩の重役はじめ、藩士、藩士の妻や、娘さんたちまで、あちこちで、切腹した、自刃した、といううわさが伝わってきました。

下僕は、自分の意気地なさ、不甲斐なさにとうとう主家のお嬢さんを見殺しにしてしまった。腹を切って、主人に申しわけをしようと思いました。何はともあれ、主家の動勢を

と違って、官軍の行き交う道を横切って、主家の脇門を押してみました。内からかんぬきがかかっている開きません。裏口へ廻って、裏木戸から台所へ忍び込みました。

あっ血です！ 洗い流しのところが、血だらけです。下僕は、心の中にお嬢さんに詫びました。自分の意気地なさのために、やっぱりお嬢さんは殺されたのだ。あの追いかけて来た官軍の少年隊士だ。お嬢さんの仇に一太刀でも報いたかった。それにしても屍骸が見つかりません。血は、台所から廊下を通ってしたたっています。血の跡は玄関の隣りの室へ入っています。

下僕は、夢中で玄関の室の襖を開けました。屍骸です。お嬢さんの屍骸です。あっ、もう一つ屍骸があります。官軍です。あのいつかの少年隊士です。下僕は、初めは、切り合って相討ちになったのかと思いました。それにしても、室は、血でよごれてはいませんが、整然と片付いています。その上、襖の唐紙には、墨痕うるわしく、和歌が書いてあります。お嬢さんの筆です。辞世の和歌です。室の中には、いつも主家で見なれた陶器の水差しが一つ、半ば血にまみれて、まだ水が入っていました。二人の屍を近寄って見ると、二人と



も上半身は裸なので、やっとわかりました。お嬢さんも、少年隊士も、別々に切腹したのでした。ことにお嬢さんは、諸肌脱いで、みぞおちから下腹へ縦に、それから左の腰骨のところから、右上りに、右のあばら骨のうしろまで、見てもぞっとするような、大きな切り口が、お腹いっぱい口を開いていました。秋の日ざしを浴びた玄関横の窓から、銀蠅が飛んできて、とび廻っていました。

「暑い盛りに、二日も三日も手をつけていない屍骸ですし、その上、切腹した腹から大腸小腸やその中味がとび出しているのです。その臭気はたいへんなものだったそうです。」

老人はそう云って、又つけ加えました。

「お嬢さんは、官軍の若者がいしかったのですね。お嬢さんも、少年隊士も、しよせん生きてはいられない人たちだったのです。切腹を覚悟した二人が、死を前にして、この世の名残りの生命を楽しんだって、誰れがそれを責めることができました。」

「腹一文字にかき切った少年隊士が、咽喉が渴いて苦しがつっていたので、お嬢さんは、自分も短刀で腹を切っていたながら、台所まで歩いて行って、水差しに水を酌んで来たのです。だからその水差しは、持つところも、飲むと

ころも、血が黒くこびりついていました。少年に末期の水を吞ませた上で、お嬢さんは、心しずかに、自分のお腹を、短刀で切り目も長くかき切ったのですね。」

お爺さんは、一息ついてから、会津の人の前じゃあ、あんまり大きな声では云えませんが、敵といったって、やっぱり日本人ですからね。お互に、花も咲かせないで死んで行く相手が、可哀そうだと思ったのにちがいません。お嬢さんとしては、敵方と通じた、お詫びの気持ちから、女だのに、腹をかき切って死んだのだと思います。」

下僕は、屍骸の始末にこまりました。棺が手に入りません。自分の住居へ帰って、ありあわせの板で、手製の棺を作りました。十五才になる長男に手伝わせて、庭に大きな穴を掘りました。親も子も、手拭で鼻と口をおおって、とにかく二人の屍骸を棺におさめて、邸の庭に仮に埋葬しました。むせかえるような屍臭のこもった室の中で、はらわたがお腹からずるずるはみ出した屍骸を、抱き上げたときの気持ちは、一生忘れることができないと、お父さんは云ったそうです。

「お嬢さんが辞世を書いた歌は、今だに大切に保存してあります。切腹に使った短刀や、

そのほかの遺品もあるはずですが、ご案内しましたようか。」

お爺さんは、親切にそう云ってくれました。わたくしたちは、翌日、盤梯山へ登る予定がありますし、史跡や、史料をしらべるつもりで旅行ではなかったもので、そのまま老人と分れて宿へ帰りました。今になって思えば、見せてもらえばよかったと、残念に思っています。

追記 会津藩士の娘と、官軍の少年隊士とが、いつどこで知り合ったか、邸の玄関に駆け込んでから、何をしていたか、二人が切腹したのはいつか。これは、お爺さんのお父さんにあたる下僕には、わからなかった筈で、お爺さんは、これ等の点については、何も話してはくれませんでした。前後の事情から、おおよその推測はできますが、推測で書けば、フィクションになって、真実が失われます。説明が足りなくて、興味に乏しい点は、読者にいく重にもお詫びいたしますが、事実を尊重する気持ちからですから、どうかご諒恕を願います。

(おわり)

## 長篇連載SM小説

## 宇宙のどこかで

……／＼或る奴隷囚の告白より▽……

佐 治 麻 造

## 保管奴隷 (三)

拘置所の中に居ますと、非破廉恥罪の囚人は私が以前に居た時とは全然異なる取扱いを受けて居るのがよく判りました。彼等は別の監房区画に収容され、刑が確定する迄は私服を着ることが許されて居るのです。監房の外に出る時だけ前手錠と、そしてせいぜい腰枷位のもので、はき物すら穿いて行き来して居りました。刑が確定しますと私服は取上げられますが、膝迄の赤い股引の様なものと、襟に番号のついた半襦袢の様な囚衣を与えられます。御礼奉公もなく確定次第に送られて出て行く様でした。私は事務室で使われて居たので、近頃の行刑の模様も少し分りました。

もう大分前から刑務所と云うものが制定され非破廉恥罪の囚人はそこに収容されているらしいのでした。名称からして監獄とは取扱い方が違ふと云う事が分ります。刑の名前も懲役ではなくて徒刑と云うのです。そして非破廉恥罪とは、思想犯、政治犯、過失犯及び交通犯、選挙犯等の犯罪の事で、債務犯や経済犯等は我国では破廉恥罪として人格を剝奪される様でした。非破廉恥罪に対する行刑はこうしてはっきり区別されて、懲役と比べれば天国の様に楽となつた訳ですが、懲役刑の執行は一段と苛酷になった模様でした。

或日のひる近く、八〇四号と向い合つて、職員達の靴磨きをさせられて居ました。彼女はあれからずっと鎖帷を締められて居り、黒い鉄鎖が喰い込んで居ます。二人の非破廉恥罪の婦人、つまり、徒

刑女囚が連れて来られ、それぞれ縄尻を婦人看守達に取られ、腰縄だけの姿で課長の机の前に立ちました。つい今しがた赤い囚衣に着替えさせられた様子で、二人共、未だ廿才を越したばかりの娘さんです。黒髪を紙のこよりで束ねて居ましたが、短い股引から出て居る膝から下は素足で、勿論はだしでした。

「ちゃんと立つのよ。不動の姿勢を取って……」

「ハハハ、余り苛めないでやって呉れよ。御令嬢育ちの学生さんなんだから」

「ホホホホ。さ、お前から順番に申告しなさい。罪名と名前とを申し上げて、監獄じゃなかった、刑務所へ送って頂く様をお願いするのよ」

婦人看守は右側の娘さんのお尻を縄尻で囚衣の上から軽く打ち据えました。

「……笹田道子。廿三才。騒擾罪及び公務執行妨害罪の廉で徒刑五年に処せられました。……刑務所へ……送って下さい……まし……」

語尾は涙で消えました。

「次……」

「……ハ、ハイ……騒擾罪及び公務執行妨害罪で五年の徒刑に処せられました。刑務所へ入れて……下さい……」

「名前と年令はどうしたの？」

縄尻が白いふくらはぎに鳴りました。

朝から晩迄、毎日拘置所や裁判所を這いずり回って居る私は彼女達の事情を察知することが出来ました。此の間うちから、二回程の公判の度に多勢の傍聴者が詰めかけた事件の被告達なのです。何でも切れ切れに耳にした所を総合しますと、彼女達は最近国会に上程

された売春防止法改正案が与党の手で葬られかけて居るのに憤慨し、同窓の女子大学生達と共にデモやら集団抗議等をやって大分騒いだらしいのでした。そして警官の出動となって検束された女子学生のうち、首謀者と見なされた彼女達二人が起訴を受け、実刑を課されたと言う訳らしいものでした。

「……未だ世の中のこととも分らないお前達がのぼせ上って不心得なことをするからいかなのだ。まあ、五年程、反省して来るんだな。それから云つとくがな、いくらお前達が懲役囚じゃなくて徒刑囚だからと云つてもな、囚人は囚人なんだから、ちっとは恥かしい思いもしくなくちゃならんし、辛いぞ。甘い事を考えてると、顔がゆが様な目に会うぞ。まごまごしてると懲役に切り替えて監獄へ送るからな。キリキリ働いて来るんだ。分ったか。手を縛って貰え」

婦人看守達がポケットから取出した手錠を見て、彼女達は唇を噛みました。揃えて差出した細い手首に鋼鉄の環がキラリときらめいて、錠が噛む音が四回聞えます。腰縄を解かれた彼女達は革製の褌の様なものが囚衣の上から施されました。ギューと締められた時、うら若い女囚達は手錠の両手で顔を掩ってすすり泣き、腰の後ろで錠の音を聞いて身もだえしました。革枷の前部の金具が、手錠の鎖の三個の環の真中の環を噛んで押えました。

「……こんな……あの、顔をかくさせて下さいませんか？」

「駄目よ、もう。顔をかくせるのは検事局送りの時だけさ。それどころか、お前達捕まる時に反抗しただろう。途中で反抗されたら私達が困るからね。首枷を嵌めて上げることになってるのよ。フフ。罰よ」

「そ、そんな……あの時暴れた罰は、もう警視庁や拘置所で沢山受け

ましたわ。後手錠を嵌められたり、窄衣かけられたりして。もう堪忍して下さい……」

口々に哀願する二人の女囚を、婦人看守達は小突き回し乍ら腰を連鎖し、そして大きな細長い首枷を掛けてしまいました。分厚い木製で、一米程はなれてあけられた穴に、二人の女囚の首が嵌め込まれました。重い枷によるめいた若い女囚達は、お互いが身動きする度に首や肩をこじられる痛みと苦しさで悲鳴を挙げます。

「フフフ、二人そろって上手に歩かないと首をすり剝くわよ。首の骨を折ったって知らないから。けど背の高さが大体同じでよかったじゃないの。さ、キリキリと歩くのよ。おいで」

「……お願い。顔に金網かぶせて下さい……」

「何云ってるの？ 泣くんじゃないの。出口で新聞社の人が写真とりに待ってるよ。みっともないから涙拭いて上げるわね」

思わず手を休めて見送って居た私達は、給仕の娘に鞭打たれてしまいました。

午後、私は一人の若い男の既決懲役囚と鼻環を一米程の鎖で結び合わされ、両足に二人共鉄丸をつけられて、裁判所の正門辺りの草取りやら砂利のごみ取り等をさせられました。

「八〇三号。この三二〇号はね、新米なのよ。苦役のさせて頂き方を教えておやり。お前はもう年期が入ってるからね。鎖褲つけとこうかな、八〇三号にもついでにお揃いで嵌めとくわ」

監獄等で使用されて居る鎖褲は初めてでした。私が炭坑町の妾宅で施されて居たものよりずっと太い鎖で材質も含油鋼ではない様でした。何と云った所で仕方ありませんから、おとなしくされるままになりました。砂利の上に鉄丸を引き摺った跡を残してはいけな

と云うのですから、鉄丸の鎖の範囲を済ませば、鉄丸を抱き上げて移動します。独りならまだいいのですが鼻環を繋ぎ合わされて居ますし、口が利けませんので、時にはうるうるしてしまいました。私はもう馴れて居ますが、頭の刈痕も未だ青々として居る三二〇号は通り掛る社会の人々にジロジロ見られ小さくなって恥じて居ました。

「あら、ちよっとちよっと。あんたあの男見た様な気がしない？」

ホラ、三二〇と額に刷ってある方の懲役人よ」

「ま、ほんとね。何だか見たことがある様ね。頭が丸坊主で判り難いわ」

裁判所の玄関を出てきた二人連れの華やかな婦人が立止って、私達をジロジロ見下ろしました。彼女達の声を聞いた三二〇号は上目でチラと見上げた顔を低く伏せ、思い当る事でもあるのかビクリと震えました。一人は和服、一人は洋装で、人目を惹く衣服と着こなして、濃い化粧は何れ水商売の婦人達でしょう。鞭を持ってブラブラして居た婦人看守が近寄り

「どっちですか？ あ、三二〇号の方ですか。ホラ、よくごらん下さい」

婦人看守はいきなり鼻鎖を引張り上げて、三二〇号の顔を仰向かせました。思わず手錠の手で顔を掩い掛けようとした手の甲に鞭がピシッと鳴り、彼はブルブル震える両手を胸の辺りで合掌しました。膝は初めから地面についたままです。

「嵌口具、取ってやりましょう。そしたら……」

口の辺りを隠し、頬を締めつけて顔の線を変えて居た嵌口具が三二〇号の口から引離されました。うなだれようとした鼻環が更に乱暴に引き上げられました。



「ギャツ、ヒー」

ゆがんだ鼻の恰好と悲鳴とに、婦人達は身をくねらせて笑い合います。

「泣いてるわ。やっぱり情けないのね」

「あ、そうだわ。思い出したわよ。ホラ、三月程前迄、ずっと毎晩みたいにやって来て威張りくさってた男よ。何て云ったっけ」

「そうそう。羽振りのいいお役人風吹かせてさ、会社の人達も持て余してたわね。独りでやって来ては、電話してお金を持って来させてた奴ね。彼奴がこんな風になったのねえ」

「新聞に出てたじゃないの。何とか汚職って」

「そうだったかしら。まあ私達には関係ないことだけど……。しかしいい気味ねえ。私達は商売だしお金に頭下げてただけだけどさ、威張り散らしてほんとにいやらしい男だったわね」

堪え切れないで顔を伏せかけた三二〇号の背に鞭が飛び

「ヒーツ」

と、彼はあたり一帯に聞え渡る様な大きな喚声を挙げて身もだえしました。

「ホホホ、何と大げさな悲鳴だこと」

「けど鞭って痛いよ」

婦人看守は彼の鼻鎖を邪怪に引摺って通路の敷石に立った婦人達の足許の砂利の上に正座させました。同じ鎖に鼻環を連鎖された私も、仕方なしに鉄丸を二、三米引き摺って彼と並んで正座して合掌致しました。

「こっちの囚人は何なの？ Sって何かしら」

「何だっというじゃないの。私達の知ったことじゃないわ」

婦人看守は更に三二〇号の尻を蹴り上げて

「ちよっと四つん這いにおなり」

彼の鎖鐐の金具に捕縄を結びました。

「お前を御存知のお方達だよ。お立ち」

鐐をしゃくり上げられた彼は、よろよろと鎖を鳴らせて立ち上がりました。全身に婦人達の視線を感じた彼は、体中が更に赤くなつてうなだれ、嗚咽し始めます。

痛烈な三、四撃を背に喰った彼は悲鳴と共にヘタヘタと膝をついて呻きもだえました。

「ほんとに哀れなもんね。ホホホホ、こんな恰好にされてて、未だ恥かしいんだって」

「自業自得、身から出た錆よ。いいことの後には辛いと決ってるわ。けど、懲役囚をこんな近くで見ると、私初めてよ。そこらで見掛ける奴隷達とちがって、流石に監獄の縛り方って凄いわね。あの手足の枷の重そうなこと……」

嘗ては其の席に侍って嬌態と媚を売った彼女達は、水商売の女だけあって薄情なものでした。真赤になって浅間しい姿を恥じ入って、居る哀れな男を見下ろして、さも小気味よさそうに笑い嘲けて、一かけらの憫れみさえ投げようとはしませんでした。

「で、どの位ブチ込まれるの？ 死刑？」

「ホホホ、まさか」

婦人看守は又も捕縄をゆさぶり上げて

「申し上げるのよ。泣いてたって痛い目に遭うだけよ」

三二〇号は身をよじって呻きました。

「ね、鎖が喰い込んで痛いよ。きつと……」

「成程ねえ、だからああいう工合に縄をつけるのね。」

三二〇号は額を地面にすり付け、かすれた声で途切れ途切れに

「…收賄罪…公文書偽造、不正…行使罪。懲役十四年…」

「声が小さいわ。もっと大きく。さっきの悲鳴の様にね。フッフ、いつ迄泣いてるの。」

又も背に炸烈する鞭に彼は号泣しました。

再び振り上げられた鞭の気配を感じた彼はビクッと震え、上体を前に泳がせました。

「どこへ行く気なの？」

捕縄が婦人看守の左手でグッと引き寄せられ、高く突き出した尻の右側に鞭が一闪、更に右脇腹にも飛びました。短かく持たれた捕縄がピンと張って、三二〇号はお尻を上げて浮かせたまま、額を砂利にすり付け、手錠の嵌まった両手を頭上の地面に投げ出して砂利を掴み締め乍ら、全身をのたうたせて高く低く呻きます。私が初めて鞭を与えられた時には、もっと男らしく忍んだのに、何とだらしない奴だろうと哀れに思いました。

「どんな気持なんだろうね。顔を見てやり度いわ。」

「あら、それなら其の鼻鎖を引張り上げたらいいんですよ。手が汚れますから気をつけて…」

洋装の婦人がタバコを捨てて、鼻鎖の汚れて居ない所を選んで握りました。三二〇号はどうすることも叶わず鼻を吊上げられ乍ら、手錠の両手で鎖を握って防ぐ様な素振りをしかけましたが、諦らめて正坐し、鼻鎖をグッと握った婦人を仰いで恨めしそうでした。

鼻鎖をつけられて曳き回されるのは、初めのうちは全く堪え難いみじめさを感じるもので、私もその時の気持を今でも必々と思い出

せます。それも看守にならまだしも、社会での知人にそうされますと、ほんとうに腹の底から慟哭がこみ上げて来るもので、三二〇号の今の哀れな心の中はよく分りました。

「鼻環って便利ねえ。こうしてればビクとも動けない訳ね。」

「私にもやらせてよ。」

和服の婦人が袂を握って鼻鎖を短かく掴みました。

「あら、そんなに振り回したら鼻がチ切れるわよ。ホホホ、あの悲しそうな顔を見て御覧よ。」

婦人達はしなを作って笑いころげていました。

胸の前で合掌して居る両手の枷が微かに震えてガチガチ触れ合っ

て居ました。

「フッフ、お前恥かしいだろ。情けないのかい？ いいさまだこと」  
「これッ。恥ずかしいかと訊ねて居られるんだよ。口を利いていいから御答えするの。」

三二〇号は婦人看守の声を聞いただけでビクリとしました。

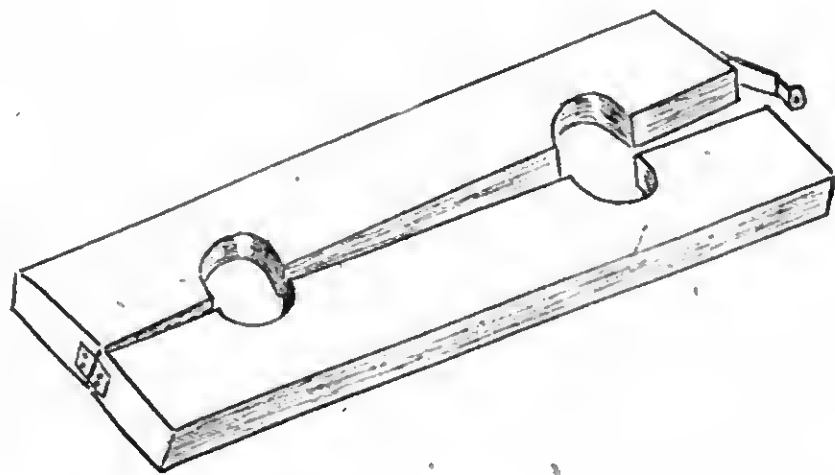
「は、恥ずかしい…ほんとに情けなくて…辛くて、こんなもつ」  
「何よッ。その云い方は。」

捕縄が乱暴にしゃくられます。曳き縄を後から婦人看守に、そして鼻鎖を前から和服の婦人に、それぞれピンと張って握られた三二〇号囚は、両手について四つ這うことも出来ないで、顎をつき出し、腰を浮かせて上体を斜めにしたまま身動きも出来ず唸りました。重い手錠の嵌まった両手が前で口惜しうにもがいて居ます。鼻鎖を握れますが、それを必死に自制して居るのでしよう。他の端を私の鼻輪に繋いだ鎖が少し引かれましたので、私も僅かにいざって自分の方だけは鼻鎖を少しゆるめました。

「ほんとに仕方ない奴だわ。一体いくつ鞭打せたるの？ 手がだるいじゃないの。」

婦人看守は毒づき乍ら、それでも面白そうに革鞭を揮って、三二〇号に絶え入る様な悲喝と呻きを挙げさせました。

「いいかい。此の姿勢が鞭打つのに一番楽なのよ。よく覚えておおき。鞭を頂いたお礼をさっきから全然云わないのね。口は利ける様にしてあるだろう。懲戒ものだよ。刑務官軽侮罪と云うのかな。ホ



許されず、その上、お慈悲迄も願わなければならぬ身のみじめさを噛みしめて居るのでしよう、涙を流して云い渡しました。

「…お…お慈…悲です。もう…赦して下さい…まし。お願いです…奥様方…もう辛くて辛くて…」

「ホホホホ。奥様方はよかったじゃないの。気に入ったわ。そりや辛いだろうさ。殊に私達なんかにかにこんなにされてるんだからね。」

「辛い…ってさ。悪いことすりや捕って縛られて、鎖で繋がれ

ホホ」

三二〇号はヒューヒュー泣き乍ら、そのままの姿勢で鞭のお礼を申上げるみじめさを味わいました。立止って見物する人々が少し多くなりました。

「…お赦して下さい…まし。もう、おゆるし…」

「ホホホ。私に頼んだって仕方ないよ。お綺麗な人達にお慈悲をお願いしてごらん。」

鼻環を嵌め込まれて未だ日も浅い三二〇号囚は、今では何の関係もない二人の婦人に此の様な目に会わされて一言半句の口答えすら

て監獄に入れられるのは分ってるじゃないの。今頃になって哀れっぽい声出したりしても遅いよ。けどそうは云うものの、こんなに鉄の道具や鎖で縛られてさ、勝手放題に曳き出されてこき使われては檻へプチ込まれるんだからねえ、毎日毎日。何の楽しみも無しにこれから十何年間暮すのだと思うと少しは可哀想ね。」

「あなたもう行きましようよ。人だからして来たわ。」

和服の婦人は漸く鼻鎖を手から離し、三二〇号はガクリと四つ這いになって喘ぎました。

「あ、そうだわ、お前が可愛がってた何とか云うトラグラの小娘はね、ホラ何とか云う会社の社長さんとよろしくやってる様よ。あの会社は、お前が勤めてたお役所の仕事やってたのとちがう？ あの小娘、お前のこと云われると顔しかめてるわ。」

「けど、ちよっと暇つぶしするのには、此奴等をからかうのも面白いわね。今度あの娘も一緒に連れてさ、ゆっくり見物しに来ない？」  
「そうね。今日は嫌なこと証言しに来させられて肩が凝っちゃったけど、少しスツとしたわ。」

婦人看守は口を曲げて婦人達を見送り、そして三二〇号囚の突伏した脇腹を蹴って起し、嵌口具をガッチリと嵌めるのでした。

### 保管奴隷 (四)

或日の午後おそく、多勢の懲役囚達が曳き出されて中庭で連鎖されました。総勢三十名程で男女半々です。監獄へ送られるのではないらしく、手錠足錠は第三種のままですが、全部黒い鎖の禰をつけられ、十名宛縦一列に並んだ股間を太い鉄鎖がずっと通り鎖禰の下の金具で一メートル程に繋ぎわされて居ました。私とそして少しは

やせたものの、それでもまだ白豚の様にむっちりした八〇四号も後手錠にされ、鎖禰をかけられて、小突かれ乍ら皆と一緒に連鎖されてしまいました。こんな浅ましい恰好で娑婆を歩くのは初めての者が殆んどらしく、皆、体中を真赤にして低く低くうなだれて曳かれて居ました。足の鎖の中央を腰枷の前部に吊って居る鎖と、連鎖されて居る鎖とが、どうかするとガチャガチャともつれ合ってしまった私でさえも少し歩き難かったのですが、馴れない連中には鎖はやけに重くて揺れますし、此の鎖錠を捌きかねて、ころげる者が続出致しました。後手錠のままで転倒した本人もさる事乍ら、其の前後に連鎖されて居る者も其の度に鎖を引っぱられる痛さに嵌口具の奥で呻きます。私の後は太った中年の女囚でしたが、身も世もない様にしゃくり上げては嗚咽して居るものですから、しよっ中ころげ、その度に私は鎖の痛さに腹が立ちました。約一時間程の屈辱と難行の末、辿り着いたのは看守学校でした。

私達は、首の前後に「教材」と書いた校名と番号入りの鉄札をつけられ、外して貰った鎖を丁寧に磨かされた後、やせぎすの婦人職員に頸をしやくられて各々一斉に自分で後手錠にし、既に放課後でガランとした校内を曳かれて、宿直室の横手の大きな檻の中へ追いつ込まれました。翌朝、餌をガツガツ啜った私達は、外された嵌口具や鎖禰を腰枷に吊って曳き出され、三十名の男女が、一人の給仕みたいな少女によって追いついて来たのは三十人ばかりの看守の卵達です。皆、未だ二十才そこそこですが、既に、懲役囚達にとっては何よりも恐ろしい看守の制服を着て居ました。女の生徒の方がかなり多い様です。



「今迄、学課ばかりやって来ましたが、今日は、ここに居る既決囚達を教材に使って、囚徒の取扱い方を実地に練習する事にしましょう……」

婦人教官の声が聞え、うら若い生徒達は、哀れな私達をさげすみ切った眼で見下ろしました。

「先ず教材を割当てます。云々ときますけど割当てられた教材については、檻の外では各自責任を持つよ。まあ逃げはしないだろうけど……」

二人宛一組になった生徒に対し、男女一匹宛の囚徒が割当てられました。私は、例の太った中年の女囚と一緒に二人の女生徒の組に決りました。

「何度も繰返すけど、囚徒達に対しては決して同情してはいけません。罪を償うために刑を受けて居るのですから、苦しめ辱かしてやるのが慈悲と云うものです。苦しいと哀れな恰好したり哀れっぽい声を出したりするでしょうけど、そんなことを気にする様では刑務官の資格はありませんよ。犯罪を撲滅する為に、冷厳に刑を執行するのが我々の義務なのです。」

生徒達は眼を輝かせてうなずきました。

「最初は革鞭の使い方を実習しましょう。」

全生徒に真新しい制式鞭が与えられました。

「革鞭こそ、囚人や奴隷を扱う上に於て最も便利で且つ基本的な道具です。鞭が何故激しい痛みを与えるかと云う生理及び、箇所による苦痛の差についてはもう習いましたね。」

二、三の質問が發せられ、指名された生徒が答えました。

「……鞭と云うものは、いくらい音がした所で効果があると云う

訳のものではありません。聞くものに恐怖感を与えるのが目的の場合には別ですが。痛みは、音よりも、鞭痕の出来具合で程度が分るものです。又心理的な効果をも充分考えねばなりません。のべつ幕なしに打つより、適当な合間をおいて当てる方が効果があります。要するに、狙った箇所に、必要な程度の痛みとそして恐怖心を与えると云う事が肝要ですよ。」

鞭の痛さを実際に味わったことがあるのかないのか知りませんが婦人教官は平然と続けます。

「……特に狙った箇所に、狙った角度に当てると云うことは實際上、重要なことです。と云うのはですね、今此奴達を見ても分る様に、囚徒達はいろいろな戒具や鎖錠を施されて居るのですから、それらに当たってしまったては、くたびれ儲けで何にもなりません。特に邪魔になるのは胸鎖と腰枷です。後手錠にして居る場合は手錠も少し邪魔です。しかし革鞭位のことで一々外すことは勿論出来ませんから、そこを練習しなければならぬ訳です。」

後手錠を教官が解いて回り、私達は生徒達の鞭打の稽古台にされました。

背中、脇腹、尻、胸、腹そして腿の外側、内側、ふくらはぎ、足裏と教官が指示する箇所を狙う生徒達の鞭の雨を次々と受けます。悲鳴と呻き声が絶間なく響き渡りました。五十も鞭打たれたでしよるか。打ち方にむらがあつて、或る時は余り痛まないかと思うと、次には眼が飛び出る程の痛みが降って来ます。私達の組の女生徒は教材の私達を互いに交換して鞭打ちました。

いくら人格を剝奪された身とは云え、鞭の稽古台にされて、命じられる姿勢をとらされるのは本当に情無うございました。太った色

白の女囚はヒイヒイ泣き乍ら縋馬みたいになった体をもだえ、のた打たせて赦しを乞い続けて居ました。

「よし。鞭は今日はそれ迄。ずい分ギャーギャーと騒がしかったけど、これは勉強の為なのであって、実際には嵌口具を嵌めてあることが多いからそんなに耳障りなことはないよ。しかしこれは余談だけれどね、昔は鞭痕や縄ずれが化膿して来てね。我々の先輩は苦勞したものでらしいわよ。今じゃ生れたらすぐ種膿するし万一化膿してもいい薬もあるし、心配なしに鞭を当てたり鎖錠を施したり出来るからほんとに便利になったものねえ。気を付けなきゃいけないのは壊疽だけだけど、治療すりゃあ殆んど癒るから、心配しないでピシピシ扱えばいいのよ。では暫く休憩しましょう。後手錠にさせて。そしてあんたと、あんたは監視役にここに居ること。」

二十分程の後、今度は捕縄の練習です。

「次は捕縄の稽古をしましょう。そもそも囚人には捕縄を掛けるのが本来なんですから、刑務官としては是非マスターしておくべき技術です。鞭と違って、捕縄はたびたび御互い同志で縛り合って練習しましたね。今日は実際の囚徒が相手ですから手加減は要りませんよ。と云っても何度も云う通りに、捕縄と云うものは無暗矢鱈にグルグル締めつけるのは不細工ですし何にもなりません。要所々々をキリッと締めるだけで充分です。」

鎖錠を解かれ、鼻環と足錠だけになった私達は、生徒達にそれぞれ捕縄を掛けられては解かれ、解かれては又縛り上げられます。

「ね、手錠の痕凄いわ、此の男。あら腰も……」

「ほんと、あ、これはS印よ。保管奴隷なのよ。」

「そうか道理で……」

彼女達は頬を紅潮させて、私や女囚をキリキリと縛り上げて行きました。おとなしく縄を受けるより仕方ありませんが先程の鞭痕を捕縄でこすられるのには全く閉口致しました。生徒達は縛り上げた囚人を婦人教官に見せて批評を受けたり、直して貰ったりして居ます。

「お立ち」

股縄の中心に結び目を作り、そこから伸びた縄尻を握って少女は私の頭を小突いて尻を蹴りました。同時に、同じ様に、捕縄を掛けられた隣の女囚もよろよろと立ち上って啜り泣きました。強く縄をグイと引かれて飛び上がった呻きます。

「仲々よく出来ましたね。次は速度の問題ですよ。」

婦人教官に賞められた彼女達は得意そうに私達を引立ててそこらを歩き回りました。

「さあ、教材を交換しましょうよ」

私は今、解かれたばかりの両手を後に回して跪まきました。

「体つきによって、結び目の来る位置を目測するのが難かしいわねえ。」

「そうよ。けど、こんなこと稽古したって役に立つのかしら。」

女生徒は舌を出して肩をすくめた様でした。

「……皆さん、では少し早いですが、切上げおひるにしましょう。」

其奴等は嚴重に捕縄をかけて、そこに坐らせておきなさい。」

ひしひしと縛り上げられた私達は、一組宛向い合って立たされ、曳き縄をゆるく結び合わされて、そのまま正坐を命じられます。

「少し短かったわね。」

鼻環同志を十センチばかりに繋ぎ合わされ、余った鼻の縄を壁の

鉄環に結ばれました。各組共そう云う風にされます。生徒達は監視一人を残して立去りました。

「みじめなものね。ほんとに……」

私の眼前の女囚は、やさしそうな眼に涙を一杯に湛えて低く呟きました。

「……首縄が苦しいわ。早く解いてくれないかしら。縛られるのは当り前だけど……あんまりだと思わ。ああ、苦しい……きついものよ……」  
脂肪がよくついて太った白い体に、新しい捕縄が痛々しく喰い込んで居ました。

「今、何かブツブツしやべったのは誰奴だ。」

監視役の少年が近寄って来て睨み回しました。

「お前か。此の野郎。」

女囚の顔は恐怖にひきつれた様でしたが、鞭が降って来たのは私の腿でした。

「ヒーツ」

思わず悲鳴が出ました。

「済みません……」

女囚はあとで低く低く謝りました。監視の生徒は立って来たついでに私達を見下ろして歩き回ります。髪を伸ばして未だ日が浅いらしく、むやみにポマードをつけた頭がポンポン匂って光って居ました。その片手の鞭を見た既決囚達は思わず身を固くして居ます。鞭の味を骨身に泌みて知り、そして何の理由もなしに鞭打たれて、お礼迄申上げねばならない身のみじめさを、喰い込む捕縄の苦痛と共に、泌々と味わって居るのでしょうか。監視の生徒は娘に代り、やがて午後の始業を知らせる鐘が鳴りましたが、私達は長いこと放っ

ておられました。

漸く生徒達がガヤガヤと集まりましたが、教官の婦人が中々見えません。

生徒達は私達の周りに立ってワイワイ言い始めました。

「……けど懲役囚って案外におとなしいじゃない？私もっと反抗するかと思ってたのよ。」

「そりやそうだよ。俺達に手むかいはおろか、口返し一つでもしたら、どんな目に会わされるか知ってら、此奴等……」

「ちよっとお前。その太った女だよ。九〇号よ。お前一体何して捕まったの？」

「……ハ、ハイ……」

私の前で固く眼をつぶって苦しんで居た女囚九〇号は、番号を呼ばれて体をビクリとさせて云い濁みました。

「ハイ、じゃ分らないじゃないの。馬鹿だね、お前は。」

「……お願いします。おねがい。首の縄を少しゆるくして下さいまし、もう……苦しくて。」

「フフフ、そんなこと訊いてやしないわよ。」

娘さんは鼻縄を纏んで前後に揺ぶり、私も少し呻きましたが、女囚は魂消るばかりの悲鳴を挙げて、赤く番号の刷られた額に脂汗を浮べ、ポロポロと泣きました。

「さ、お云い。どんな悪い事をして括られたの？」

「……ヒー、ウ、ウツ、ヒー。ハ、ハイ。あの、万……万引……でございます。ほんとにほんの出来心で……。それで……多勢の人の前ですぐに捕まって手錠嵌められて……。懲役五年に……して頂きました……」  
「そうなの。だけどね、万引なんて云わないで窃盗罪とお云い。」

「ハイ。」

「お前は？」

鞭の柄が私の額を小突きました。

「あら、保管奴隷なのね。向うにも一匹女のが居たけど。道理で余り苦しそうな顔してないのね。捕縄位は馴れて平氣と云う訳か。」

「じゃ、もっと締めてやろうかな」

眼の大きな体格のいい男の生徒が私の縄を力まかせに締め上げました。

「ヒーッ、お、お赦し下さりまし。お慈悲でございます。看守様。」

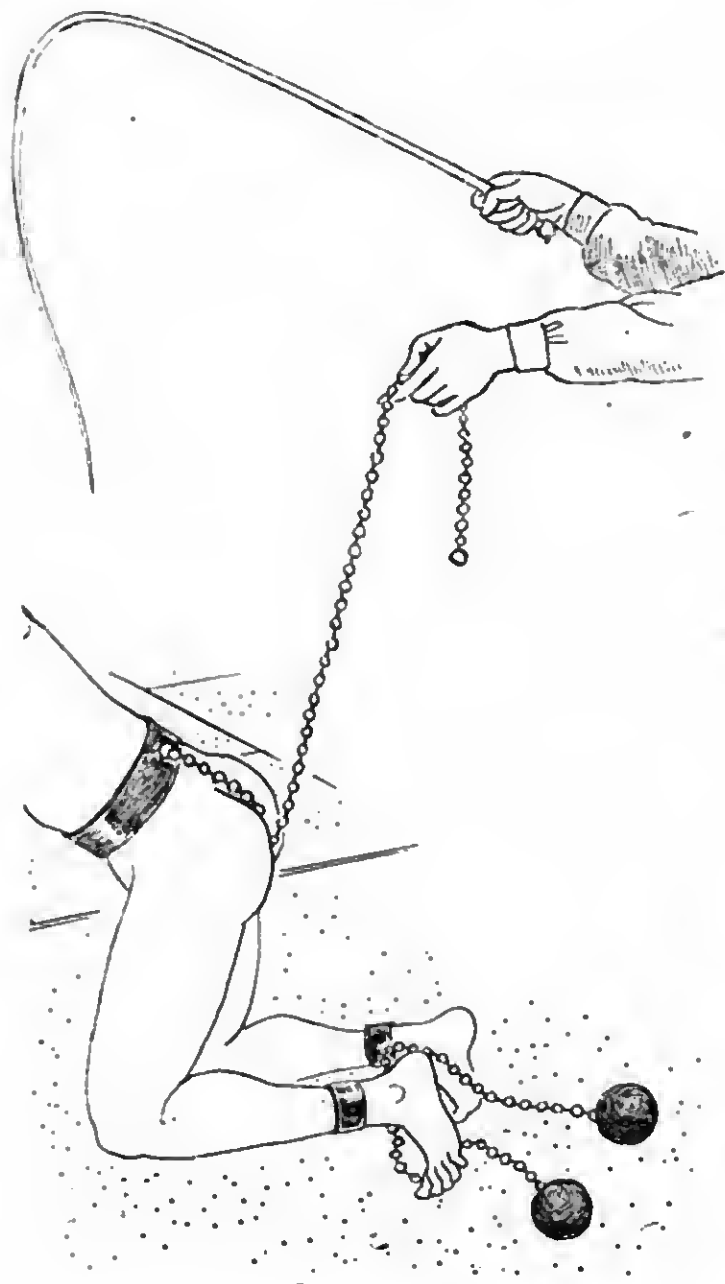
私に看守様と呼ばれた少年は鼻をうごめかせて得意そうに笑いました。生徒達が、それぞれの囚人達を痛めつけるのにも飽きて、お互い同志で騒ぎ始めた頃、婦人教官がやっと現われました。

「教官。囚人達には食事を与えないのですか？」

分別あり気な生徒が質問しました。

「エエ、教材の間は、出来るだけ与えないのよ。何故って面倒でしょ。さ、では又、実習を始めましょう。午後は戒具鎖錠の取扱い方について稽古します。…」

「……戒具や鎖錠の構造等については、もうよく教わって居ますね？　こう云ったものは、囚人等の体の要所々々を適確に且つ、迅速に拘束するのを目的として古くから種々の考案改良がなされて来ました。ここにあるこの手錠は約二百年前のものです。ホラ、ごついばかりで非常に不便で、拘束も不十分なこと是一目で判りますね。云わば手枷の部類に入るものです。あなた、ちょっと手錠と手枷の区別を云ってごらんさい。」



「ハイ。ええと、手枷とは、一本の手首の周りを繞って抜けない様に嵌め込む環状のもので、固体の部分有するものを云います。そして、手錠とは、何等かの連結用部分を付した場合に、其の全体のことを指します…」

「そうです。例えば、此奴達が施されて来た第三種手錠はですね、手首に嵌める環自体は手枷で、両手を鎖で繋いだり又自由度〇に連結したりした場合には全体で手錠となる訳です。足枷と足錠の関係も同じことです。これはよく混同されますし、又混同して呼んでも実際には差支えありませんが、あなた達はよく知っておかないといけません。」

固い捕縄に喘ぐ私達を無視して、長々と講議が続きました。

「……いろいろの手錠が集めてありますからあとで彼奴達に嵌めて



見ましょう。人数だけないから、交換し合ってやるのよ。

このうちの幾つかについて説明します。先ずこれは昔、大分長い間使われたU字手錠です。手首を縦に入れるのと横にするのと二通りありますが、どっちにしても抵抗されれば一人ではちよつと嵌め難いでしょう。これは瓢箪型手錠です。両手首を揃えさせねばなりませんし、環の大きさを加減できませんから全く不便ですね。しかしピタリと嵌めれば拘束度と苦痛はかなり大きいものです。次にこれはメガネ型手錠又は8字型手錠とも云って、瓢箪手錠が改良されたものです。ほら、この部分、環が閉まるところです、その部分が手首の外側に在るものと、内側にあるものと二つ種類が此の通りあります。特に内閉式即ち内側閉環式の場合は、調節が利きますし、両手を一本棒にしてビクともさせませんから、現在の第四種は別として、拘束性は先ず最大ですね。けど矢張り取扱いに不便は免れません。」

女囚九〇号が縄目の痛さ切なさには堪えかねて低く呻きました。近くに居た女子生徒が鞭を取って太腿に当てます。

「ヒュー……」

「静かにおし。耳障りじゃないの。」

「そうそう、そう云う工合に容赦なく取扱ってやる様に。」

「教官。嵌口具を嵌めてやったらいいと思いますけど……」

「ええ、大概の時は嵌口して声を出せない様にしておく訳ですが、今日はね、皆が悲鳴や哀願、呻き声等に対して、少しでも馴れる様にと、嵌口具を外してあるのです。えーと次にこれ。これはさ



っきの8字型手錠から進んだもので、各々の手枷を、一つ又は数個の環で連結してあります。大分嵌め易いですし、或程度の自由を許しますから、自分の身の回りのことや軽い労役なら嵌めたままですせられる訳です。今でも奴隷なんかにはよく使用されて居るのは知ってるでしょう。」

端の方で若い女囚の消え入る様な哀願の声が致しました。

「……お、お願いでございます。用便させて下さいまし……」

「あ、あなた、いいから放つときなさい……」

鞭を手に近寄りかけた生徒を呼び止めて、婦人教官の講議が続きます。

「……それで無抵抗の囚人等に嵌めてやるには、もうこれで充分なんです。迅速さと携帯時の簡便性のため、更にこう云う風に環の半分をはね上げて他の半分の部分に重なる様に考案されました。更に回転軸に発条がつけられ、ラッチの自動送り機構が案出されて、皆が今それぞれ持って居る様な手錠、即ち第一種手錠が出来た訳です。錠の部分や材質、そして環の太さや重さ等はいろいろ型がありますが、基本としては先ず完成されたものとして、ここ三十年来、最も多く使用されて居ります。二個の環を繋ぐ鎖の環は大抵三個で真中の環は少し大きくしてあります。又ここに一個だけ見本がありますが、これは収監前の兇悪犯の護送の時等に使われるもので、太く頑丈に製作されて居るのは御覧の通りで、連結の環も一箇ですが、環の内側に、ほらグルリと細い突起があるでしょう。この手錠で締めつけられたら、どんな男でも脂汗を流しておとなしくなります。こんなものがわが国に於ける手錠の代表的な種類ですが、向うに外国のものもおいでおりますから参考迄に見ておきなさい。」

あちこちで緊縛の苦痛に堪えかねた呻き声が低く聞えました。学科の時に大概の事は教えた事だろうに、長々と復習などして、と私は齒がみしました。

「……ああ、早くこの捕縄解いて頂いて、手錠を嵌めて欲しいわ……」

女囚九〇号は喘ぎ乍ら呟きました。

「……それから……第二種や第三種の手錠足錠は、取扱い上の便利

さを第一としたもので、囚人達が殆んど自分で処理しますから扱い上全く便利です。この考え方、つまり枷だけを手足にいつも嵌めておいて、その連結部品を取替えて適当に使用すると云うアイディアは古くからあったもので、わが国に於ても、ここ数十年来、殆んど同じ様なものを制式品として用いて居ります。ただ最初に嵌め込む環のサイズをよく調べることで、そして囚人達が自分で処理し施した後をよく検査することが肝要です。まあ馴れれば一眼で分りますけどね。では先ず手錠をいろいろに嵌めて見る様に……」

両手首の捕縄だけを漸く解かれた私達は、鼻縄で結び合わされて並んで立たされ、生徒達の前に両手を揃えて差出し、いろいろな手錠を次々と嵌められました。今迄嵌められたことない様なものもありますが、諦め切った身にとっては、どれを嵌められた所で同じ様なものでした。しかし未だ囚われの日が浅い女囚九〇号などは時々涙ぐんでしまつて女子生徒のビンタを食つて居ました。

二十才そこそこの二人の娘は、やがて制服のポケットから真新しい第一種手錠を取出し、私達に後手に嵌め、そして足錠の枷を外して今度は種々の足錠を嵌めて見るのでした。嵌め変える毎に小突かれて、そこらを歩かされます。次に腰枷を腰の捕縄の上から締め込まれ、足錠の鎖を腰枷にいろいろと吊られました。

「後で吊つたらいけないの？」

「さあ、いいでしょうけど、転ばないかしら」

「あ、分ったわ、転ぶ位はいいのよ。だけどホラ後手のままで用便する時、工合悪いじゃないの。」

二人の娘は声をあげて笑いました。

「けど吊る鎖の長さの加減は難かしいわね。足枷がどの位ガタがあ

って、どの程度すり上るか見当つけなきやいけないし、脚を揃えて立って丁度膝と腰を伸ばせる様にするのは初めは見当もつかないわ」「そうね。けどちよつとばかりお慈悲をかけてやるには丁度いいわね。気に食わない奴はうんと短かく吊ってやるのよ、フッフ」「腰や膝を曲げたままで歩いたり労役させられるの案外こたえないもんじやないかしら。こらお前、どうなの?」

私の向脛が革靴で蹴られました。

「そ、そんなことはございません。辛うございます…ハイ」

「あなた。こんな奴にそんな事訊いたって仕方ないわよ。もう飽きちゃった、次は何かしら?こんなこと、大体よく知ってるわねえ。早く済まないかな。」

次は鼻環について婦人教官の説明やら、沿革の講義が少しあり、繋ぎ合わせた捕縄を解かれた私達は、それぞれつけられた曳き縄で乱暴にゆすぶられたり、引き回されたりしました。

「鼻環ってほんとに便利ね。これにこうして縄でもつけて曳き摺れば絶対ね。」

「けど、鼻の壁って、丈夫なものねえ。」

少女の様な娘さんに鼻縄を曳かれますと、私でさえ情けなくなってしまいます。囚人達は一様に噁り泣き、生徒達は面白そうでした。

「首環って重いじゃないの。」

「けど一旦嵌めちまえば、それで私達には関係は無しよ。」

首環の次は、腋鎖と胸鎖の実習です。漸くきびしい縄目が全部解かれてホッと致しました。

「腋鎖って、ホラ、参謀肩章みたいね。」

「フ、フ、フ、けど此れはこたえると思うわ。」

婦人教官は再び生徒達を呼び集め、私達は中途半端な鎖錠のまま立ちつくします。

「では次に、鎖環と鉄の腰枷について。知って居る様に、外国では大分以前から使用されて居ましたが、我国では行刑上採用されてから、未だ十年になりません。鉄の腰枷は、囚人の苦痛は勿論論外的ことですが、治療を要する様なことになっては、却って行刑上マイナスなので、使用を控えられて居た訳です。しかし外国の監獄に於ける成績を調べ、生理学者の意見も徴し、そして与える苦痛は不変で身体は左程損わない様な形状構造が考えられたので、七、八年前から試験的に採用せられ、三年程前でしたか、世界行刑機構への参加を機に制式戒具として、鎖環と共に採用されたのです。これが実物です。しかし、これは、いわば懲戒具と云った意味の方が強いので。Hさん、何級囚以下ですか? 此の腰枷を嵌められるのは。」

「ハイ。七級以下です。」

「その通り。此の腰枷は、革のと違ってサイズの調節の利く範囲が小さいので不便です。何とか改良して貰わねばいけないですね。五種類のサイズがありますが、まあ、小さ目のを嵌め込め込んでやるば間違いないです。えーと。その九〇号がいいわね。大分太ってるからスマートにして上げようね。」

女囚九〇号が真中へ引き出されました。

革枷を外された腰に、婦人教官が、一人の女子生徒に手伝わせて鉄の枷を当てがい、女囚はその冷い感触に震えました。腰の左右からU字型の重い枷が強引に押し込まれ、前後でガツキと連結されます。厚さ三センチ巾、七、八センチの黒い鋼鉄の環が白い皮膚にめり込んで腰をくびって締め上げられ、女囚は苦しそうに喘ぎまし

た。

「次は鎖褌。大体鉄の腰枷と鎖褌とはつきものです。知って居る様に、これは常時、施し放しにしておく鎖褌です。」

Y字型に中央の金具に集まった三本の鎖のうち、後へ回わる一本の鎖が金具と接続する箇所には、大きくて細長い四角張った鉄環が一箇入って居ます。

「此の四角な大きい環が所要の箇所に来る様にするのです。ホラ」女囚九〇号は教材にされ乍ら、後手をもだえて号泣しました。

「……こ、こんな。かんにんして……」

鞭が飛び、女囚はへたり込みましたが、途端に鉄の腰枷の残酷な苦痛に呻き、上体を真直ぐにして喘ぎました。

「馬鹿だね。鉄の腰枷嵌められてそんな坐り方したら、腰の辺の骨にひびが入るわよ。お立ち」

鼻環を吊られてズルズル立上った女囚は、全身に脂汗を浮べて居ました。

「鉄の腰枷、正式には鋼製腰枷又は重腰枷とも云いますが、これについては、皆が任官してから実際に扱って見ることにしましょう。

何分実物がこれ一箇しかありませんから。次は鎖褌。これも鉄の腰枷と略々同様にして制式化されたもので、革と組合せたものは以前から奴隷なんかによく使われて居ました。これは、腰枷を固定すると云う作用や、又、苦痛を与えるという事も目的ではありませんが、最大の狙いは屈辱感を与えると云うことにあります。この三本の鎖の二本は前、一本は後なんです。その三本をY字に集める此の金具が又便利なのです。第一に此の金具で足鎖を吊れば、上体の姿勢如何を問わず同じ拘束度を両脚に与えます。更に曳鎖をこれにつけ

ますと……」

苦しうに胸を喘がせて両腿を合せて立ちすくんで居た女囚九〇号が小突かれて、その鎖褌の金具に後から捕縄が付けられました。

退屈な復習にウンザリした顔をして居た生徒達が少し興味を示します。

「ギャーツ、ヒ、ヒーツ。」

いきなり捕縄を後から強く引張られた女囚は喚きました。

「お坐り。そうそう。そろっと腰を下らさない、と、さっきみたいに痛いわよ。」

顔をしかめ正坐するや、今度は斜後上方にしゃくり上げられました。

「お立ち」

「ギャツ」

と腰を浮かせて喚いた女囚は尻を上げて上体を前に倒し、額で床を打ちましたが、容赦なく捕縄は引き上げられ、両手首を締め上げる手錠ものものは、後手の両腕をもがきにもがいて、死物狂いで立ち上がりました。

「……で、此の鎖褌には二種類あって、大体同じ様なものです。一つの方は、今この女囚に施してあるものの様に、金具の隣りに四角な大きい環があるだけのことです。その環がない方のものでも嵌め放しにして何等差支えはないのですが、規則では、廿四時間を超えて引続いて施す時には大きい環のある方を用いる事になって居ます。理由は分りますね？ まあ、嵌められる方の身になって見れば大きなしかも四角張った環がある方が苦痛も大きいとも云えます。此の鎖褌を施す際、三本の鎖のどの環を腰枷につけるかと云うこと、即



ち、金具が真下に来る様に、長さを調節するには馴れが必要です。前の二本をさきにつけて後の一本で締め上げるのですから、締めしるを見計らわねばいけませんよ。此奴等が施されて来たものを使つて教材も交換して実習しなさい」

私は、情なさとか、みじめさとかは通り越して少し阿呆らしくなりました。神妙な顔をして、されるままになって居ましたが、背後からしやくられて立ち上がられる時は少し腹が立ちました。女囚達はやはり耐え切れない情けなさ、みじめさを感じるのでしょうか、哀願と啜泣きの声がしきりで、女囚九〇号も、むごたらしい鉄の腰枷を外され、て革枷に替えられ生徒達に代る代るに施されたり外されたりして、嗚咽し通してました。

隣の男囚は、引締った体に刺青の消し跡の残った精悍そうな男でしたが、生徒達の中でも特に小柄な娘さんの手で後の鎖を引絞られた時、ポロポロと大きな涙をこぼしました。そして正坐した体をしゃくり上げられた時には、カバと顔を床に摺りつけ、身を揉んで男泣きに泣いてしまったのに、意外に思いもし、又哀れにも感じたことでした。

「……皆さん、此奴等を珠数繋ぎにして、休憩しましょう。」

私達はグルリと円く一列に並んで立たされ、上体を倒して、お互いに前の囚人の腰枷の金具に、鼻環をカチリと嵌め込まれてしまいました。

「成程、こんな繋ぎ方もある訳だな」

私は流石に悲しくなっていました。私の前は女囚九〇号、その前はさっきの精悍な刺青の男囚で、私の後はまた若い女囚でした。女囚達は絶えず啜り泣き、私は前の女囚が身動きする度に鼻環

の痛さに顔しかめ呻きました。

一時間近くもそのまま放っておかれ、漸く解かれた時には囚人達の顔は上氣して真赤になり、口からは涎れを垂れて居る者も沢山居ました。

「では、今度は嵌口具。戒具のうちでも最も難かしいのが、この嵌口具です。嵌口具にもいろいろありますが、一長一短で未だ未だ進歩の余地は多分にあります。行刑当局では一般に此の形式のものを数十年來用いて居ります。よく知って居る様にホラ、この真中に鉄球のある鉄棒を横に奥歯で啜えさせて、鉄球にバネでついた鉄のマスクを口の上から蓋にして、棒の両端の革バンドを後ろで結んで錠を掛ける式ですね。

この他に開口装置のついた鉄のマスクを当てて後ろで締めて、口を開いたままにさせる式のものも必要によっては使用されます。開口装置は、ホラ、この鉄マスクの表面のネジを回せば、口の中で開いて行って歯を上下に押しひろげる訳です。どちらにせよ嵌める動作が二重になって、多数の囚人を扱う場合は不便ですが、今の所、仕方ありません。第一種手錠みたいに、ワンモーションでガチャンと嵌められる様なものが出来ればいいのですがね」

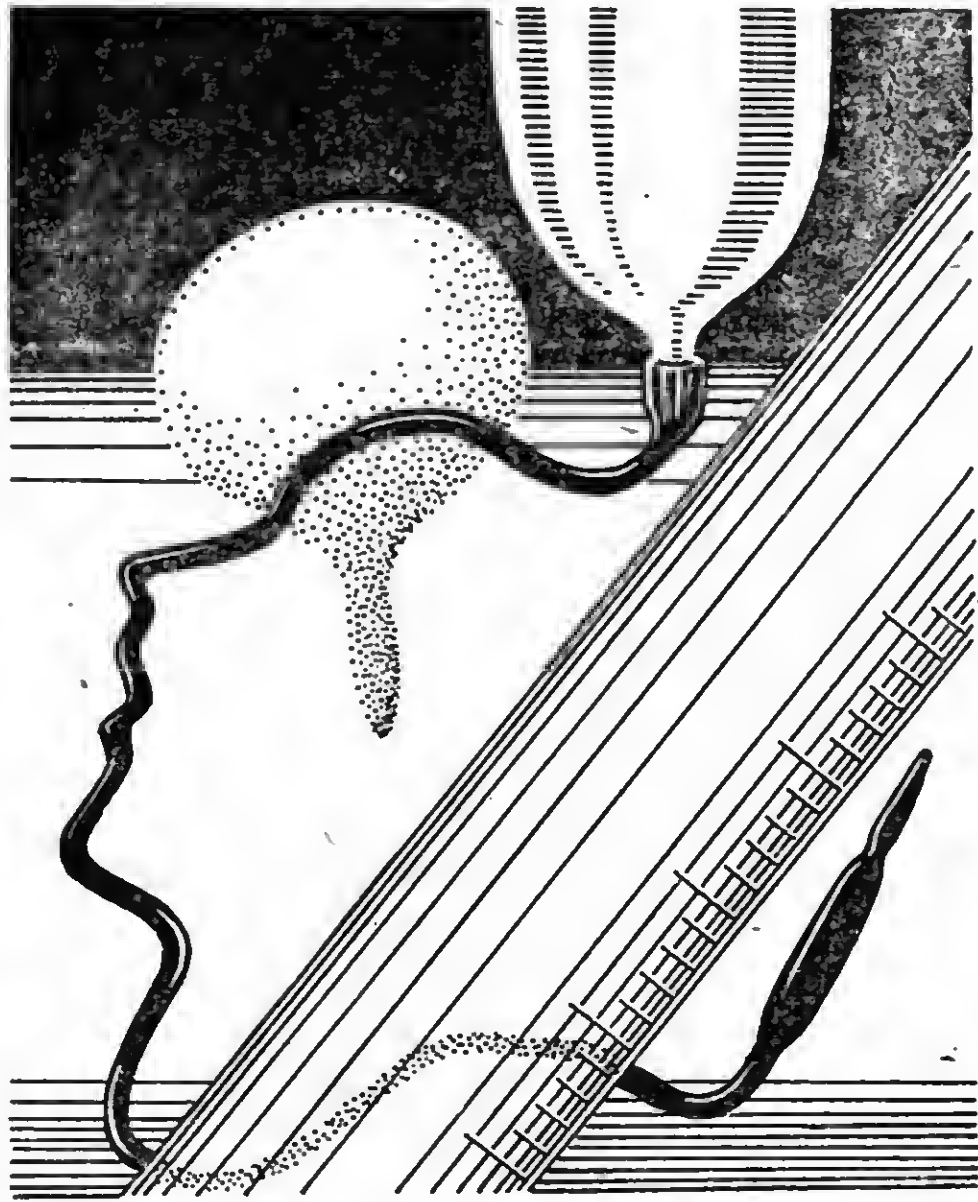
嵌口具の実習は簡単に済みました。

漸く一日の教材から解放された私達は、既決囚が房内で施される鎖錠を規定通りに嵌められて大きな檻の中にプチ込まれ、やっと用便と餌とにありついた後、嵌口されて其の日を終えました。

(未完)

通 信 レ ポ

# 浣 腸 相 談



栗 瀬 長

「二十八才の独身のサラリーマンです。日頃便秘に悩まされ、ほうっておくと、四日も五日も通じがありません。腹部の膨満感に悩まされ、浣腸するようになりました。最近では浣腸しないと便意は起りませんし、浣腸しないと、気持が悪くて夜もおちおち眠れないのです。どうしたらよいのでしょうか。」

私の医療相談文が、右のように要約されて「治療の友」誌の一部に、細かい活字で載ったのは十月号であった。その解答者は人も知る内科学の権威、田所博士の一文であった。即ち、

「一日一回排便があるのが普通だが、二三日に一回、稀には週一回の人もある。こんな人でも便通がなくて気持が悪いのでなければ、大体差支えないものの、気持が悪い場合はその原因を明らかにして治療せねばならない。

便秘は直腸狭窄、直腸癌、結腸小腸狭窄、胃酸過多、慢性胃カタル（但し便秘と下痢が交互に来る）脳膜炎の場合等に多い。

これらの原因と認められる時は、その原因を治療すれば治るが、そうでない便秘は常習性便秘といい、大部分は腸の緊張の悪くなっている無力性便秘、時には腸の緊張が強すぎ

る痙攣性便秘である。こうした時は、排便が困難で浣腸をしないと便が出ない。

原因の分った便秘に対しては、夫々もとの病気を治療すればよいが、常習性便秘の治療法は次の通りである。

### 一、日常生活

体操スポーツなどをつとめて行い、毎日一回一定の時刻に便所にゆく習慣をつける。腹部のマッサージや温罨法などもよい。排便の習慣をつけることは特に大事であって、たとへ便秘がなくても、一定の時刻に便所へ行き便をしようと努力してみることが大切である。こうしないと、便秘が習慣となって、いよいよ頑固な便秘となってしまう。

### 二、食 餌

水分が多く、繊維の多い果物野菜をつとめてとるようにする。脂肪は便通を助けるが、肉類は便を固くするから少量にとどめたい。早朝一杯の冷水、或は食塩水は、刺激となつて便通を整えるに役立つが、濃い茶は便秘を起しやすいから注意を要する。但し痙攣性便秘の時は果物野菜等繊維の粗い食物は避けた方がよい。

### 三、浣 腸

以上のようにしてもなお便秘する時は浣腸をする。現在は手軽な浣腸薬が市販されているので、便秘すればすぐ浣腸に走る傾向があり、愈々習慣性を強める。浣腸にのみ頼る時は、直腸刺激が浣腸薬に馴れ、次第にその回数と量を増さぬと効果があらわれないようになり、悪循環を来すことがあるから、浣腸に頼ることは厳につつしまねばならない。」

以上のような解答文が、果して私を満足させたであろうか。

丁度その文に接したのと前後するように、私は未知の婦人から左のような手紙を受取ったのである。

「拝啓、突然不躰な書面差し上げます失礼の段、お詫び申し上げます。私、田所病院に勤務致します看護婦でございます。

先日、治療の友に載りました貴方様の医療相談、私、田所先生の下で秘書役を致しております関係上、先生の解答を清書致した者でございます。

実は、私、あの解答を清書しながら、誠にもっともな解答と思ひながら、果して貴方様がああ解答に満足されましたかどうか、甚だ

疑問に思つた次第でございます。

先生は、大学の講義、研究会、診断のみにて、実際に浣腸器を手に致しますのは勿論私達、その場その時の患者さんの姿を観察しながら、私は浣腸に対する、全く別の考え方をもちようになりました。

女のくせに、一看護婦のくせに、何を生意氣な事をおっしゃるかとは存じますが、貴方様の文章の端々に、——それは要約された雑誌ではうかがい知る事は出来ませんが——何かもっと深いものが感ぜられて、若し、少しでもお力になれる事が出来ればと思い、不躰とは存じながら、かようにペンを取った次第でございます。

若しお差支えなければ、もっと端的に御悩みを、お打ち明け下さいませでしょうか。御返事お待ち申し上げます。

時節柄、御身体おいと下さいませ。

かしこ

山下 啓子。」

私は驚き、かつ喜んだ。悩みに答えようとしてくる女性。私は、はやる胸を押えながら早速ペンを取った。

拝復。御丁寧なる御書簡拝見致しました。思いもかけぬ、御親切なお志、慈母に会うが如く感激致しました。包みかくさず申し上げますから、何卒御教導下さいますよう、お願い致します。

私が浣腸に関心をもつようになったのは、幼い日の思い出から申さねばなりません。長くなりますからごく簡単にお知らせ致しますと、七つ位の頃、叔父の家へ遊びに行ったら、発熱腹痛を起し、叔母に押さえつけられて、敬慕する従姉の手で浣腸されたあのショックが最初でした。

美しい従姉、その頃十五才の筈でした。その時の、表現も出来ぬ恥ずかしさくやしさを。以来、従姉の顔をみるのも恥ずかしくていやで、病気を理由に、早々家に帰されてほったものの、何かあの時の感覚がなつかしく思われるのでした。

以来、発熱すれば、年に二三度は母にイチジク浣腸を見舞われ、往診に来た医者からは、イルリガートルの洗礼をうけました。その時は家庭の事として、設備がないだけに、ポット出の女中が、頭の上に石鹼液の入ったイルリガートルを捧げ持っていたのです。家人環視

の中で、而も女中風情にまで見られる恥ずかしさ。でも医者の命令は絶対でした。おまるに排便させられる羞恥は今でも思い出して、私は体が熱くなるのです。

その中、私の妹がよく浣腸されている事を知りました。女の子だけに、母は注意していたらしいのですが、或る夜、いやがって泣き叫ぶ声に小学生の私は目を覚めました。

「浣腸はいやだよ」という声にハッとしてそっと隣室を盗み見てしまったのです。妹ではありながら、すぐ目前に、私がのぞいているとも知らず展開する光景に、思わず私は生唾をのみこむのでした。

そうこうする中、さすがに妹には気がひけましたので、近所の女の子をだまして、お医者さんごっこをしては、浣腸の真似をしてみるようになりました。

中学に入って間もなく、物置に浣腸器が埃にまみれてしまわれているのを発見した時の驚き、いや喜びはどんなだったでしょう。私ははじめて、そのグリセリン浣腸器で、水が手で浣腸してみたのです。

水はやがて石鹼水に、食塩水にと進展しました。そして家人に頼まれたような顔をして

やっとの思いで薬屋からグリセリンのポンド瓶を買ってからは、夜毎日毎浣腸の虜となっていました。

毎日、夜の来るのが待ち遠しく、勉強にかこつけて、家人の寝静まるのを待って浣腸するのです。一晚に二度三度浣腸する時すらありました。

ところが、あまり度がすぎたのでしょう。遂に肛門が切れて血が出るようになったのです。これはいけなと思って自重することになりました。

こうして今では週に二三度、浣腸して排便しています。二三日排便しなくても便意は起りませんし、便意の起るのを待つまでもなくあの浣腸の誘惑に勝てないのです。

お恥ずかしい告白になりますが、私は浣腸する時、真冬を除いては大概裸になり、仰臥、伏臥、横臥、いろいろな姿勢をとりつつ、必ず浣腸器の見える位置に鏡を置いて眺めながら施薬致します。その時、医者、看護婦等の姿を想定して、

「さあ、浣腸しましょうね。浣腸するのですよ。」

「いやだ、浣腸はいやだ。」



「駄目ですよ、浣腸ですよ。」

「いやだ、浣腸は大嫌いだ。」

「いけません。」

などと独り言します。時には自分で、猿轡をして、家人に聞えないようにした上で、思い切って、

「いやだ、いやだ。浣腸はいやだよ」

と叫びつつ、浣腸器のシンダーをグッと押し出すのです。でも、その時の我が手は、頭の中では、或は医者の手であり、看護婦の手なのです。

排便も専ら、差込便器を使っております。人に気付かれぬよう、そっとトイレの手洗いで洗うスリルも、亦何ともいえない素晴らしさと感じられてしまうのです。

お恥ずかしい事ばかり申しのべました。でも私にはいつも心の隅から離れないことがあるのです。つまり、腸の蠕動運動神経が麻痺してしまいはしないか、痔疾、或は直腸癌などになりはしないか、結婚後も妻に隠れてこうつした恥ずかしい行為を続けなければならぬのだろうか、そんな心配が次から次へと起ってくるのです。

この度は御丁寧なお手紙頂戴し、お言葉に

甘えて、こんな恥ずかしい事を申し述べました。御教示戴ければ本当に嬉しく存じます。

一週間程して、待ちかねる想いのその手紙に対する返事が来た。

「前略。私の想像していた通りのお手紙に接し、取り急ぎ、ペンを取りました。」

かく申す私も、常に浣腸器を手にして患者さんに接し、いろいろな姿態に接する中に、私も浣腸に興味をいだくようになりました。でもそれは、患者さんの浣腸に対する反応ということでございます。

患者さんの中には、平然として、当り前の事として浣腸を受ける人、これは四十過ぎの人、殊に婦人、経産婦に多いようです。一方たえ入るばかりに恥ずかしがるのは、何といっても女性、高校から三十前の未婚の若き女性。一番手こずるのは、小学生でしょう。

ところが、私の目からみて、明らかに浣腸されるのを楽しんでる世代があります。そうです。丁度あなた位の年配の方。恐らくわざと排便をこらえて、或は排便してもなかったように申告してカルテの排便の項に0を並

べ、五日目、一週間目には、どうしても浣腸せざるを得ないように仕向けてくる一群の方達です。

私はその人達の動作を注意深く観察致しました。その人々は、私が浣腸器をもって病室に入っても必ず知らん顔をしています。そして決して自分で用意しようとしません。致し方なく、私は蒲団をめくり、浴衣或はパジャマをめくり、パンツをずり下げてあげるのです。お腹に力を入れないようにと言っても、必ず力を入れて浣腸器が入りにくくするので

す。こうして手をやかせる人達の、うっとりとした眼差しを見るにつけ、一体退院後はどうするのだろうかと思像してみるのは、あなたのお手紙をみて、大体想像が正しい事が分りました。

それは確かに変わった性癖です。でも、公衆の面前で行なわない限り、社会に害毒を流さないだけに、反社会的行為とは考えられません。勿論一種のアブノーマルな性向でしょうが。人は皆何かアブノーマルなものを持っています、それがたまたまあなたもはつきりした形になって現われたにすぎず、一般社会生

活では何等アブ的な所はない筈です。

それを田所先生のように純粹に医学的見地でお止めなさいといった所でどうなるものでもありますまい。

私はお止めなさいと断言する勇氣はございません。何故かって、それは單に理性で押さえるよりも、もっと次元の高い、何か本能に近いものさえ感ぜられるからです。

でも医学的にみた場合たしかに田所先生のいわれる通りでしょう。ではどうしたらよいのか。私なりの回答を差し上げたいと思います。

第一に、これは残念なことでしょうが、纖維の多い野菜、果物などを多くとり、又毎朝コップ一杯の水、或はごく薄い食塩水をのむなりして、毎日でなくても、一応自然排便をし、それからグリセリンでなく、水で浣腸してみて下さい。水でも、浣腸の感覚は、想像力をたくましくする上で、十分目的は達せられる筈です。浣腸は必ず自然排便後にする事ですね。

それから、その回数なるべく少なくすること、週に二、三回では多すぎないでしょうかしら。スポーツなどで体力を使い、なるべく疲れて早く寝てしまうのもよいでしょう。

まあ、月に二、三回位いで止まるよう努力してみてもどうでしょう。

その位いならば、あなたの御心配も大した事はありませんね。血が出たとの事です、裂れ痔からやがて脱肛、切れた所に細菌が入って大事の原因となりますから、これは御注意下さい。月に三、四回位いなら大丈夫でしょうし、必ずワセリン塗布を忘れない事です。

次に直腸癌の御心配ですが、癌の原因は今でもよく分っていないようです。正直な所何とも申せませんが、比較的纖維質の食事が多く、従って便が大量で肛門に負担をかけ易い日本人に直腸癌が多いという事だけ申しておきましょう。或は浣腸が癌の誘因になるかも知れませんが、そう神経質になられる必要もないかと思われます。

さて、あなたも結婚適齢期ですね。よい奥様を迎えられるようお祈り致しますが、夫婦生活に浣腸を持ちこむのはどうでしょう。奥様が浣腸マニアだったりしたら、お互に誘惑し合つて大変な事になりますよ。案外女性にはマニアが多いらしいですから。

でも奥様に浣腸を仕込んだりはしない事ですね。夫婦仲よく、浣腸の必要性を没却した

らどうでしょう。でも、時には、そう、月に一度位いは、そつと奥様に隠れて、浣腸を染しむのも、人間として誰にでもある秘密性の、何かいじらしいものさえ感ぜられるのではないでしようか。

とりとめのない事をくどくどと書きました。あなたの今後の御生活の一助言ともなればと思つたのですが、やはりつまらないお説教となつてしまつたようです。

いろいろ御不満もおありでしょう、これを御縁に、お手紙、何時でもお待ちしております。御自愛の上、よりよき生活を築かれますようお祈り申し上げております。かしこ

私は何度この手紙を読み返した事であらう。勿論、これだとはいえないものの、何か心暖まるのはのとした慈愛に満ちた便りといつてはいい過ぎだろうか。

大体私はこの手紙の趣旨に従つた生活をはじめた。でも幼い日からのイメージはどうしても私の脳裡から取り去ることは出来ない。今私は、浣腸そのものだけでなく、古今の浣腸文献、写真の収集、浣腸小説等に、新たな意義を見出そうと努力をはじめた。

近い中に、山下さんにこうした事を報告したいと思っている。

女 斗 美 絵 巻  
シリーズ No 9

柔 肌 の 激 突

提 供  
雪 崎 京 人



## 麻薬密売団検挙秘話

## 泣き濡れし肌

## 鏡 獄 聖 一 郎

## むらさきの煙

「おい、何時迄黙って居るんだ。え、いい加減に白状したらどうだ。はい、昨夜兄と会いました。現在のドヤは何処そこで御座いますと素直に吐いちまいな。痛い目を見ねえうちにな」

ボーイ主任の庄野が狐面をとんがらして憎々しげに毒づいた。

「あたくし、本当に何も知らないんです。兄とは五年前に別れたきり一度も会って居ないんですから」

鶴沢虹子は蒼白な顔を上げると、決心した様にきっぱりと言った。

「このあまア、まだしらを切る気か」庄野がやにわに椅子を蹴倒して立上るのと、虹子の頬が烈しい音をたてて鳴るのが同時であった。白磁の頬に血の色が浮かび、虹子の眼に涙があふれた。

「まあ、そう急ぐ事もあるまい。こっちは、ちゃんんとネタア上ってるんだ。昨夜、この女が閉店近く迄誰と会って居たか。喫茶エンゼルで何を話したか。この女が兄憲次郎の行先を知らぬ筈はないんだ。が、まあ言い度くないって言うんなら、それもよかるう。」

時間をかけてゆっくりと聞く迄だ。いや、その方が却って楽しみが深いかも知れねえな」

大和興業株式会社社長藤浪隆造は、体に似合わぬ陰湿な声でにやりと笑った。

「社長さん、御用はそれだけでしたら、これで失礼さして戴きます」

虹子は危険なものを感じ、足早に戸口へ歩みよった。

意外な事に誰一人止める者もなく、一様に意味ありげな笑みを浮かべただけであった。が、間もなくその意味を知らされた。

ドアは開かなかった。ノップのガチャガチャと言う金属音のみが、徒らに虹子の焦燥感をかき立てただけであった。

「お生憎だな」

何時の間にか、背後にマネージュの西口の幽鬼の様な影が嘲笑った。

「こんな処に閉じ込めて、どうしようと言うのです！ 本当に、何も知らないんですから帰して下さい」

顔骨がとび出て眼窩の窪んだ西口の顔をきつと見据えながら虹子は必死に抗弁した。

「静かにしろ！」

やにわに西口が虹子の弱腰を蹴りつけた。ベージュのフレイヤー・スカートの裾が朝の



光を吸った夕顔の花のように聞き、虹子は仰向けさまにぶっ倒れた。

二匹の野獣はすばやく躍りかかった。

虹子の繊細な肉体は男の重圧に耐えかね煉瓦色のフロアの上をのたうち廻ったが、その度に華やかな色彩が散乱するばかりだった。

虹子の肌が冷気を感じた時、荒らされたお花畑のような荒涼たる中に、何時しか黒いスリップ一枚に剝かれた細い両手は、ねじ切れそうな程きつく後手に縛られていた。

「さあ、立て！ 立つんだ」

庄野が虹子の黒髪をむすどと掴むと、ズルズルズルと社長の前迄引きずって行った。頭髮がすべて抜け落ちるのではないかと思われる痛さに虹子は思わず息をのんだ。

「社長、除幕式は社長にお願いしますよ」

阿諛するような庄野の言葉に、藤浪隆造は鷹揚に頷いた。

「西口君、缺だ！」

何時の間に用意されたのか、洋裁用の大きな裁ち鋏がうやうやしく手渡された。

虹子は思わず眼を閉じた。

「鶴沢君！ 震えているね。何も恐がる事はないんだよ。人間生まれた時は皆裸だ。君にもその通りになって貰った上で何もかも話し

て貰おうと言う訳だ。さあ、きれいな肌を拝まして戴こうか」

藤浪隆造は緩慢な動作で虹子の鼻っ先へ鋏をつきつけると、パチリと右のスリップの紐を切った。それから幼児が切紙細工を楽しむように、ゆっくりと鋏を縦横に動かした。その度にミルク色に烟った肌が現われた。淡紅色の乳首をつけた可愛い乳房が二つぼろりとこぼれた時、虹子の双眸から涙が糸を引いて流れた。

「どうだ、決心がついたかね」

隆造の粘液質な声がからみつく。

虹子は歯を喰いしばって答えなかった。

雨に打たれた黒百合の花弁のようなスリップの堆積の上に、心持ちうなじを垂れて立つたその様は、ボッティ・チェリーのヴィーナス誕生の絵からその儘抜け出たような美しさであった。

「ふん、顔に似合わせ強情なお嬢さんだ。よし、それじゃ一汗かいて戴くとするか」

ややあって、社長の藤浪は眼を細めて言った。彼も又、猫が鼠を弄ぶように様々な姿態をさせて、苦痛にたえかねて洩らす悲鳴の幻想を楽しんでいたかのようであった。

「おい、お嬢さんが我々にカンカン踊りを見

せて下さるそうだ。用意をしてさし上げな」

社長が顎をしゃくると、二匹の狼共はふと我にかえたように虹子の左右の肩をつかむと部屋の隅に立たせた。そこで一旦紐を解き、L型になった帽子掛けに思いきり両手を伸ばした恰好に縛り直した。

ラストのスネーク・ショウが始まったのであろうか、階下のホールから遠い春雷のような物憂いバンドの響が這い上って来た。

藤浪はロンソンのライターでフイリップモリスに火をつけ、ゆっくりと虹子の前に歩み寄った。英国仕立のダブルのポケットに無難な作に片手をつっこんだ姿が、その下卑た顔に不思議に貫禄めいたものを見せ、このキャバレーの他、京都と神戸に豪華なナイト・クラブやトルコ風呂を経営している実業家としてのポーズが身についていた。

「ギャーッ」不意に獣じみた呻きが虹子の唇からはとばしった。

藤浪が無防備にさらされた虹子の右の腋の下に火のついた煙草を近づけたからである。

藤浪隆造は彼女の甘酢っぱい腋臭の匂いとヘリオトロップの香気を嗅いだ。虹子の額からじつとりと冷い脂汗が吹き出た。

眩しいばかりのシャンデリヤの光が急に暗

くなり、青いシェードのスタンドの灯のみが深海のような暗緑色の光の斑を、そこそこに投げかけていた。

「さあ、お前達も、この美しいお嬢さんに敬意を表したらどうだね。おっと、その前にあまり派手に騒がれると折角のムードが台無しになる。これで暫くお静かに願うんだな」

藤浪隆造は、つと身を屈めると、するすると履いていたグレイの靴下を脱ぎ庄野の方へ放った。バラの蕾のような虹子の小さな唇が裂けんばかりに押し上げられ、嘔吐を催しそうな隆造の靴下が口中に詰め込まれた。そして、その上を頬がくびれる程きつく手拭で猿轡をかまされた。隆造は脂症らしく、その腐魚に似た異臭は、虹子の繊細な神経をまいらせ、彼女はたまらず黄色い胃液をどっと口中に充滿させた。

虹子の涙に濡れた眼に窓外のネオンの灯が哀愁を含んでポーッと滲んで映った。庄野は社長の下賜のフリップ・モリスを氣取ったしぐさで吸うと、ふーっと紫の煙を虹子の顔に吹きつけ

「それじゃ、ぼつぼつ火の接吻と行くか」

片頬に残忍な笑みを浮かべると、そろそろ近づいた。

虹子は薄明りの中に息づく赤い火の輪が、チロチロと細い舌を出して襲いかかる白蛇のように不気味に感じられた。

彼女のふくらとした右乳房に、その火は激しく喰いついた。虹子は不自由な身をあらん限りの力をふりしぼって必死に左へ身をのけぞらしたが、そこには酷薄な西口の煙草の火が蛭のように赤い口を開けて待っていた。

虹子は無駄な抵抗と知りつつも、肌を焼かれる熱さに体中の汗をしぼりつつ、狂人のように滅茶滅茶に体を左右にふった。

彼女の雪白の肌に点々と魔性の爪跡のような煙草の焦げ跡が痛々しく印せられ、全身の汗の粒がぬるぬると気味悪く這い廻った。

「フフフフ、なかなか器用に踊るじゃないか。これじゃ東京ピカデリーのスネークダンスもシャッポを脱がずばなるまい。それじゃ、ついでに今度は本格的なグラインドを見せて戴こうか」

隆造はヌードダンサーが、まるで臼でも挽くように円く弧を描いて尻をふる、その踊り方を好むのか、さも嬉しげににたにたと笑った。

青い光を吸った、その精力的な顔は海坊主のように醜怪であった。哀れな虹子は彼等の

歪曲された心理を喜ばす為に後向きにさせられた。

挽きたての青い果実のようにゆたかに脂肪ののった臀部に、執拗な苛虐の火の雨が降った時、虹子の網膜に赤や青の強烈な光の箭が無秩序に入り乱れ、それがやがて凄い速さで渦となり、その渦の中から、悲しげな亡き母の歎り泣きを虹子はうすれ行く意識の隅で聞いた。

## 町の灯

十月も終りの冷やかな夜の風は憔悴した虹子の頬に痛くしみた。空に月は無く眼下に百万弗の夜景、町の灯が黒ビロードの上に寶石の屑を撒き散らしたように群れていた。

その視界のやや東よりに、一段と光彩を放つのは三宮の歓楽街であろうか。あの灯の下では虹子と同じ年頃の娘達が恋人の厚い胸に顔を埋めて青春の悦びにむせ乍らワルツを踊り続けているかも知れない。或は明るいショーウィンドに顔をよせあって買物の相談をしている一組青い水銀灯の灯影で明日のデイトの指切りをしている若いカップル、それ等の群像が影絵のように虹子の脳裏に描かれ彼女は自分の悪夢のような日日と思い合して、思

わず迫り来る嗚咽を嚙み殺した。いや、現在の彼女は声をあげて泣く事さえ許されてはいないのだ。

透明な水色のネグリジエ、品よく交叉したすんなりした足の先に無難作につっかけたシルバークレイのサンダル……。室内の照明が、このテラスのあたり迄ためらい勝ちに流れ、



ヴェランダに身を横たえた虹子に淡いレモンイエローの光の斑を投げかけていた。

その様は虚飾と逸楽に倦んだ佳人が、晩秋の夜の感傷を反芻しているかのようであった。しかし仔細に観察すれば、彼女のサーモンピンク色に鈍く光る小さな唇のあたりに、あたかも毒蜘蛛のはりついたような黒いかげ

りが見え、細い喉頭に喰い入るように嵌められた首輪が奇異を感じさせた。

虹子は此の神戸の別荘に拉致せられてから幾度死を願ったか知れない。悪鬼のような彼等の責はそれ程苛酷を極めた。逆吊り、海老責め、木馬責め、その他あらゆる淫靡で凄惨な責めが、彼等によって考案され実行せられた。この洒落たコテージ風の建物の床は虹子の流す脂汗と血と涙で変色し、そのクリム色の壁は、夜毎彼女の病み犬のような呻きを聞いた筈であった。しかし、不思議に食事は毎日豪華版で入浴や化粧の時間はたっぷりと与えられた。

だが、それは彼等の嗜虐の喜びをより効果あらしめる為の配慮に外ならなかった。虹子の疲労した肉体は、これ等の美食をも素直に迎合せず彼女が拒絶すると無理矢理に口をこじあけ喰べさせられた。彼女の弱った胃腸は、これを咀嚼し消化する力だになく彼女が腹痛を訴えると床の上に犬のように四ツん這いに

させられ、浅ましくも流腸させられた。

その脇に社長の藤浪隆造がアームチェアに深々と腰を下し例の海坊主のような顔に不気味な笑みを浮かべ、舐めるように眺めていた事は言う迄もない。

虹子が自殺を計ったのは、その夜の事である。ラジオが台風のニュースを伝えていた。風が出て雨が混じった。戸が軋み窓外の木々のささやきが狂おしい悲鳴に変わった。

マントルピースのその花瓶が音をたてて割れた。虹子は、この時、死を決意した。土気色をした彼女の唇から一筋、紅絹色の血が糸を引いて流れた時、隆造は何やら訳のわからぬ叫びをあげ、跳ね起きると彼女の頬に無茶苦茶な平手打ちを喰わせ、彼女の口中に布片を凄い力で押し込んだ。

彼女の朱唇に毒蜘蛛の様な黒いかげりが見られる様になったのは、この頃からである。彼女が舌を噛み切って自殺するのを防止する為、精巧な口輪を嵌め、それが小さな紅バラの蕾に果喰った女郎蜘蛛の様に見えたのである。彼女に対する監視の眼も一層厳しくなり、夜はネグリジェの下に何もつける事を許されず彼女の白い喉頸に痛々しく簪められた太い首輪は鎖で連結され、その尖端はベッド

の脚にしっかりと結びつけられた。従って彼女の行動半径はベッドを中心にしてテラスの中央かせいせいドアの三步程手前の処迄に制約された。鎖は彼女が身を動かす度にジャラジャラと嫌な音をたて彼女の屈辱感に油を注いだ。

妙な事に、あれ程執拗に固執した兄憲次郎の住所に対する追求も次第に薄らぎ、遂には一言も聞かなくなった。しかし、虹子に加えられる加虐の鞭は弱まるどころか、益々激しさを加えて行った。

虹子は、加えられる苦痛に朦朧となる意識の中で、あたしは、もしかしたら、この藤浪隆造に虐め殺されるかも知れないと思った。彼女の受難は兄憲次郎に起因している事は確かのである。

梅田コマ裏の喫茶店エンゼルで五年振りに会った時、懐しさに口も聞けずにいる虹子をしげしげと眺め乍ら、

「虹子、お前にも長い間随分苦勞をかけてすまなかった。兄さんは今大事な仕事をしている。どんな処に勤めているのか、何処に住んでいるのかも云えない。亦、今夜こゝで私と会った事も誰にも云ってはいけない。お前の身に危険がふりかゝるかも知れないのを恐れ

るからだ。でも心配はいらない。兄さんは決して人から後指をさゝれる様な、暗い仕事に携ってはいない。いや、それ処か、世の中の悪を一つ一つ消して行く意義ある職業についている。五年前、兄さんは家を飛び出した。

若いお母さんにどうしても馴染めなかったのだ。親子三人で培った暖い空気の中に突然異質の冷い風が吹き込んで来た様に若い優子さんの出現は私の心をとまどわせ亡き母の影は、この闖入者に母と呼ぶ事を頑に拒んだ。氷の水幕の閉ざした家庭の雰囲気耐えられず私は家を出た。この兄の気持は虹子にはわかって貰えると思う。いや間もなくお前も家を出たのだったね。後でその事を知った時、心の中で兄さんは思わず快哉を叫んだ。父さんに復讐した様な気持になった。あれ程愛していた母さんの面影を只一つ抱いて生きて行けない中年男の生理を軽蔑し憎悪していた私は子に叛かれた父の姿を想像する事によって、こみあげる怒りを僅かに慰めた。兄さんはやりきれぬ淋しさと憤怒を忘れる為、自ら最も危険な職業を選んだ。それが今の仕事だ。生と死の境に身を置いて全身をぶっつけて戦う日々は、暫くの間すべてを忘れさせてくれた。しかし、それも長くは続かなかった。血



は水よりも濃いと云うが綿の様に疲れ切った体、寸秒の油断も許されぬ緊張の連続、それ等で埋められた生活の中に砂にみる水のように何時しか虹子や父の面影が忍び入り、とうとう懐しさにたまらず、こうして会いに来たと云う訳だ。虹子、兄さんは間違っていた。

今では、父さんや優子さんにすまないと思ってる。この儘では亡くなった母さんも決してお喜びにはならないだろう。虹子、父さんには父さんの世界がある。父さんの幸福を暖い目で見守ってあげようじゃないか。そうだ、虹子も一度家へ帰るといふ。そして、この親不孝者の兄を許して下さるように云つてくれ。兄さんも今の仕事が一段落ついたら、必ず一度お詫びに帰るつもりだ。いゝね。それ迄は父さんの事くれぐれも頼んだよ」

スタンドの光を吸って、残照を受けた様に顔の半面を赤く染めた兄の姿を虹子はこよなく美しいと思った。

心持ち裏れていたが、削げた頬、引きしまった顔にも世の荒波と戦った逞しさが感ぜられた。住所も聞かないで欲しい。こゝで会った事も云わなくてくれと云う兄に、虹子は始め暗い疑惑を覚え、何か犯罪の匂を嗅ごうとしたが、その澄んだ瞳には少しの曇りも見ら

れず、虹子はほんの暫らくの間でも、兄を疑った事を恥ずかしいと思った。

兄、父の様子や虹子の近況を聞かれた時、話がたまたま虹子の勤務先の事になり虹子が今キャバレーヤングムーンに勤めている事を話すと、兄の顔に一瞬驚愕の色が走り、それから異常な熱心さで店の様子や店に来るお客の中で変った者はいないかと尋ね、殊に社長藤浪隆造の身に関しては執拗な迄に尋ねた。

それは単に虹子の職場に深い関心を覚えたと云うだけにしては、あまりにも熱心過ぎた。それだけが虹子の心の中に淡い灰色の翳りを落した。しかしその得体の知れぬ醜な影も次第に、その形を露わにした様である。もし虹子の推理が正しければ兄は何か警察関係の仕事をしているのではないかと。そしてその犯罪捜査の網の中に、たまたま藤浪隆造の線が浮かび上って来たのではないだろうか。そう云えば彼には暗い影が付きまといっていた。第三国人と共謀して麻薬の密売をやっているとか、大がかりなコールガール組織のボスであるとか虹子もそんな噂を聞いた事がある。勿論、その時は彼の謎につまされた経歴と、こゝ二、三年の間に巨万の富を得た事に

対する貧者のひがみが、悪意に満ちた嘘言を捏造したのだと信じなかったが……。

しかし、それはあり得る事である。虹子は隆造の膝下でうめき乍ら、あるいは西口の振り下す皮バンドの鞭の下に、白い体を芋虫の様に蠢めかせながら、しびれゆく意識の中で思った。あたしは兄が見つかる迄の間にすぎない。兄が見つければ瞬時に、兄もあたしも殺されてしまふに違いない。

虹子の心の中に確信めいた固さで、それは凝結して行つた。隆造の非情さがそれを教えた。

「おい、社長のお呼びだ！」

突然、虹子は突き飛ばされてもした様にベエラングから転り落ちた。瞬間、虹子は暗い夜空に、流れ星が美しい弧を描いて落ちるのを見た。

虹子の回想を裁ったのは、西口の陰鬱な声であつた。その右手には先刻虹子の重量を計量した鎖がしっかりと握られていた。

## 夜の爬虫類

それから数刻……。虹子に乗せたキャデラックは夜の神戸を走っていた。何時しか外は音もなく霧雨が降っていた。テール・ライト

の赤い灯が二本の火箭の様に董色の靄を縫った。夜が深いのであろう、大通りの人影も途絶え、商店街は大戸を下していた。

先刻迄喧噪を極めたこの港町も、今ははや水底に沈んだように雨に烟っていた。車は、かすかな軋みをみせ、とある街角に止まった。

舗道に寝ていたのであろうか、汚いボロをまとった浮浪者が、よろよろとヘッドライトの光の輪に浮かび上った。

両脇から虹子の腕を支えていた西口と庄野は、一瞬「ギョッ!」となった様である。思ひなしか垢だらけの顔の中の浮浪者の瞳もあ

る光が走った様である。が、すぐにその浮浪者は妙に口を歪めると口の中で何やらブツブツ不平をならすと霧雨に消えて行った。

「チョッ! びっくりさせやがる!」

庄野は舌うちすると虹子の背を小突いた。西口と庄野は虹子の腕をつかんで狭い路地の中を引っぱり廻した。

路地の両側はマッチ箱を押しつぶした様な小さな家が立ち並び、胸の悪くなる様な油の臭とニンニクの異臭が充満していた。と、その中に庄野が螢火の様な蒼い光の濡れている軒灯の家の前に立止りコツコツコツと三度扉を叩いた。

「花児」

中からすれた声がした。

「是!」

庄野が答えると、それが合図の様に重い扉が開いた。

庄野が入り、続いて西口が虹子の背を押した。

部屋の中には黒い中国服を着た老婆が影の様につっ立っており、前のめりに入って来た虹子の姿を見ると、その皺だらけの顔が崩れ



グクツと咽喉の奥で不気味に笑った。

庄野はつかつかとその老婆に近寄ると椎茸の様な耳朵に口をよせ何事かささやいた。老婆は大きく頷くと巾着の様な口をすぼめて何か言った。低い嗄がれ声であった。庄野は西口の方を振り返ると片目をつぶった。西口は虹子の背を押した。よろよろと倒れかかる虹子の体重を老婆の枯木の様な手が支えた。その膂力は意外な力で虹子の細い胴を締めた。「さあ、疲れたろう。二階でゆっくり休むがいい」

老婆は虹子の体を包む様にして階段の処迄導いた。

仄暗い部屋の中央に、しっとりと脚を下したその階段は紅殻色の奇妙な形をして居た。階段の中途迄来た時、虹子は後を振り返ったが、そこにはすでに庄野や西口の姿はなく、重い扉が冷たく虹子の心を遮蔽して居た。

二階の部屋は、六畳ぐらいの広さであろうか、隅は濃い緑色の緞帳の様な厚いカーテンで遮ぎられて居るので、さだかではないが、中央には青色で山水をモザイクした黒塗りのテーブルが据えられてあり老婆は、その前に虹子を座らせると彼女に鳥籠茶をすすめた。虹子は一口飲んだが何となく苦い様に思

った。落ち窪んだ眼窩に嵌り込んだ老婆の瞳が急に妖しい輝きを見せ、続いてその光芒が糸の様に細くなったと感じた時、老婆の輪郭が次第に滲み虹子の知覚は距離感を失った。アラベスクのカーペットに激しい音をたてて皿が落ちテーブルの上に流れた液体の海に虹子は崩れる様に顔を埋めた。

それから、どのくらい時間がたったのであろうか。虹子の網膜に最初に映じたのは、赤いビー玉の様な光の点であった。

やがて、その点は次第に数を増し、無数の光の群となって遂には虹子の網膜一ぱいに赤い光の幕となって拡がりゆらゆらと揺れた。

その赤い炎に焼かれる熱さに虹子は思わず呻き声をあげた。

虹子は己が呻きに驚いて泥の様な眠りから覚めた。

虹子が赤い光の幕と見たのは、朱に塗られた周囲の壁であった。その朱の壁には銀と金泥で一つの珠玉を争う雄竜雌竜のからみあい

が描かれて居た。何時の間にやら、あの奇怪な老婆の姿はなく、部屋の隅の緑のカーテンが、かすかにたゆとうて居た。

静かである。コトリとも音がしない。ガス

ストーブの火であろうか、そのわずかな息使いのみが生暖く虹子の耳朵をうった。

部屋の中は春の陽気である。

虹子は身を起そうとして、思わず「うっ」と息をのんだ。両腕の自由がきかない。気がつくとも虹子は狭いベッドの上に仰向けに寝かされ両腕は後手にベッドの脚に固定され、両足は浅ましくも高々と上げた恰好でベッドの両端にしっかりと縛られて居た。虹子は羞恥に全身が赤く染まるのを感じた。

と、不意にカーテンが二つに割れ、潤沢な艶を持った白い中国服の男があらわれた。

その男は黒いサングラスをかけ、つかつかと虹子に近づくと、じっと眼鏡の奥から虹子を凝視した。

腐蝕した死魚の様な臭いが虹子の鼻腔を撃った時、男の顔は虹子の上にあった。

男はゆっくりとサングラスをとった。

「アッ」虹子は思わず驚愕の叫びをあげた。毛孔の一つ一つ迄見えそうな近さに迫ったその顔には眼がなかった。

左の眉根のあたりから赤い雪崩の様にくずれた肉塊は醜いひきつれとなって瞼の上に重く垂れ下り、右眼は魚鱗を嵌込んだ様に、どろりと灰色に曇り光を失って居た。

男は不意に驚くべき確かさで虹子に向って手を伸してきた。

「うっ／＼」虹子は呻いた。

盲の男は虹子の苦悶の表情が見えでもする様に嬉しげににたたと笑い、やがてそれ自体一個の生きものの様に恐怖にびくびくと痙攣する白い喉頭に男の暗紫色の唇が近づく

静脈迄透けて見えそうな白い肌の汗の粒がふっふっとうかんで流れた。意識は朦朧として頭は熱病患者の様にカッカッと燃えた。

虹子の全身は水につかった様に脂汗にびっしりと濡れ、顔は火の様にほてって居るにもかかわらず体はおこりの様に悪寒にふるえた。虹子の二の腕と足首にからみついた麻縄は虹子がもがけばもがく程、痛ましくいぐびれを深くして続肌を咬みついていた。

赤い部屋にミルク色に濡れた肌を波うたせてのたうつその様は、暗い血の海に投げ込まれた人魚のあえぎにも似て妖しくも亦美しい光景であった。

と、その時、何やら階下で器物の毀れる音が聞こえ激しく人の言い争う声がした。

男は触角の発達した爬虫類の様につと鎌首をもたげると、やにわに緑のカーテンの中に身を躍らせた。

男がカーテンの中に没入したのと、どちらが後か先かカーテンの外で、どたりと人の倒れる音がした。

緑のカーテンが騒ぎ、黒い影が浮き出た。影は浮浪者の顔になり、その雨に濡れた垢だらけの顔が何やら訳のわからぬ叫びをあげて虹子に突進して来た。

虹子の小さな顔に男の翳りが淡い銀鼠の影をおとした時、浮浪者の眼にみるみる涙があふれ、汚れた頬を伝ったその涙は、ぼたぼたと虹子の白い頬を濡らした。

その日の朝刊にトップで次の様な記事が出て関係者を瞠目させた。

「麻薬密輸団捕わる！」

首魁藤浪隆造こと金順換は逮捕寸前

毒をあおいで自殺」

神戸方面に大がかりな麻薬密輸のルートがあるとの情報から、かねてより内偵中の兵庫県警防犯課は厚生省ならびに近畿各府県警察の協力を得て今晚大阪市生野区猪飼野大和興業株式会社社長藤浪隆造こと金順換、神戸市生田区北長狭通、貿易商、隆司公司経営陳隆栄、神戸市生田区山本通キヤバレー「ヤングムーン」支配人西口実宅を急襲同人等を麻薬取締法関税法、外国為替管理法違反の疑いで

つかまえたが金はいちはやく察知逮捕寸前青酸カリをあおいで自殺した。同課の調べによると金は五年程前から陳等と共に、香港から多量の麻薬を数回にわけて空輸、神戸及東京方面に売り捌き数億の巨利を博して居た。なお金はキヤバレー・ナイトクラブ・トルコ風呂等を経営するかたわら、巧妙なコール・ガール組織を繰り関西方面では暗黒街の帝王として君臨して居た。

本事件の殊勲者厚生省麻薬取締官鶴沢憲次郎氏の話、麻薬の恐ろしさは今更言う迄ありませんが、金は今迄検挙された麻薬密売団の中でも大掛りな奴です。でも、ようやく逮捕出来て、こんな嬉しい事はありません。今度の捜査に当っては妹の虹子の働きに負う処が多かったのですが、彼女は可哀想に金の毒牙にかかってしまいました。でも幸な事にショックによる軽い精神錯乱で一週間も安静にして居れば全治するとの話です。ので安心です。今は只一日も早く妹がもとの明るい娘にかえってくれる事を願う気持ちでいっぱいです。

初冬の弱い朝の陽射を受けて消毒臭い病院の布団にくるまる虹子の裏れた頬に心なしか血の色が浮びこの兄の切なる願いが届いたかのように血の気のない唇が、わずかではあるが綻びた様である。



Mフオト組寫眞 人 間 馬 の 調 教



女主人と奴隸  
飼育中



# 『マゾ・モデル募集』

〈出演している男性モデルは応募した読者です〉





足舐めの構図





女臭にむせぶ

マ  
ゾ  
の  
境  
地  
  
牝  
豹  
の  
凌  
辱



法悦境

足拭き台



捕えられた女の哀愁



杉江美津子



## 体験小説

## あ　　る　　娼　　婦

西　　田　　仁

## 一、ある邂逅

もう、ひと昔に近くなる。

なにかうきうきと心の弾む宵だった。貰ったばかりの給料をふところに、私はいつものようにその横丁へはいつていった。

青、赤、黄色、さまざまに明滅する原色のネオン、そぞろ歩きの嫵客の姿、女たちはたった今目覚めたような潑刺たる姿態を思い思いのドレスに包んで、仄暗い戸口のあたりから妖しいウイנקを送っている。もう、肩から胸へかけて大きくくり抜いた衣裳をまとっている者さえ見受けられるこの頃の陽気だ。

私は足を止めて指を鳴らした。

真っ赤なドレスの女だ。逞ましい肉置きを思わせる厚味といい、肩に流れる黒髪の艶といい、それは全く私の嗜好にぴったりのヤツだ。

二階六畳の間。洋服ダンス、整理ダンス、

小机、鏡台など粗末なものながら一応揃ってまア普通に稼いでいる夜の女のたたずまいがそこにあった。

が——。明るい灯の下で、あらためて女の顔を見直した私は、おや、と思った。

——どこかで見た顔。

それを想い出すのに時間はかからなかった。

五年まえの記憶が色あざやかに蘇った。

私は相手の顔をまじまじと見つめた。

「なに、へんな顔してるのさ？」

「きみ——」

と私は云いかけたが、ふと思いとどまって

「名前は何んて云うの？」

「名前なんて、あとでいいじゃないの」

——確かにあの女だが、まさか——。

私は半信半疑の首をひねった。ぱちんと部屋の電灯が消える。メリンス夜具の花模様に淡いシェードの光が流れた。

## 二、ある記憶

昭和二十年の春、高等小学校を卒業した私は満で十四才になっていた。卒業すると直ぐ東京郊外の飛行機工場に徴用された。生れて初めて両親の許を離れ、遠い土地で寄宿舎生活にはいることは、たまらなく心細く不安であつたが、そんな感傷は決して許されない暗い厳しい時代であつた。

警戒警報下に入所式が挙行され、それでもサイダーやキャメルを貰ってちょっと嬉しかった。昼食を済ませると、こんどは工場附属の診療所に連れていかれて身体検査だ。

私は生れつき背が低くてしかも痩せており高等科を出ていながらまるで小学生のような体格だったので、身長順に整列するところでもやはりどんじりだった。

「もっと大きくならにゃ、物の役に立たん」  
中年の医者は軍隊口調でそう云いながら、

私の肩を掴まえて、まるで玩具でも扱うよう  
にくるくると廻し、入念に診察していたが、  
やがて「べつに悪い処はないな」とつぶやく  
と「よし」と怒鳴って突き放した。

私は慌てて廊下に飛び出したが、あまり内  
診に時間がかかったので、仲間の姿を見失っ  
てしまった。次に行くべき場所も分らず、ま  
ごまごしながらなにげなく向いの扉を押した  
私は、そこに意外な光景の繰り展げられてい  
るのを見た。その時に私の受けた異常なショ  
ックを、果してなんと呼ぶべきであろう。あ  
とになって考えれば、それは疑いもなく性欲  
であった。自分の体内に躍動す  
る得体の知れない欲求を、しか  
し自分では処理することができ  
ないところから生じるやり切れ  
ない鬱積感、私がそれに捕えら  
れたのはじつに、この部屋に於  
てであった。

扉の蔭に大きな衝立が置いて  
ある。暗い部屋だった。私は早  
く仲間に追いつきたい気の焦り  
から、声もかけずにひょいとそ  
の衝立の蔭を覗いた。  
壁際に寄せて粗末な鉄のベッ



ドが備えてあり、そこには私と同じくらいの  
少年がひとり俯伏せになっていた。それだけ  
ならなんの変哲もないのだが、私の驚いたの  
は若い女が二人がかりでその少年を苛めてい  
たからだ。

少年は扉の方に足を向けていたが、その細  
い足にはゲートルが巻きつけられたままで靴  
下は穿いていなかった。真っ黒に汚れた蹠は  
もう抵抗の意志を全然持っていないように力  
なく投げ出されていた。長い白衣を着た女医  
さんらしい人が、横ざまに腰かけるような姿  
勢でのしかかっており、こちらから顔は見え

ないが、少年の背に屈み込んでなにかしてい  
るらしい。屈伸式の電気スタンドが手許を明  
るく照らしている。

いっぽうこちらに顔を向けているのは、純  
白のブラウスを清清しく着こなした大柄の婦  
人だった。彼女は少年の両腕をうしろ手に捻  
じ上げてしっかりと押えつけ、あまつさえそ  
の首筋に黒いストラックスの膝をのせかけて、  
身じろぎもできないように組み敷いていた。  
私はふと、オーストラリアの娘たちが羊毛を  
刈り取るときの姿を想い出した。しかし彼女  
たちはストラックスではなく、フレアーのつい

たスカートを穿いていたので、  
羊を抑えつける下肢の動きはそ  
のなかに隠されて、あからさま  
に見ることはできなかった。事  
実古い画報でそれを見たとき、  
私はべつになんの感じも持たな  
かった。が、今はわかった。あ  
の美しい濠州の娘たちの脚が、  
腰が、そして尻の重味が、華や  
かなアラベスクのスカートの蔭  
でどんな残酷な行為を犯してい  
たのか。生れて初めて、私は  
足ががくがくする程の興奮に駆

られながら、そっと衝立の蔭に身をひそめた。

「しっかり抑えててね、直ぐだから」

そう云ったのは女医さんのほうだ。彼女はつと腰を浮すと素早く少年の上に跨り、仕事のやり易い姿勢をとった。

「だいじょうぶ。もうずいぶん暴れたもの」

白いブラウスの婦人は、膝下に引き据えた少年に話しかけながら、綺麗な歯並みを見せてにっこりした。甘い声だ。捻じ伏せられたゲートルの足が、二、三度ばたばたと動いたがそれははかない抵抗に終わった。女二人の暴力の前に、少年は完全に屈伏したらしい。

「女ざかりの体力か」

と女医さんが云い、二人は声を併せて笑った。それは彼女たちの間で通用している流行語のようなものらしかった。戦後の今日ではもう死語にもなっているそんな言葉が、当時とはとくべつに新鮮な響きをもって聞かれたの



だ。

「さ、いいわよ」

白いブラウスの人は、自分の絶対不動の勝利を確かめるような調子で云い、嵩にかかって両手に力を加えた。やや俯向いているその顔は、しかし精一杯の力を振りしぼっているという表情ではなく、下唇を噛みしめ、目許

に薄い笑いを浮べている。捕えたネズミを殺すとき、女の人はよくこういう顔をするものだ。私は思った。捕まったネズミはもはや彼女たちにとって、危険な動物ではないからなのだ。

ゲートルの少年もその通り。

女たちが許さない限り、彼は絶対に起き上ることはできないだろう。ちょうどネズミとりに落ちたネズミが、絶対に自分の力で逃げ出すことができないように。そしてネズミと同じように、誰も少年を助けてはくれないのだ。これはおそらく、少年にとってなにか必要な治療が施されているのだろう。患者がそれを厭がって暴れるので、止むを得ず二人がかりで遂行しているのだと私もわかった。苛めているわけではないのだ。

大義名分ははっきりしている。

私は一刻も早く、この部屋を出なければならぬことに気がついた。彼女たちが仕事に熱中している間に、そっと気付かれないように部屋を出て、仲間の列に加わらなければ叱

られる。

私は釘付けになった足を、一步一步引き離すように運びながら、幸い誰にも咎められずふたたび廊下に迂り出すことに成功した。

私たちの寄宿舍は、工場から千メートル程離れた丘の疎林のなかに建っていた。木造の粗末な建物であった。

舎監兼工場指導員である、軍隊の下士官みたいな顔をした三十男に引卒されて、私たちがともかくそこに落着いたときは、もうあたりは薄暗くなっていた。

「荷物の整理が済んだら五人一組で入浴。」

下士官は大声でそう命令して、

「小さい方からはいれ」

と指示をくだした。

私たちチビ五人は急いで風呂場へ向った。

なんでも素早くやらないと、たちまち大声で怒鳴られるからだ。汗ばんだシャツを脱ぎ棄て、処々欠け落ちているタイルの床に足を踏み入れたとき、

「あら、あんたたち、もう来たの」

誰もいないと思った浴槽のなかからそういう声が聞え、一人の婦人が飛沫を散らして飛び出して来たのだ。

「あッ」

先頭になっていた私は、思わず棒立ちになった。

あの人だ。

さっき病院で見た白いブラウスの女性が、今は私の目の前に立ちはだかっているのだ。小麦いろに張り切った肌が、流れ落ちる水滴をきもちよく弾いて、薄闇のなかになまなましく光っている。

私たちは流石に顔を見合わせて、脱衣場のほうへ戻ろうとした。すると、

「いいのよ。あたし、もう出ますから」

婦人はかまわずにどんどん上って来て、流し場の隅に片膝をついてしゃがみ、タオルをゆすぎはじめた。私たちは恐る恐るその前を通って浴槽に沈んだが、私は婦人の姿態から目を離すことができなかった。タオルをゆすいでいるその人の恰好が、どうしてもさっき覗き見たときの姿に重なるのだ。あの少年を無惨に虐げていた腕が、臀が、脚が、その体の総べてがそこにむき出され、なまの重量感を持って動いていた。ゆるやかな曲線を描いているそのポリウムは、確かに男の子の一人や二人捻じ伏せてびくとも動かせない力が溢れているように思われた。私は真っ赤に茹

だりながら、云い知れぬ興奮に身を委ねていた。

そのうちに婦人は立ち上り、きつくしぼったタオルで全身を拭きはじめた。母と一緒に風呂へ行かなくなってから、もうなん年になるだろう。子供の頃は、女の人のこうしたあけすけな姿をよく見たものだ。子供だと思つてバカにしている。貧弱な体格から来る劣等意識が人一倍強かった私は、幼な心にいつもそういう反撥を感じたものだ。

が、今日は違う。あの体でのしかかれ、あの脚で踏みつけられたら、私なんか息が止ってしまうのではないかという徹底的な敗北感に脅かされた。

婦人は私たちのそうした視線を感じるのか感じないのか、平然として体の露をとると、ふと私の横の少年に目を遣って、

「あら、あんた」

と云った。

「お風呂はダメよ。バイキンがはいったら大変じゃないの」

甘い、優しい声音だった。

声をかけられた少年は、黙って素直に浴槽を出た。その背中には、米の字型のバンソウコウが貼りついていていた。



——ああそうか。

私は総べてを諒解した。病院のあの部屋でぎゅうぎゅうの目に遭わされていたのはこの少年なのだ。根太のような腫物が背中に出てくるのを身体検査で見つけられ、あの女医さんに切開されたのだろう。

「やっぱりあんたね」

婦人は少年の背中を確認してから、「みんな同じようで、顔を覚えられやしないわ」

と云った。ひどいことを云う、と私は思った。さんざん痛めつけた相手の顔を、そうもかんたんに忘れられるものなのだろうか。私などは、もう今の一事だけで、その少年の顔を心に刻みつけているのに。

「あしたからしばらくは、お昼休みには病院へ行くのよ。もう痛くはないから先生を困らせないのよ」

そう云い棄てて、婦人はさっさと出ていった。

「すげえなア」

婦人の姿が消えるのを待っていたように、一人の仲間が嘆声を発した。みんな一斉にげげら笑いたした。

「すげえ、ほんとにすげえな」

私はわざとバンソウコウの少年に話しかけた。相手は俯向いて、羞ずかしそうな笑いを洩らした。

その婦人は名をミサといい、下士官みたいな舎監の奥さんであることはすぐわかった。

仲間のうちには早熟な者もいて、ミサは工場の事務員だったが舎監と結婚したのでここに住み、寮母として月給を貰っているのだとか、用があつて舎監室へ行ったら差向いで酒を飲んでいたとかいうことを自慢気に云いふらし、所謂青春前期の不潔な雰囲気撒き散らしていた。そして最後は決って、すげえなアということになるのだった。

私はまだ性的にも未熟だったし、舎監の部屋などには怖ろしくて近寄ることもできなかったが、ミサのことは四六時ちゅう頭を離れなかった。ミサが洗濯をしたり、自転車に乗ったりする姿を見るたびに、ひとりで胸をときめかせ、時には頭のとっぺんから縦に貫くような戦慄さえ感じるのだが、さてそれをどう始末したらいいのかわからなかった。私は自分の体内の重苦しく沈澱していく得体の知れないカタマリのようなものをどうしようもなく、妄想に疲れ、眠れない夜が多くなっ

た。もっとも当時は毎夜警報が鳴りわたるので、グッスリ朝まで安眠できる人はいなかったのだが。

いっそ私はミサになりたいと願った。ミサになりかわらない限り、私の身内に潜むこの欲望を処理することはできないだろう。若しも私がミサであつたら、腫物を切開するためには無力の少年をベッドに抑えつけ、思うままに踏みつけることができるのだ。自分の入浴ちゅうにたまたま寮生たちがはいって来れば、その豊麗な肉体をこれ見よがしに曝け出すこともできるのだ。寮母とはいふものの、掃除は寮生たちが分担し、食事は工場で給付するので、苦しい労務にも就かず一日じゅう舎監室で寝ていることもできるのだ。

ああ、おれはミサになりたい。

次々に脳裡に明滅する雑念に悩まされ、警報の鳴らない静かな夜も、私は床のなかで転転とした。

そうしたある夜、私は便所の入口の処でミサに逢った。当時はいつ空襲があるかわからないので、着のみ着のままでゴロ寝するのが普通であつたから、そのときのミサも青い木綿の開襟シャツを着ていた。私は妙にへどもどしながら、それでもミサのうしろについて

便所にはいった。

そして驚いたことには、ミサは私がそばに  
いることなどまるで眼中にないように、扉を  
大きく開け放したまま済ませると、私には見  
向きもせず、又部屋の方へ戻って行った。

草深い田舎に育った私ではあったが、この  
ミサという女性から数々の強烈な刺激を受  
け、急速に性に向って目を覚まされたよう  
であった。小さい時から人の上に出たことな  
い私は、ミサのこうした傍若無人の態度に強  
い憧憬の念を覚え、ミサになりたい！とい  
う欲望は、日増に大きく育っていつ  
た。

そんな状態で一ヶ月程経ったある  
朝のことである。

私はめずらしく明方からぐっすり  
眠って、隣の工員の起きる気配には  
っとして目を覚ました。慌てて飛び  
起きようとした私は、自分の下着か  
ら敷團圓のまわりがぐっしり濡れ  
ているのに気がついて二度びっく  
り。ここ十年来忘れていた失策だっ  
た。明方ふと目覚めたとき確かに便  
意を催おしたのを、あまり眠かった

ので我慢したのがいけなかった。私は濡れた  
床のなかで足をちぢめた。一張羅のズボンが  
ぐしょぐしょだ。

このまま起きれば仲間には嘲られるし、私は  
穴にでもはいりたい気持ちだった。取り敢えず  
きようは頭痛がするので休むからと、隣の少  
年に言伝を頼んでじっと目をつぶっていた。

見習ちゅうなので夜勤者はなく、みんなが  
出掛けて部屋のなかで、ひっそりしてしま  
うと、私はなんとか始末しなければいけないと  
思った。そうかと云って起きるわけにはいか

ないし、蒲団も乾さないわけにはいかない。

このままずっと寝ていたら、体温で夜までに  
乾いてしまわないだろうか。それとも押入れ  
に突っ込んで何食わぬ顔して出勤しようか。

それにしてもズボンが――などと思い悩んで  
いる処へ、私としては半ば怖れ、半ばその出  
現を期待していたかも知れないミサが、

「どうしたの？あたまが痛い？」

と云いながらはいって来たのだ。ミサに、  
声を掛けられたのはこれが初めてだった。

私はむりに笑顔をつくり、こっくりと頷い

た。ミサの柔い手が額に触れた。汗  
や油や鉄粉の臭いとは違う香りが私  
の鼻孔をくすぐった。ミサはブラウ  
スのポケットから体温計のケースを  
取り出すと、さっさと二、三度振  
ってから私の夜具の襟に手を掛け  
た。私は本能的にそれを拒んだが遅  
かった。ひとつにはミサの優しげな  
素振りからして、何とか善後策を講  
じてくれるのではないかという気も  
していたのだ。しかしミサの手に半  
ばめくられた蒲団のなかからむっ  
とするような異臭が溢れると、私は真  
っ赤になりながら、夜具を奪い返し、



頭からすっぽりとかぶってしまった。

しかし、ミサのやり方は容赦がなかった。

彼女は矢庭に私の蒲団を裾のほうからぱっとばかりに捲り上げた。夜具の襟にしがみついて身をちぢめていた私は、まったく無防備だった足のほうからの強襲に、ひとたまりもなく蒲団を剥がれた。

「なによこれは？　子供じゃあるまいしだらしない。おねしょして仮病つかって、それで戦地へ飛行機が送れますか」

ミサは産業報国の大義を振りかざしながら、私の腕を掴んで手荒く引き起すなり、ひよろひよろと定まらない私の足許を狙って、いきなり強烈な足払いをかけた。不意を喰って、私はすつとその場に倒れた。角力などでもいつも負けてばかりいる私ではあったが、この時ぐらい見事に倒されたことはなかった。体が傾くという意識がぜんぜんなく、今まで確かに二本の足で立っていたのが次の瞬間には畳に匍わされているという、まったくこ



えようのない足業だった。その頃は女学校でさえ、長刀や銃剣術を教えていたのだから、ミサに武道の心得があっても決してふしぎではなかったが、それにしても鮮かにやられたものだ。

私は流石に屈辱を感じ夢中で起き上ろうと

した肩のあたりを、こんどはどん、と足蹴にされ、またまた無様にひっくり返った。

「ごめんなさい」

私は哀れな声をふりしぼって哀願したが、ミサは許してくれなかった。

「うるさいわね。そんな声出したって、誰も来てくれないわよ」

ミサは冷やかに笑いながら、私の前に立ち塞がった。それから思い出したように、ブラウスのポケットから先刻の体温計を出して、傍の棚の上に置いた。この落着きはらった態度が私を驚ろかせた。壊れ物を別に置いたところを見ると、ミサはもっと手酷く私を責めるつもりらしい。

そこで私は窮鼠の勢を駆って、滅茶苦茶にミサに打ってかかった。が、

「手向いするの、この子！」

あべこべにミサの拳で脳天を一撃され、はっと怯んだ利腕を逆に取られて、ぐるりと体が一廻転した。物凄いミサの腕力だった。

「痛う」

私は思わずうめき声を発し、渾身の力を振

るって逃れようとしたが、ミサは巧みに私の背のほうへ廻り込み、邪慳に小突きながらぎりぎり締め上げてくる。これでは、自由に動く私の右手も空しく宙を打つばかりだ。

執拗きわまるミサの攻撃に、やがて私はがつくりと前にのめって膝をついた。

もう私の負けだ。相手はたとえ女とはいえ、所謂「女ざかりの体力」を誇る一人前以上の大人であり、こちらは未だ朝飯も食っていない栄養不良の少年なのだ。私の脳裡にあの少年の姿が浮んだ。おれもあんな目に遭わされるのかも知れない。あいつだってベッドの上に押し伏せられるまでに、きっとこのミサの腕力に翻弄され、必要以上に叩きのめされたに違いない。果してミサがおれをどのような取り扱つか、したいようにさせてみよう。病院での光景をあまりにも考えつづけていた為、それがもう最近ではさして強烈な刺激でもなくなっていた私は、ここで自分が実験台になり、新しいミサの嗜虐の姿態を心に刻もうと決心した。そして必死の抵抗を開始した。

私がいくら暴れようと、すでに優位に立っているミサに叶うはずはなかった。しかし、私が暴れれば暴れるほど、ミサはその動きを封じる手を、いろいろ打って来るだろうと考

えたのだ。私は両膝と右手を畳につき、左手は背に捻じ上げられたままの不自由な姿勢だったが、それでも激しく体をねじり、ミサを寄せつけまいと身をもがいた。

「が、ミサに対しては、私は精神的にも参っている。」

「さあいくらでも暴れなさい。暴れれば暴れる程きつくなるから、さ、どう？」

「痛い！ 離して」

「そうらごらんない、きようは丁度誰もいないから、二度と仮病なんか使えないようにうんとお仕置してやるから」

ミサは私の背を跨いで、低い囁くような声でそう宣言した。私の頭の側には、ミサの逞しい足が二本の柱のように立っている。ミサがそのまま膝を折れば、私の体はなんの抵抗もなく、畳を舐めさせられてしまいうだろう。

ミサのストラックスは、私を折檻するときに折目が崩れないよう、充分にたくし上げられていたようだった。はじめに体温計を棚の上に置いたことといい、このことといい、ミサは充分な余裕を持って沈着に私を責めていることがわかった。

そしてついに私の力が尽きて、畳の上に突伏したとき、遙か工場の在る彼方から警戒警

報のサイレンが聞えて来た。しかしミサの耳にはそれがはいらないのか、くっくつと咽喉の奥で、勝ち誇ったような笑い声を立てながら、倒れた私の背の上にどつとばかりにのしかかって来た。この寮内に二人の他には誰もいないということが、ミサをすっかり大胆にしているらしく、馬乗りになった体重をじりじりと私の背骨に加えながら、

「弱虫！ 男ならぎゅうとでも云ってごらん」

背へ回された腕はもうすっかり痺れて感触がなくなり、総身の毛穴からは汗が噴き出て全身ぐしょ濡れになりながら、しかし私は初めて知った鮮烈な気持に包まれていた。私の上に君臨して、まるで夜叉のように猛り狂い、所嫌わず撲り、抓り、締め上げてくるミサの為すままに任せながら、プオー、プオーと無気味な断続音が鳴りひびくまで、その時が警報発令下であることさえも忘れていた。

「空襲だ！」

私は組み敷かれたままで大声を挙げた。しかし、襟首をきつく掴まれているので、それはただわアッと叫んだに過ぎなかった。

ミサも流石に驚いて、おもての方に気をとられた。押えつけている力がちよつと緩んだので、私は夢中で跳ね起きようとしたが、



「逃げちゃダメ!」、私の体は仰向けに反転した。下からミサの手首を掴んでわずかに息を吐くと、「防空壕へ、はいらないと、大変だ!」と、とぎれとぎれに叫んだ。

しかしミサは、空襲も爆撃も意に介しないように、薄紅く上気した頬に微笑を浮かべながら、取り締る私の手をもぎ離すとそれを一本ずつ膝の下に敷いた。私はふたたび身動きができなくなった。が、今度は本気になってミサの重圧から逃れようと足掻きつづけた。しかしその柔かい手で、じわじわと私の咽喉を締めながらしきりに戸外の様子を気にしているミサ。私はこのときほど、自分の非力を情なく思ったことはなかった。ミサは私を殺して、自分だけ助かるのではないかなどと、理屈にも合わないことが頭に浮ぶ。このままミサに締め殺されて、そのあと爆弾で吹っ飛んでしまったら、二人はやはり爆死ということになるのだろうか。どうしても逃げなければ、ミサも――。

やがてグォングォンという爆音が、空を圧して響いて来た。

「うわッ」

私は両足で畳を蹴って、力いっぱい反り返

った。途端にミサの体がずるずると前へすべったが、またぐいと乗り直した。グォン、グォンという爆音も、「待避! 待避!」を連呼する戸外の騒ぎも、総べて私の耳には遠く聞えた。

「きょうの目標はN工場よ」

悶絶したようにぐったりとなった私を見てミサはやっと腰を上げて、

「どう? すこしは懲りたでしょう。もう許したげるから、明日からまじめに働くのよ」

そう云ったときのミサの美しさを、私はあとなつてからもよく想い出した。そして、ミサのような嗜虐性向の女性が、世のなかには案外多くいるのだという事実も、やはりずっとあとになってから知ることができた。

そのときのミサの言葉どおり、敵機は私たちの小さな工場など見向きもせず、続続と北上してN飛行機工場を叩いた。その補充要員として転属を命じられた私は、萬感を胸に秘めてミサのいる寄宿舎を去ったのである。

### 三、ある娼婦

あなたは私を覚えていたようね。私も忘れてはいませんでした。部屋で名前を聞かれたとき、はっと思い出したんです。それでも私にさんざん悪戯されたあの瘦せっぽちの弱虫

さんが、もう立派な青年になっている。あの時のあなたの秘密、私は何もかも知っています。入所するときから私のほうでは目をつけてチャンスを狙っていたのですから。そう云われれば思いあたる事が沢山あるでしょう。しかし、それは相手が子供なればこそ、できたことで、その子が成人して突然目の前に現れたのでは、こちらが面喰ってしまいます。

でも――あんな形で仕返しをされようとは夢にも思いませんでした。こまってしまうです。が、お互に前のことには一言も触れないで、しかもそれを確認し合うためには止むを得ない方法かも知れません。あなたを苛めた罰として甘受します。

私は終戦後、良人が事故に遇って右腕を失ったので、こんな商売にはいつてしまいました。年じゅう喧嘩が絶えませんが、しかし片輪の良人を棄てるわけにもいかず、ときどきカンシヤク玉を破裂させるにはちょうどいい相手なので、面倒を見てやっています。こういう私の悪癖が、泥沼から這いあがれない原因だとはよく承知しているのですが――。

また御縁があつたらお目にかかりましょう。私はもうあのお店にはおりません。あなたの名刺入から一枚無断で拝借し、この手紙を書きました。ミサ。この手紙は、今も私の抽出しの奥深く蔵ってある。

## マニヤの手帖

## ビニール雑考

## 阿留品又怒

作中の失敗、破棄を一応計算したわけである。

しさいに検討した結果、花模様のフィルムは強靱なものであり、少々の引伸しぐらいでは決してさけないことを発見した。たゞこの場合、鋏による切り口をなめらかにしておく必要があることをも知った。ちよつとした鋏の行き違いによる切小目でも、それがもとで、折角の強いフィルムも簡単にさけてしまうからである。

一方真紅の方は、多少の力には耐えるが、花模様ほどには強くなく、約半分の力で使用にたえない状態になることが分った。

そこで花模様の方は強度の力を必要とする水着に、真紅の方はシャツ、ブラウス等、上からはおるものに使用することにした。

採寸の上計算すると、水着の制作には巾一メートル、長さ一メートル半のフィルムを必要とする。第一図のようにその拡げたフィルムに歪んだ扇形のかたちで鋏を

現在、ビニール生地が極めて豊富な色彩と共に、大量に売りだされているのは周知のことである。

着色の容易さによるさまざまな鮮やかな色彩の光艶は僕を眩惑する。しかも温度の上昇と共に、それが最初のごわ／＼した生硬さをうしない。ぐんにやりして、ゴムよりもやわらかく、なめらかな感触を与えてくれる便利さに、僕はあらためて感嘆する。

ゴム・フェチであった僕が、ビニールの出現と共にすっかりその方に切りかえてしまったのは、前記の理由と共に、ゴムの持つ硫黄

の鼻をつくような臭気がないことであつた。ビニールにも、化学的な刺戟臭はある。しかしそれはゴムほどひどいものではないし、長時間使用している中に次第に薄らいでくる。

僕が二十世紀に生れたことに大きなよろこびと感ずるものの一つに、ビニールの発明があることは断わるまでもない。

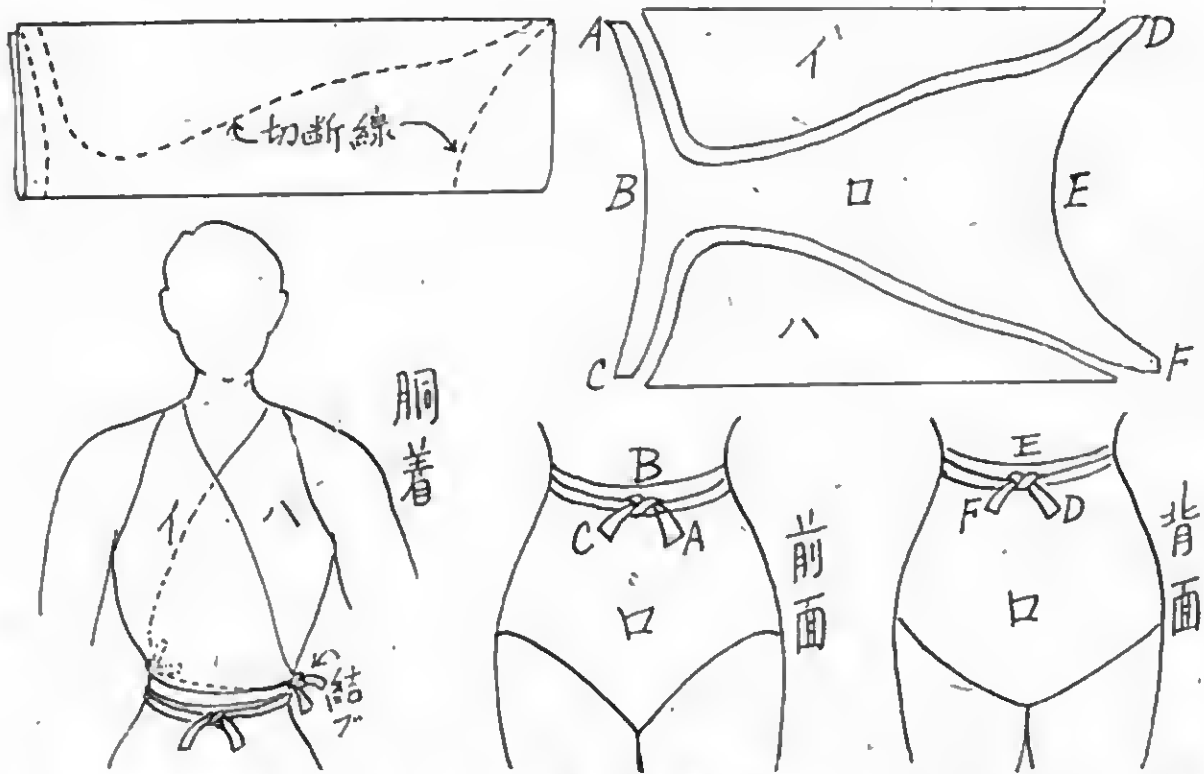
もちろんビニールにも欠点はある。取り扱いの度毎にザワ／＼と高音を発し、密室でもないと気を配らねばならないこと。実に非常にさけ易く、わずかな穴、あるい

は傷がもとで、切角の生地を台なしにする危険のあること。そしてそれと関連して、縫製には余程の注意が必要なことなどである。

これから述べることは、数多いビニール・フィルムを使って、僕自身が工作してみた利用法のほんの一端にすぎないが、同好の方の参考にもなれば幸いである。

僕はビニール問屋で花模様と、真紅のビニール・フィルム各々五メートルを購入した。

目的は水着なので、実際にはそれほど必要ないのであるが、工



第一図

入れたのだが、注意を要したこと  
は、前にも述べたように鉄の行き  
違いによる傷をつくらぬため一気  
に切り口から鉄をすべらせ、最後  
までその形を動かさずに切りすゝ  
めることであつた。

着方はまず尻に当る

広い部分を背後に回し  
更にもう一度胸を回し

て背後で結びつける。

そして背後にたれてい

る他の部分は、前にま

わし、しっかり緊め上

げてから胸をもう一度

回して前部で結ぶ。

残った切小端は、一

番細長い端を首の後ろ

で結び、胸部をおおう

ようにして他の二端を

前にたれさせる。そし

て短い方を前、長い方

を後ろにし、脇で結び

つける。反対の側も同

様である。

これで上半身をすっ

ぱりつゝ、ビニールの

水着ができたわけ

である。

結び目を強くして緊めつけるか

あるいはゆるくして、たゞビニ

ールの感触のみを楽しむようにする

かは、その時々気分によって違ふ。

が、鏡に映した場合、強く緊めつ

けて着たほうが遙かに美しい。

尚、胸部の部分は、着付に変化

を求めて別の生地を巾三十センチ

長さ一メートル半くらいに切りと

ったもので、そのまゝ前で胸部を

おゝって結ぶか、反対に、真中に

結び目をつくり、背後で結ぶとき

もある。

また残り生地で別の胸おおいを

作ろうとして、ビニール紐によつ

て長さを補う必要にぶつかったが

この場合の困難は縫製のきかない

点にある。ビニール・テープで補

強し、高周波ミシンか熱による簡

易接着器でそれを更にしっかりと

つゝけるか、あるいはビニール用

セメダインを使用しなければなら

ないわけだ。

その他、水着は前記の方法によ

って、いろいろな形のものを作っ

た。両腰で結ぶビキニ・スタイル

などは至極簡単に出来て物足らな

かったぐらいだし、ブラジャーも

いろんな形のをいくつも切抜いた

りした。たゞし、簡単に出来るも

のほど、ビニールの感触を楽しむ

部分が小さくなったのは当然であ

りはがゆかった。

こうして出来上った水着をつけ

れば、コルセットなどは不要であ

らうと思える。緊め方さえ強くす

ればいわゆる柳腰に近づくことは

うけあいである。

たゞ、強く緊めて着た時には汗

が蒸発しないことゝ、相当な圧迫

を身体に強いるので、内臓をいた

める危険があり、僕自身、長時間

の使用ができないことが残念であ

る。

もっとも緊め方さえゆるくして

おれば、多少時間が長びいても左

程の苦痛はない。

女装する場合、色もののフル・

ファッションとフラワー・ホール

ターで脚部をつゝみ、顔容さえ変

えれば、あとは胸のふくらみにさえ工夫をこらせば良いのであるから好都合だ。

一瞬にして男が、花模様のビニールの水着をつけた女性に変貌するたのしみはまた格別であるし、鏡はそれらの現実の動きを忠実に映しだしてくれる。

さてその上からはおるものであるが、僕はこれの一番簡単な方法として、市販されているビニールのレインコートを利用している。

しかし市販されているものは、色彩も乏しく、形も同一で物足りない。

僕はそれを真紅のフィルムで第二図のようにつくることにした。この場合でもいろんな方法が考えられた。単なる腰布のように四角にフィルムを切断し、腰部の前、または横で結びとめる方法、または、フィルムの中央を丸くくり抜き、花卉のように、わずかな運動によって、それを花開かせるようにする形など、既製の女性スカー

トが充分に参考になったし、腰にあたる部分さえ、ビニールテープで補強しておけば、引っぱられる部分が少ないだけに、少々長時間使用してもいたむようなことはなかった。

むつかしかったのはブラウスだった。市販のビニール・レインコートの丈を切って利用すれば確実なのだが、僕の場合は接着に失敗して上手くゆかなかった。

いろいろ試みたのであるが、まず／＼の出来と思われたものを紹介しておく。

胸囲を計り、それに見あわせてフィルムを切断し、そしてその中央部に向かってフィルムを両端から折り、上部のところに腕をいれる穴をつくった。この穴は単に切っただけでは、着た時にそこから破ける危険を感じたので、できる限り丸く、なめらかに切りとり、補強と装飾をかねて、色の違ったビニール・テープをはったものであ

る。

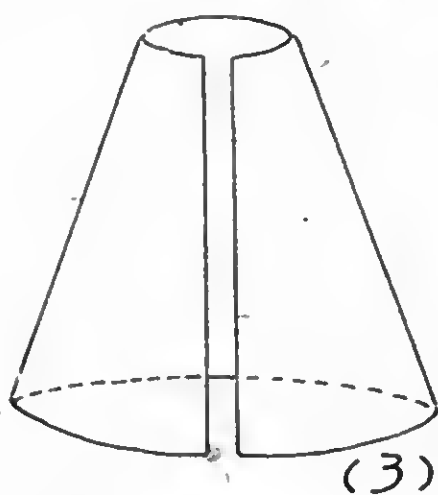
そのまゝ肩口をはりあわしても悪くはなかっただろうが、肩の線を出すため、腕を入れる穴の上部から、適当な角度で中央部に向けて切っておいた。

僕の失敗の原因は、高周波ミシンがないので接着が完全でなく、

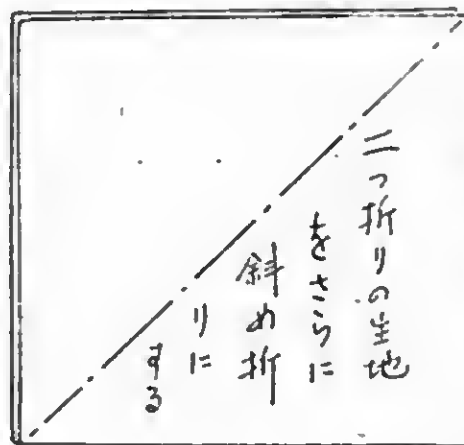
都度の使用の後、肩口の接着部が外れたことにあった。

いずれにしろ、こうして出来上がったビニールの花模様の水着の華かさ、更にそれを透かしてかすかに模様を浮き上らせている。半透明ビニールの真紅のブラウスとスカートをつけた姿には異様な美し

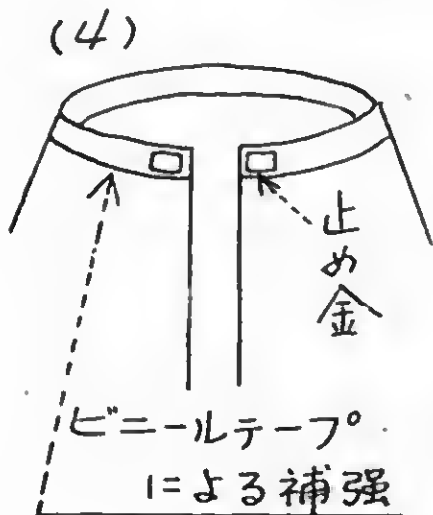
四二



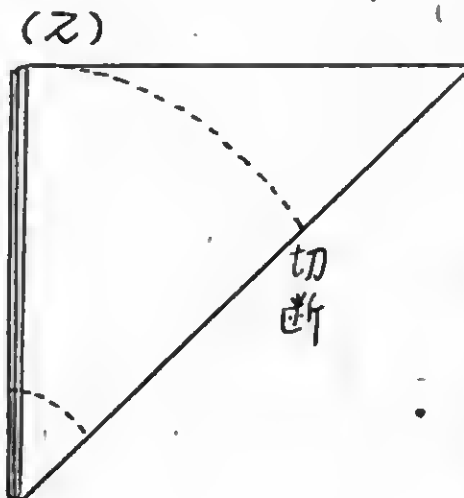
(3)



(1)



(4)



(2)

さがある。

僕にとっては、世上騒がれてい  
る七色の下着などより遙かに魅惑  
的なものである。

似たような方法で腕カバー、あ  
るいは袖なども作ったが、重複を  
避けるため省略しておく。

工夫次第では、ビニール・フィ  
ルムというのは裁縫の経験のない  
人にも容易に工作ができ、便利  
この上もないものであると思う。

僕はその他に、サロン・エプロ  
ン、胸当てをつけた前掛け、スカ  
ーフ、ガーター、ぴったりのズ  
ボン等を、好みの色彩でつくりあ  
げた。作るあいだの楽しみにそれ  
を着る楽しみが加わるのだから、  
あらゆる余暇と情熱をすっかりそ  
れに費してしまったのも無理はな  
いとわれないが思う。

現在計画中のものに、ビニール  
の着物と羽織りと帯がある。水着  
ほどには簡単でないので、仕事  
がなか／＼はかどらないが、出来上  
った時の楽しみを思うと、いかに

難かしくても放棄するのがどうし  
ても惜しいのである。

工作に熱中したが完全な失敗に  
終り、再びそれを試みようとしな  
いものに手袋がある。指のところ  
の接着が上手くゆかず、やむなく  
市販されている手術用のビニール  
手袋を、着色して使用するよりな  
かった。洗濯用に売られているゴ  
ム手袋は、指のところにすべり止  
めのギザ／＼があるので使用感  
あまりよくない。時に、薄手のす  
べりどめのないゴム手袋を見かけ  
ることもあったが、これとて使用  
感という点で、手術用のビニール  
手袋にはるかに劣っている。だが  
残念なことに、手術用の手袋は極  
めて短かく、わずかに手首をつ  
む程度しかない。

僕は現在その欠陥を、ビニール  
でつくった腕カバーでおぎなっ  
ているが、色彩の相違があり、完全  
な理想形というところまでゆかぬ  
のは残念である。

おむつカバーとしてビニールを

利用する方法は、いろ／＼文章に  
もされているが、感触を楽しむ必  
要からそれを布でお／＼のは理想  
的でない。

しかしゴム紐を通す必要がある  
ので、僕は足を通すためくり抜い  
た丸い穴の両端を引っ張り、直線  
にしてから細く切ったビニール布  
を、接着器とビニール・テープで  
くっつけ、更にそれを折り返して  
裏側にくっつけた。あとはその間  
にゴム紐を通せば良いのである。  
方法は既に紹介されているのと大  
同小異である。

この場合の難点は、ゴム製のお  
むつカバーに比して強度の点で問  
題があり、頻ばんな使用、あるいは  
荒々しい取り扱いによって、折  
角苦労した接着部分がはずれてゆ  
く点にある。

そこで考えたのは、前に述べた  
ビニールの水着の、おむつカバー  
としての利用である。

裾口を締めつける強ささえ充分  
であれば、ゴム紐が通っていない

てもビニールの水着だけで完全だ  
と云って良い。万全を期するため  
には、水着を同一のサイズでつく  
り、尻当の部分だけ少し広く、大  
きくして二重に使用すれば良いの  
ではないかと思う。

更にその上からビニールのズボ  
ンを着用すれば、ズボンのすそを  
しっかりとめておきさえするなら  
防水は完全となる筈である。

併し二枚使用の実験結果から、  
圧迫感が相当強度のものとなり、  
せいぜい一、二時間とぐめておか  
ないと、内臓に支障をきたす恐れ  
を感じてしまった。

以上の点を勘考した結果、おむ  
つカバーとしてのみの利用法を考  
えた場合、一長一短はあるうがゴ  
ムの方が優れているようである。

着るものに限らずカーテン、敷  
布、蒲団カバー、椅子カバー、テ  
ーブル掛け等々にビニールを使用  
し、その感触を充分楽しめば良い  
のであるが、それらは世上周知の  
ことであり、詳しい説明は省くこ  
ととする。



## 創作

## 暮夜の戯れ

井田南枝

## (一)

駅に降り立った時には、ひどい雨になっていた。会社が退けた頃は曇天だったので、母から頼まれた買物に立寄ったりして夕暮れになり、ポツリポツリ降り出した雨にあわてて電車で帰途についた雅江は、雨が止んでくれればよいがと、心の中に祈った甲斐もないのに、がっかりした。

駅まで二キロばかりある自宅から毎日通勤している雅江にとって、風や雨の日は、いやでいやでたまらなかった。迎えに来てくれるあてもない彼女は、雨の小止みになるまで待つか、タクシーに乗るかしなければならなかった。就職早々の薄給のビジネスガールの財

布からタクシー代を払う余裕はなかった。高校を卒えて現在の会社に就職して、此頃はすっかり仕事にも慣れ、親しい同輩の女友達も出来、男子社員も美しい彼女には格別やさしくしてくれるので毎日が楽しく、朝夕の通勤も、天気さえよければ苦にならなかった。雅江は均整のとれた近代的な体格をした女性だったので、彼女の通勤姿は、目立って美しかった。

ますますひどくなって行く雨脚を見つめながら、泣き出しそうな顔をしていた彼女の前に、サッとすべり込んだ一台の車があった。「もしもし、お嬢さん、お乗りになりませんか？ 女のお客さんを乗せて〇町まで行く所なんです。御一緒に、途中まで如何です」

ハツとして見上げる雅江に物馴れた男の声が車の運転台から誘いかけた。咄嗟のことに返事も出来ずに突立っていると、

「ねえ、御遠慮はいりませんわ。あたし達、この人に〇町まで送らせていますのよ。突然の雨でお困りの御様子だから、お宅近くまで御送りしますわ。さあ、お乗りになって——」  
かん高い女の声がひびいた。女は二人連れらしく、派手な和服の色が、ガラスを透かして見えた。〇町と云えば雅江の住んでいる町より少し先の町だ。途中まで乗せてもらえば大助かりだ。女の連れではあるし、何のためらいもなくのせて貰うことに決めた。  
「さあ、どうぞ、どうぞ」  
車のドアを開いて促されるまゝに、

「それでは、お言葉に甘えて、途中までのせて頂きます」

と言つてのり込んだ。先客の女たちは、どちらとも三十前後で、爛熟した豊満な肉体を派手な和服で包んでいるといった感じだった。男は黒シャツに色眼鏡をかけてハンドルを握っていた。車は駅前を抜けて雨の道を走り出した。雨に濡れた舗道が、街灯に輝いて流れた。

「あっ、しまった。大変、指輪を——ダイヤの指輪を、忘れて来たのよ。連ちゃん停めてえ」

女が大げさに頓狂な声をあげた。車はゆっくり停車した。

「何だい。今更、連ちゃんとは、ひどいね」

「ダイヤの指輪を、さっきの家に忘れて来たのよ。引き返して頂戴、お願い」

「困ったお客さまだ。大事なダイヤの指輪なら、明日というわけにも行くまい。——お嬢さん、済みません。手間はかかりません。なに車で走らせたら、すぐですから——」

車はバックして、今来た道を引き返して駅前を通りすぎると大通りに出た。道巾が広いので車は、ビュンビュン速度を出した。やがて街灯も、まばらな暗い道路に入っていた。

スピードを落した車が、ザザッと砂利を噛んで門内に入った。

## (二)

玄関には電灯がなく暗かった。車を降りて男が玄関に行った。玄関の内側がポウッと明るくなって扉が開かれた。女の一人も下りた。女が呼んだ。

「あんた——出ていらっしやい。ちよっと上って行こうよ。そのお嬢さん連れて来てよ」  
「ええ、そうしようか。こんな暗い所で待っていても仕方ないわね。さあ、お嬢さん降りましょうよ」

「でも、あたし、ここでお待ちしますわ。おそくなりますと——」

「いいじゃないの。ちよっとだから——。それともあなた、一人でここから歩いて帰るつもり？ 私たち、すぐこの車で送ってあげるって云ってるでしょう。ああ、あたし寒くなっちゃった。あなたが降りないと、あたし、出られないのよ。さあ通してよ」

強引に押して来るので雅江は車から出ないわけには行かなかった。バラつく雨の中を、女に手をとられて玄関に駆け込むのに何を考えるひまもなかった。がんじょうな玄関の扉

がパタンと閉った。淡い電灯に照らされた屋内は、かなり古びて陰気な空気を漂わしていたが、がっちりした本建築で、相当な広さを思わせた。

「足元があぶないから、手を引いて案内しますわ。お嬢さん」

二人の女が両側から雅江の腕を痛いと言う程つかんだ。

「電灯が暗いので階段などで、はじめての方はよくころぶのですよ。こんな所で、おけがをされたら大変ですからね」

云い訳のように云う女たちに抱えられるようにして進んだ。背後には運転手の男が、びたりとくっついて押して来た。廊下は下り階段に続いていった。足裏の堅い感触から、階段はコンクリーであることがわかった。地下室へ下りているのだった。雅江が本能的に不安と危険を感じた時には、身動きも出来ぬ程両腕をガッチリと締めつけられたまま階段を下り切っていた。助けを求めて絶叫しようとした咽喉は、恐怖に引きつって声にならなかった。男がすばやく頑丈な扉を開いて雅江の背を乱暴に突いた。雅江はよろよろと室内に転げるようによろめいた。室内は明るい電灯に照らされ、調度類も一通り整った洋間だっ



た。

「陳さん、約束の品、持って来たぜ」

「おお、鬼田さん成功ね。うまくいったね」

陳はウイスキーの角瓶の載った卓に、うすぐまるように両肘をついて坐っていた。

「細工はりゆうりゆうさ。しかし皿を二匹も使って演出効果満点、この通り、わなにひっかつたぜ。お礼はずんで貰いてえなあ」

「わかってるよ。あんたには、何時でも損はさせていないよ。——ほれ、これ」

陳がさし出す札束を、鬼田はポケットに押しこんだ。

「陳さん、今晚は又お楽しみだね。しっぽりと濡れて下さいよ。おれには目の毒、長居は無用と——アバヨ」

「鬼田さん、大丈夫かね、あの方は？」

「心配しなさんな。誰にも気付かれとらん。親が騒ぎ出さん中に、そっと帰すことだな」

「映画がはねる時刻までに帰すと親も気付かないよ。本人さえ云わない限りはね——」

「陳さんの仕込はすごいからねえ。どんなに責められても、縛られてもどいつも此奴も喜びこそすれ、絶対に怒らないし、警察に訴えたりしないからね——おかしなものだ」

「あたりまえじゃないかね。わたしも楽しむ、女も楽しむ、どちらも幸福、これ相互扶助の精神、ハッハハハハ」

鬼田たちが引き揚げると、陳はすばやく扉に鍵をかけた。雅江は不安と恐怖にブルブルと震えつつ立っていた。

「これ、お嬢さん、こわがらなくてもよいよ。わたしの云うこと、聞くと、すぐ家に帰してあげる。心配いらぬ。まあ、ここに掛けなさい」

陳はソファに雅江を坐らせようとして、雅江の手を引いた。雅江はギクッとして身を引いて扉の方に退りつつ叫んだ。

「あたし、帰して下さい。母が心配して、待っています」

「すぐ帰してあげます。——わたしの云う通りにしたら——。わたし、悪い事しません。

ちかいます。あなた、お嫁さんに行くからだ、決して悪い事しない」

陳は背が低く足が短かく、胴ばかりのようにな不恰好な身体をしていた。頭がはげ上ってテカテカ光り、皮膚は脂ぎってギラギラ脂肪を浮かべていた。

雅江は陳の言葉など耳に入る筈もなく、怖ろしさに歯の根も合わないのだった。

「帰して下さい。私、帰ります。大きな声を出してお巡りさん呼びます」

「ハハハ、大きな声、出して下さい。お巡りさんに聞えるように——。結構です。ここ、地下室。壁に防音装置してあります。外に聞えない」

コンクリートの厚い壁、重い木の扉、深々と垂れた厚地カーテン——、陳の云う通り如何に叫ぼうと泣こうと、外部に洩れる心配はなかった。

「わたし、お嬢さんをよく知っています。毎日、あなたを見えています。きれいなあなたのからだを見たいと思って、今日は、ここに来

て貰いました。わたし、痴漢ではありません。ただ見るだけで、わたしは満足します。

画を見るのと同じに、女のからだを見るのです。わたし、絵をかかない画家です。芸術家

です。わたくしヌードモデルを見るのに飽きました。あなたのような、きれいなむすめさ

んのヌードが見たいのです。——わたし、長い間、あなたに目をつけていました。悪いと

思いましたが、鬼田に頼んで、あなたをだまして連れて来ました。悪かったのです。御免なさい」

陳は一人でしゃべりまくった。ペラペラ流れ出る言葉が言葉を生んで、熱を帯びて来ると共に、目が生々と輝き出し、身体全体が炎

々と燃え始めた。雅江は陳の興奮した言葉に居たたまれなくなった。

「嫌です。ヌードなんて絶対、嫌です。死んでも——」

「そう云わないで——お嬢さん。わたしが、こう頼んでも、どうしても、いやと云うのかね」

陳の表情が固くひきつった。手がワナワナと震えた。陳は椅子から腰を浮かして雅江の方に歩み寄った。雅江は恐怖に顔面を引きつらせながら一步一步退った。

「やさしくすると、この調子だ。痛い目にあわぬと、わからぬと見えるね。どの娘も、一度はこうするものだが——。後では自分の方から押しかけるくせに——」

陳の手が猛然と伸びたと思うと、雅江の頬が音立てて鳴った。異常な空気の振動が渦まいて雅江の身体を包んだ。雅江は両手で頬を抱えるようにして、右に左にゆれながら、陳の手のなすままに委ねた。陳の手に弄弄されながら雅江の頬は感覚を失って行ったが、同時に雅江の頭脳から人間の意志が、そして理性が抜け出て行くように感じられた。

雅江は泣かなかった。悲鳴もあげなかった。じっと立ちつくしていた。陳のこの野蛮な殴打は、陳の心の片隅にひそんでいた野獣性を呼びさました。陳はつかれたように雅江に飛びかかり、ひき倒した。床の絨緞の上に倒れて起き上ろうとする雅江を、陳は上から押えつけた。雅江は必死になって足をばたばたさせ、跳ね返そうともがいたが、陳の力は磐石の如く雅江を押しつけてしまった。

### 三

「お嬢さん、すまなかつたね。殴ったりなんかして——。だけど、ただそれだけだよ。外

には、あんたを、どうもしなかったよ。——  
これから、わたしの云うことを聞いてくれる  
ね」

雅江は黙ってうなずいた。陳は雅江の手を  
取ってソファアの上に掛けさせた。陳はウイ  
スキーの瓶を取りあげ一気に飲んだ。

「お嬢さん、飲みなさい。元気がつくよ。ほ  
れ、少しだから——」

陳は、ウイスキーのグラスを雅江の口元に  
押しつけて口を開かせた。雅江は思わず口を  
開いて水でも飲むつもりでグツと飲み込ん  
だ。咽喉を焼くような激痛が通り過ぎると、  
胃壁に熱湯を注いだような熱さが拡がり、や  
がて全身の血管が熱い血潮に満たされ脈動を  
開始した。心臓から押し出される血液が逆上  
して、脳の組織を破裂させんばかりに圧迫し  
た。雅江の腕や脚の関節が、しびれてきかな  
くなり、膝や腰から力が抜けて行った。

「さあ、服を脱ぐんだ」

雅江の肩を抑えつつ、陳はワンピースの背  
のファスナーをサッと下して肩から脱がしか  
けた。脱ぎ取ったワンピースをパッと投げ棄  
て、グラリと倒れそうになるのを背後から抱  
きかかえて、床の絨緞の上に下した。純白の  
シュミーズの下から蠟のように透けた双の肩

が、まぶしく陳の目を射た。

陳は再びウイスキーをあおった。

立ったまま、じっと雅江を見下していた陳  
の目が妖しい光を帯び、咽喉がゴクリと鳴っ  
た。陳の手が、シュミーズにかかる。雅江は  
酔が廻って身体が自由がきかないらしく、僅  
かに身体をくねらせるだけだった。雅江の胸  
の隆起が、シュミーズの下で独自の生きもの  
のように波打っていた。

「ウフフフ。これは、たまらないね。」

陳が立上って、壁際でガチャガチャ言わせ  
ると、壁が両方に開いて一室が現われた。ま  
ことに殺風景な部屋だった。床には真黒い絨  
緞、壁には黒いカーテンが垂れ下り、奇妙な  
道具が四隅に置かれている。

陳は、雅江を軽々と抱きあげた。電気に打  
たれたような感覚が、陳の全身を包んだ。雅  
江を運び入れると扉を閉ざして錠をかけた。

雅江は両手を頭の上に、だらりと突き出  
して、背を丸くして床にうずくまり、両足を  
斜めに投げ出していた。くびれた腰が大きな  
曲線を描いて、すんなりと細い両足に続いて  
いる。

陳の目が爛々と燃えて、雅江の全身を舐め  
廻した。はじめは、こわれやすい塑像を取扱

うように、静かに取扱っていた陳は、やが  
て、荒々しく雅江を仰向けにした。胸の盛り  
上った白い二つの隆起につづく白い腹、細く  
くびれた腰、豊満な臀部——まぶしい程の女  
体の美しさだった。

#### 四

雅江は、閉じた両眼のまぶたに、まぶしい  
強い光を感じた。

「あら、もう朝なんだわ。お母さんが雨戸を  
繰ったのか知ら？ ああ、まぶしい。」

写真撮影用のライトが煌々と、光の輪を画  
いて雅江を照らしていたのだ。大理石の彫像  
の如くつやつやとしたうるおいを持った白い  
裸像が、妖しく浮かび出た。パチリと微かな  
音がしたが、雅江は気付かなかった。あられ  
もない姿がフィルムに写し撮られた瞬間だっ  
た。

「ウフフフ、すばらしいぞ。さて次は——」

陳はいそいそと、次の仕事の準備を始め  
た。一束の縄をとり出した。麻縄の上にビニ  
ール被覆を施したもので、桃、青、緑などの  
色がついている。くるくると縄の束を解いの  
を床の上に長々と並べる。陳はその中の一本  
をとりあげた。





雅江は床の上に横わって、眼を閉じてじっとしている。烈しい酒の酔が一時に全身の自由を奪い、意識を朦朧とさせたけれども、漸

く酔はさめつつあった。

陳は雅江の両手を背中に廻して両手首を重ね、キリキリと縄を巻きつけ、縛った縄の先

を両腕から胸に廻し、二巻き、三巻き、乳房の上下に締めつけた。柔軟性を持ったビニール・ロープは肌あたりは軟いが弾力性があるので、肌にしっかり食い込み、豊かにふくらんだ二つの乳房が、上下にかけられた縄にくびられて一層高く盛り上り、締めつけられた両腕が食い入ったようにいたいたしい。

「あっ、痛いッ」

雅江は無意識に悲鳴をあげた。顔を持ち上げ、身体をくねらせた。

「何をするのよ。痛いッ、はなしてえ——」

雅江は、自分のあさましい姿に初めて気付いて愕然とした。

「お嬢さん、気が付いたかね。痛がることないね。すぐ慣れるよ。どんな気持ち？いい気持ちだろ」

「どうして、こんな事するの。失礼じゃないの、解いて頂戴」

「失礼かね。ウフフフ、なるほど失礼だろ。だけど、もうすぐわたしに縛ってくれとたのむ時が来るよ——どうだ、いい気持ちじゃないか」

「ああ、苦しい、解いて、解いて頂戴」

「まあまあ、そのうち、気持よくなるよ。」

「ああ、いやらしい。早く解いて——大きい声、出すわよ」

「ウフフ『大きい声出す』あんたのおはこ。

ここは地獄の地下室。泣こうがわめこうが、誰一人助けに來ないよ。わかったね。——さて、このポーズ、いいね」

ライトが輝きシャッターが切られる。雅江は「あっ」と声をあげ、思わず身体をすくめた。

「こんな恥かしい恰好を写真に撮られて」と羞恥で耳元まで赤くなったが、身の自由を奪われては、如何ともすることが出来ない。この男は写真に撮ってどうするつもりだろう。この写真が他人の手に渡ったら、私はどうなることだろう。私はもう生きては行けない。恥しい。どうしよう、と雅江は氣も狂いそうになった。

「やめてえ、お願い、写真を撮らないで」

雅江は泣き声で哀願した。

「へへへ、写真に撮るのが私の趣味、これ今日の記念に保存します」

「困るわ困るわ。こんな恰好、撮られては——」

「あんた困ることない。外の人には見せない。」

い。わたし一人だけ見て楽しむ」

こんな、みじめな恥かしい姿にされた上、この男の手に永遠に自分の姿が残されと思うと、雅江は羞恥と屈辱に身も心も細る絶望感に襲われるのであった。

「ああ——あたし」

と絶望のうめきをあげた。

「それ、それ、その表情——とてもすばらしい」

アップでパチリとシャッターが切られる。

「ああ——もう駄目、ああ——」

雅江の両眼から涙が溢れるように流れ、肩が大きく波打って齒の間から、しのび泣きが洩れる。

「ウフ、それぞれ。その表情たまらないね」

うわごとのように、うわずったひとりごとを云って陳はカメラを操作する。

陳の作業は、次から次へとよどみなく続けられた。雅江の肉体は陳の意志のまま縛られ、押し曲げられ、あらゆるポーズをつけられた。ライトが集中し、カメラがあます所なく雅江の肉体を写し取った。

両足首を縛り、その縄を背中に廻した手首の縛り目に通し、グイグイと締めつけると雅江の身体は、弓のようにそりかえる。苦痛に

目がつり上り、咽喉がびくびくとけいれんする。苦しい吐息が雅江の口から洩れ、顔が苦痛にゆがむ。苦悶、恐怖、羞恥の表情は陳をいよいよ喜ばせずにはおかなかった。

首に縄を巻きつけ背に廻し胸にかけ、キュウと締める。頭の蕊がジーンとしびれる。

「ああ苦しい、あっ、あたしは、しめ殺される」

飛び出る程、見開いた恐怖の瞳、大きく開いたままガクガク震えあえぐ口元を、レンズは非情に捉える。

天井にとりつけられた滑車からロープが下って来る。ロープの先の鉤が雅江を縛った縄をひっかける。ガラガラ滑車が鳴って、ロープがピーンと張ると雅江は宙吊りになる。ユラユラゆれながら雅江の足が床を離れる。

両手首がきゅっとしまり、二の腕がしびれ、胸に廻された縄がメリメリと肌に食い込み、骨を砕くような激痛が全身を襲う。

「あっ痛いッ、苦しい、助けて——」

「ウフッ……苦しいかね。お嬢さん、もうしばらく辛抱しなさい。そのうち楽になる。いい氣持になるよ」

天井に吊られた雅江の身体が空間でゆれ、ダラリと下った二本の足が力なくあがく。

凝然と見つめる血走った陳、——やがて狂おしくライトを集中させシャッターを切る。身を焼くような激痛も、やがて麻痺して鈍痛となり、電流にうたれたような感覚のしびれが雅江の全身を包んだ。胸をしめつける縄の圧迫が呼吸を困難にさせ、手首、腕は血管をしめつけられ指さきは冷たくなって来た。

「この位にしておくか、今日は」

半ば意識を失ったまま雅江は縄を解かれ、床に横たわった。焦点の合わないうつろな目を開いた雅江の表情には何か陶酔に似た影があった。苦しめられ、さいなまれ、痛めつけられた肉体が、グツタリと力を抜いていた。「ねえ、お嬢さん、わかったかね。この喜びが——」

陳は雅江の耳元に口をよせて囁くと、小さく畳んだ一万円札をそっと握らせた。

## 五

雅江は今日も何時もと同じように会社から帰途についた。あの夜から数日経っていた。雅江は既に秘密を抱く女になっていた。何故だか、気分がわくわくする。胸の奥にうずくような妖しいときめきを覚えるのだった。

「あたし、どうかしているわ」

否定しようとしても、否定しきれない奇妙なうずきであった。

あの時以来、毎日駅を降りると、そっと周

囲を見廻す雅江だった。恐ろしいものを見るように、おずおずと見廻すのだったが、あの男がいよいよいないと分ると、

「ああ、今日も来ていないわ」と物足りない寂しさに、ガッカリするのだった。

あの夜、雅江が自宅に帰ったのは十時半を過ぎていたが、母には何にも疑われずに済んだ。

「お買物に廻ったついでに、お友達と映画を見てたの」

予定の嘘が、すらすらとうまく出たのでホッとした。寢床に入ってからもう眠れなかった。陳の休みない責めに神経も身体もクタクタに疲れ果てていながら、肉体の奥にひそむ悪魔が彼女を刺激した。ギュッとしまってくる縄に手首、腕がしびれ、呼吸がとまりそうになる。ジーンと背筋を伝い、頭の芯にひびく麻痺感が蘇って来て、全身が火のように熱くなる。ゾクゾクする陶酔感に、我と我が胸を抱きしめ、狂おしく床の中を転げ廻るのだった。

こうして雅江はあの夜以来、悪魔のとりこになった。女体の持つ妖しい悶えを雅江は、どうすることも出来なかった。

夕暮れの舗道を雅江は家路に向っていた。

「お嬢さん、また会いましたね」

しわがれた陳の声が聞えた。ハッと思って振向くと、それは空しい錯覚であった。

「ああ、よかった」

と、ほっとする。その一方から、雅江ははりつめた力が抜けて行くのを覚えた。

「お嬢さん、あんたは、今夜の喜びが忘れられないよ。わたしとあんたと、二人だけの秘密、誰にもしやべってはいけない。いいね」

陳の妖しい囁きが耳元に残っている。

「わたしは、あんたの身体のすみずみまで知ってるよ。足の裏も、足の指にある生毛の本数も、お尻のほくろだって——。白いすべすべした肌、ふつくらとした胸、すんなりした脚——わたしは、あんたの美しい身体が忘れられない。逃げようとしたって、逃がすものか。あんなの身体はみんなどこもかしこも写真にとってある」

地獄の底から聞えてくる悪魔の声だ。雅江の靴がコツコツひびく。

「ああ、どうしたと云うんだろう。あんなことが忘れられないなんて——」

今日も亦、苦しい一夜が来るわ。身の悶え、心のうずき、やるせないこの思い、ああ、どうしよう。

この辺まで来ると、家並みもパラパラと途絶えがちで、寂しい通りとなる。夕暮れ、人通りは全くなかった。雅江の靴音だけがコツコツと聞える。

雅江の期待をよそに、もう二度と、あの黒塗の車は彼女の前に現れなかった。



ウイクリー禪

# 僕の禪日記

東 禪 一

×月×日・月曜日（白禪）

目ざましのベルに起された。肌ざむい晩秋の空気がカーテンを通して部屋にあふれている。タバコを一ぷくつけてから、「エイッ！」と気あいと共にフトンをはねのけ、赤禪をはずして晒の禪に締めかえた。なんといつても六尺禪は晒が最高だ。目に痛いほどの白さが心地よく、肌ざわりも格別だ。いつものように力一杯締め込むと体中に斗志が湧きあがり、寒さなんかふきとんでしまう。

さあ、今日から又新しい週がはじまる。気分を一新して緊禪一番がんばろう。

×月×日・火曜日（紺禪）

放課後、部室で仲間と雑談をしていたら、珍らしく先輩のKさんがやってきた。夏体みの合宿以来だからもう大分たつが、僕らのコーチのため、殆ど一夏中海で灼いたKさんはまだ真黒な顔をしていた。早速に「黒いブームは過ぎましたよ」とひやかしてやったら、

さかさず「人に云えた柄かい。自分の顔、鏡でみろよ」とかえされ、全員顔を見合せて爆笑。いづれもダツコちゃんそっくりに日灼けしていたからだ。

出がらしの番茶をすすりながら、Kさんをまじえて合宿中の思い出話に花が咲いた。毎日練習がおわり、入浴の時、僕らの日灼けの具合をみながら「まだ灼き方が足らん。禪の跡が来年の夏まで残るぐらいに灼くん。俺みたいにな」といって背をむけたKさんの

尻に、くっきりと鮮かに禪の跡がY字型に刻みこまれていたことを思い出した。

「Kさん、まだ禪の跡が残ってますか？」

「勿論さ……ところでお前はどんなんだい」

「一生懸命灼いたから、ちゃんと残ってますよ。」

下らない質問をしたばかりに、僕らは一同脱がされるハメになった。まっさきにズボンを脱いだ僕の体に、一勢に視線が集中した。藍のにおいのする紺の六尺禪を締めていたからだ。

×月×日・水曜日（水色禪）

まっすぐ帰宅すると学生服を脱いで、ふだん着の水色のGパンにはきかえ、水色のセーターをかぶった。勿論、その下にはちゃんと鮮やかな水色の六尺を締めている。いくなれば水色づくめと云うわけだ。

仕度をすませると教科書を持ってとび出す。今日は家庭教師なのだ。教え子は一軒どなりに住む高校生のA君。じっとしているのが嫌いらしく、すぐ暴れまわりたがるので、教えるのも並大抵ではない。今夜も一応はおとなしく学科をすませたが、早速に「相撲とろうよ」ときた。売られた喧嘩はなんとや

ら、庭に出て一丁もんでやった。高校生と馬鹿にしていたら、意外に力があり、つい熱が入ってセーターもGパンもぬいってしまった。

A君はしばらく僕の禪姿に見入っていたが「すげえや」と云うや否や身をひるがえして縁側にかけて上ると兵児帯を持つて現われた。しばらくは一人で締めようとしていたが、わからぬらしくウロウロしているので、ここでも僕は教師の貫禄よろしく教えてやった。

×月×日・木曜日（みどり禪）

秋も深まり、夏の間うつそうとみどりの茂みを作っていた庭の木ともすっかり葉を落してしまった。いまやみどり色は我が家から失われてしまったのだ。しかし、今日は絢爛とみどりの木が茂っている。それが若さを象徴し、すすくと伸びゆく若竹のようなみどりの六尺禪を締めた僕のことだ。

夜、早めに夕食をたべて「緊禪会」の例会に出席する。メンバーは全部で七人、禪マニヤが集まって作った同好グループだ。いずれも逞ましい禪狂の男ばかりで、日本古来の伝統を守ることに誇りを持ち、禪に生きることが誓いあった同志である。会場はリーダー格のS氏宅。

例によって玄関口で会則通り脱衣をする。

ここでは寒中と云えども、全員、禪一本でいなければならぬのだ。それも会できめた雲芥木綿の六尺禪だ。生地は厚いが、粗い目の巾広い「緊禪会禪」はS氏が支給してくれたものだ。僕のナンバーは五番だ。車座にすわった七人の侍の話題は、禪讚美に熱が入ってくる。

ついでS氏のコレクションが披露され、それぞれに締めてみた。僕は虎の皮の禪。カミナリ様ではないが、本当に虎の皮をはぎあわせて作ったもっこ禪である。黒と黄の縞が美しく、見事な毛並みで、ターザンになったみたいない心地がした。

楽しい例会をおわり、玄関口でそれぞれ着替えをする。

「これは俺のかな」

「まちがえるなヨ」

いずれも晒の六尺禪なので、持主がわからずにまごまごしているなかで、僕のみどり色の六尺禪はひときわ目だった。

×月×日・金曜日（黄禪）

S氏に紹介された彫刻家のT氏にモデルを依頼されてから、もう数カ月たつ。毎週金



曜日、僕は学校からまっすぐT氏のアトリエにむかうのだ。モデル台でポーズをとる黄色のふんどし一本の僕に、T氏の真剣な目がそそぎ、手はほぼ完成に近い塑像の肌竹ペラをふるっている。

「休憩にするかい？」という声で、緊張感から解放され、軽いつかれを感じた。

「一ぺん聞いてみようと思ってたんだが、どうして君は、いつも黄色の六尺を締めてんだい？」

コーヒを飲みながら、僕は「ウィクリー・フンドシ」を説明した。

「なるほどね。金曜だから黄色か。そう云えばSさんのところで君をみた時は、別な色のふんどしだったな」

初めて逢った日のことを思い出してくれただ。黄色の禪から色彩の話が出て、黄色を好んだゴッホの話になる。南欧の太陽に燃えつきたゴッホの生涯は、激しく強烈な黄色のようなものだったそうだ。

×月×日・土曜日（豆絞りの禪）

今日は町内の秋祭りだ。朝からすごい上天気でからりとした空が青い。例年になく、好景気のせいか、今年は一だんと大がかりで、

神輿も新しく一台購入したそうだ。「おみき所」から太鼓と笛の音が響き、子供達の喚声が聞えてくる。

「まだかい。早く行こうよ」

元気の良いA君が垣根越しに声をかけてくる。晒をまき、法被をひっかけて豆絞りの鉢巻がよく似合っている。よくみればきりたての六尺禪をきりつと締めていた。ほめてやったら、照れながら、それでも誇らしげに笑った。僕も早々に仕度をする。鉢巻と、揃いの豆絞りの六尺禪だ。力一杯締めこみ、晒を胸一杯に巻き法被を着て完了。鏡でうつしてみたら、イナセな若い衆が出来上った。

神輿が五台揃って町内をねり歩く。揃いの法被ときりつと締めた禪一本で、大道狭ましと暴れまわる気分はいつものことだが、最高の楽しさだ。どの顔にも汗が光り、イキの良い奴はもろ肌ぬぎになっている。休憩する毎に一杯ひっかけた冷酒がきいてきて、身体が燃えてくるようだ。法被をぬぎ、腰にまきつけると、素人カメラマンのレンズが尻のあたりに集まってくる。

神輿をおさめてから、一同そのままごろりと横になる。ひんやりと冷い大道に大の字に寝ころがった気分は、まつりでなくては味え

ない境地だ。タバコをもらい一息ついていると、世話役の人が僕をみて「禪がゆるんだぜ。直してやろうか」と後にまわった。

「今どきの若いもんにしちゃあ、全く珍らしいぜ。豆絞りの禪とはね」

僕は締め直して貰いながら得意だった。

×月×日・日曜日（赤禪）

ぐっすり眠ったせいか祭りの疲れがふきとんだように身体が軽い。朝風呂に入って禪を締めかえる。水泳用の赤禪がいまでは日曜日の禪となっているのだ。何べんも水をくぐり、洗いざらしたので色もあせ、昆布のようになってしまったので、近く新調するつもりだが、この禪を締めるたび、楽しかった夏の海を思い出す。

合宿が終ってから親友のEと二人で房総の海にキャンプをはった数日間、最高にゴキゲンだった。海水浴客の中でも、僕らの赤禪二人組は派手な水着連を圧倒し、例外なく視線が集中したものだった。朝から晩まで赤禪一本のまま、泳いだり、魚をとったりした野性の生活がなつかしい。

午後、レポートの下調べをしたが、退屈してきたので約束までの数時間を近所の映画館

でつぶした。二本立てのセカンド・ランだったが、「海賊八幡船」という海洋時代劇が楽しかった。随所に赤禪男たちが強烈な印象を与えてくれた。そう云えば「ふんどし医者」という映画もあったし、舞台でも全員六尺一本の芝居があったし、近頃は禪の魅力が再認識されてきたのだろうか。

約束の時間カッキリにBさんのアパートに行く。緊禪会の同志、赤禪マニアのBさんは

珍らしく和服姿で待っていた。早速に「今日は何色だい？」と聞かれる。「勿論、赤フンですよ」Bさんはうれしそうに大きくうなづくと、勢いよく着物をぬぎ捨てた。さっきみた映画のひとコマを思い出させるような赤禪一本だ。真新しい赤禪は目がくらみそうに強烈で、毛深い体と対称的だった。うながされて僕も脱ぐ。

「さあ、覚悟はいいかい！」

Bさんの声と共にロープが手首に巻きつき、肉にくい込んでくる。あぐらの中に首がまげられ、海老責めがはじまるのだ。ノドの奥から声にならないウメキが湧き上り、体中からじわじわとのぼってくるものがある。Bさんの責めが激しさを増してくる。体がまげられ、首がしめられる。もうろうとした僕の意識の裏に、禪の赤い色が広がっていった。

(完)

### 本誌最近号在庫一覧

新装10月特大号 (35年10月号) 定価百四十円  
 グラビヤ——緊縛艶姿五十態  
 口絵物語——暗黒集団(四馬孝)  
 新装11月特大号 (35年11月号) 定価百四十円  
 画集——被虐の白い花びら  
 グラビヤ——夢の緊縛アルバム  
 新装12月特大号 (35年12月号) 定価百四十円  
 写真——恍惚女体ハイライト  
 画集——吊責遊び方教室  
 新年増大号 (36年1月号) 定価百五十円  
 画集——新妻教育(こんな愛し方)  
 アルバム——表情とアツプセレクション。蛇倉の恐怖  
 新装二月増大号 (36年2月号) 定価百五十円

絵物語 瀬降り男、グラビヤ——美しきいましめ、珠玉の餌物  
 新装三月増大号 (36年3月号) 定価百五十円  
 口絵写真、緊縛女体ポートレート特集、読者の声と通信、口絵——美と幻想の構図  
 新装四月増大号 (36年4月号) 定価百五十円  
 グラビヤ、華やかなモンタージュ。口絵——異常光線の綾  
 新装五月増大号 (36年5月号) 定価百五十円  
 口絵——吊責めの種々相  
 写真——甘美と清潔の構成  
 新装六月増大号 (36年6月号) 定価百五十円  
 グラビヤ——清美と艶容の造形色刷口絵——美女力士の激突  
 新装七月増大号 (36年7月号) 定価百五十円

グラビヤ——麗化と婉曲美の探究(写真による散文詩)口絵——傑作責面特選、倒錯絵巻選  
 新装八月増大号 (36年8月号) 定価百五十円  
 グラビヤ——余韻の陰微と断面緊縛フォト撮影の実際(亀甲縛りの一例)  
 新装九月増大号 (36年9月号) 定価百五十円  
 グラビヤ——アブ・シーン・アラカルト、緊縛フォト撮影の実際(高手小手縛りの一例)  
 新装一周年記念号(36年10月号) 定価二百円  
 告白特集——偏執記録の断層、グラビヤ——SMMの組写真集、緊縛フォト撮影の実際(ゴムの感触とフェチ好み)  
 新装十一月特大号(36年11月号) 定価二百円

特集——私を責めて下さい(雑踏の中の孤独)グラビヤ——緊縛美の祭典、アブ双曲線  
 新装十二月特大号(36年12月号) 定価二百円  
 特集——読者通信の女性を縛る(ひろ子緊縛記)緊縛フォト撮影の実際(前手縛りと縄抜けの一例)  
 新年特大号 (37年1月号) 定価二百円  
 特集——カバー・ガールを縛るグラビヤ——美しき緊縛緊縛フォト撮影の実際(逆エビ縛りの一例)  
 二月特大号 (37年2月号) 定価二百円  
 グラビヤ——責められる女。組写真——女性の血紅切腹。  
 懸賞百枚読切小説「契約書」

## 戦国哀話

残

(ざんしょう)

照

## 石井章造

天正二年五月二十一日、武田勢は六千の兵を以て倍にもあまる織田徳川の連合軍と三州長篠の設楽ヶ原で死闘を繰返した。武田の得意とする騎馬戦も連合軍の新兵器たる鉄砲の集団射撃の前には何の偉力も發揮出来ず、名だたる武将が足輕のうち出す小銃弾の前にはたばたなぎ倒された。

信州上田の真田源太左衛門信綱、身内の海野城主海野信行は最右翼の馬場美濃守信春の部署に合流して織田信長の猛将佐久間信盛と対峙した。その名を聞くだに敵に身の毛をよだたせたという馬場信春も、織田方の柵にさえぎられて馬を乗入れることができず、狙撃され、もんどり打って落馬した。

昼ごろには武田方の山県昌景、土屋昌信、甘利信康ら名だたる大將分は尽く討死し、乱戦となり、遂には武田勢は算を乱して総くずれになった。

海野信行も武田勝頼の跡を追って敗走したが、つき従う家臣はわずか四人になっていた。だが武運つたなく信行は流弾にあたり、どつと倒れた。家臣の白水某が走り寄って、敵には渡さじと首を掻切り、信行の陣羽織に包んで腰に結び、信行の家臣三人とひたすら北を指して走った。

しかも敵はなお執拗に追いがり、小林大助は討死、白水も手疵を負った。なおも故郷の信濃を指して伊那街道を逃れゆくうち青木某ははぐれて、残るものは白水と望月小次郎の二人になってしまった。

諏訪から和田峠を越せば信濃で、上田はすぐ目の前にある。だが和田峠は山峡深く名だたる難所で、白水はもう五十に近い上に太腿に手疵を受け、一步一步が喘ぐようで、信行の首級は代って小次郎が背に負い、白水を助けながらやっと頂上までは辿りついたが脚がはれ上った白水はもう一步も進むことができなくなってしまうた。

「見ろ小次郎、浅間山は静かに煙をはいっているぞ。おれ達が出陣したときと少しも変らぬ。それなのにどうだ。五百余人でこの峠を越えた真田勢も今は二人きりになってしまった。おれは故郷の山々を見たからもう思い残すことはない。ここで腹を切って死ぬからお前は殿のみしるしを城に届けて戦の次第を語れ。頼んだぞ」

「何を申されます白水殿、艱難してやっとここまで辿りついたものではありませんか。上田も海野もあと半日です。疵の手当をした上、遅くともお城へお帰り下さい」

小次郎が懸命に止めるので白水も思い返し、疵の手当をした上で遅れて帰城することにし、小次郎は一足先きに行ったが、白水は後に至るも遂に城へは戻らず、その消息も全く知れなかった。

小次郎の帰城により真田勢の全滅、殊に信綱、信行の討死は上田、海野両城を悲しみのどん底に陥入れた。城の守備として残ったものは老人、女子供が多く、到底戦闘力は望むべくもないので海野の出城を引払い家中をあげて上田に引揚げることになったが、信之の首級は海野の菩提寺に厚く葬られ、北の方は剃髪して庵を結び、首級を包んだ血染の陣羽織は後々までも寺宝として伝えられた。

信行には二人の側室があったが、一人は町人の娘で新参ゆえお暇を賜り、我が家に帰り、一人は小次郎の故郷と同じ望月の武士の娘で、名前のたえを取って白妙と名乗り、芳紀二十才で信行の寵を得ていた。

信行の三七日に当る日、それは上田城の信綱の三七日でもあって、上田城内ではしめやかな法要が行われた。午後になって白妙は小次郎と十六才になる侍女のぬいを伴につれて

信行の墓に詣でた。

十八才になる小次郎は二つ年上の白妙とは故郷が同じ望月ということもあって、姉のようない特別な親しみをいだいており、思いは白妙も同じことであつた。殿の近従の中から白妙の許に使いに行かされるのは何時も小次郎であつたし、それを迎える白妙も珍らしい菓子などを用意して小次郎をもてなし、話は必ず故郷のことになるのが常だつた。

毎日続いた曇日も今日は珍らしく晴れ、浅間も何時もよりは高くそして近くにそびえて見えた。三人は久しぶりで城から出た解放感と、海野へ向うなつかしさに少しはしゃいだ気持ちで互いに手を取ったり取られたりしながら林をくぐり抜け、畠道を通って緩やかな丘に登ってきた。そこには松林を切開いたわずかばかりの平地の中に小さな薬師堂があつた。信行の墓はこの丘を降りて次の丘を三丁ほど登った所にある。

「ああ疲れた、小次郎どの少し休んで参りましょう」

白妙はそういつて後に続く二人の足を止めさせた。

「小次郎どの、折入って話がある。ぬい、そ

なたは一足先に行つて下され」

小次郎は白妙の言葉に何か差迫った切ないものを感じた。ぬいの姿が見えなくなると、白妙は小次郎の手を取って薬師堂の中に入った。この薬師は土地の人の信仰があつく、病氣平癒を祈ってお籠りする者もいるらしく、中はきれいに掃除がしてあり、片隅には真新しい蓆もあつた。

「小次郎どの、妾の心がわかりますか」

小次郎は若い女と人目につかぬ薬師堂の中に二人きりでいることに怪しく胸が騒いで、しばらくためらっていたが。

「はい、あなた様はもしや御自害のお覚悟をなされているではありませんか」と答えた。

「わかつてくれましたか。それでこそ小次郎どのです。お城に仕える女の身は髪をおろすか、自害して殿様の跡を追うか、二つに一つ途しかありません。妾は殿様の墓前で相果てるつもりで来ました。よしなに御介錯を願います」

「拙者も、あの時、死に遅れた拙者も同じ思ひでした」

「まあ嬉しい、小次郎さまあなたと一緒に死ねるならたえはこんな嬉しいことはありません



ぬ。きつと一緒に」

小次郎の手をとった白妙は思いつめたように声をはずませて

「小次郎さま、たえはそもじが好きでした。

どんなにいとしく思ってもたえは年上、それ

に殿に仕える身、何で思いが遂げられましょ

う。今生の名残り、小次郎さま」

そう云いざま白妙は帯に手をかけるとする

すると解いた。もどかしげに胸を開くと甘い

女の肌の匂いがむっと小次郎の血をわき立た

せた。

勿論、戸の外にぬいの眼があることには気づかなかった。

夏草が生い茂った丘の上の信行の墓の廻り

だけは、草がきれいに刈取ってあった。夕陽はあかあかと残照を映していたが、刻一刻と光を変え、紫の雲は黒に変じ、あかねの雲は灰色になって静かに動いた。

三人はしばらく墓前に頷いてうずくまっていたが、やがて白妙はぬいに向って云った。

「ぬい、妾は殿様の跡を追ってここで自害いたします。そなたは早々に立去ってお城に戻りお暇を願った上、里に帰りなさい。さア直ぐに」

だが、ぬいはうじうじして容易に立去る気配はなく、何か云いたげだが気押されて云えない様子だった。

「最期の妨げになります」

きつとなって云うと小次郎はつと立寄って、水月に一突き当てたので、ぬいは水落ちを押えたまま悶絶した。小次郎は





「致し方がありません。息を吹返さぬうちお覚悟を」

と促した。白妙は手早く帯をゆるめて前をくつろげ、すらりと懐剣を抜いた。

「御切腹なされますか」

白妙は黙ってうなずくと、右の袂で懐剣をくるくると巻いた。

「小次郎どの、妾は切腹の仕様をわきまえます。どうか教えて」

「ご覧下さい。このようにして」

小次郎はぱっと双肌を押めくと、刀を袖で巻き、左手で腹の皮を左手に引寄せ緊張させると、やにわにぶつくり突立てた。

白妙はまたたきもせず小次郎の手許を見つめた。その肌は若い牡鹿のようになめらかで艶々として光り、皮膚の下には熱い血潮がみなぎり、たくましさ若さと清らかさにみちていた。小次郎はうーんと呻ると一気に六七寸掻切った。疵は無残にも大きく口を開け、見る見るうちに血が湧き出してきた。白妙は小次郎の白い肌からほとばしり出る血に妖しい美しさを感じ、云い知れぬ興奮に体が震えた。白妙は目をとじ、やや落つきを取戻すと「小次郎どの、妾も」

と叫んで前かゞみになった白妙は懐剣を左

腹に当てると力まかせに突込んだ。ほーっと一息ついて、息をとめておいて上体を左にくねらせるようにしながら刃を右へ右へとジリジリ引廻した。やっと臍の下あたりまで来たときに、もう手の力が抜けて、どうにも動かすことが出来なくなってしまうた。

ぬいはそのとき息を吹返した。あたりを見廻すとそこに起っている情景はたちまち変わった。ぬいは起上るなりふらふらと白妙に寄りそい、後から手を伸すと懐剣を握った白妙の手をつかんで力まかせにぐいと右に引いた。不意をつかれた白妙はアーツと叫んで後にのけぞった。腹は一尺あまりも切裂かれ、血と共に腸がどっと溢れ出た。後へ倒れそうになった白妙の肩を支えると、ぬいは白妙の手から懐剣をうばって左の背中から心臓めがけて柄も通れと刺通した。ヒーッというような悲鳴をあげた白妙は両手を前に差伸べて泳ぐような恰好をしたかと思うと、のめるようにばったり前に倒れて、そのまま動かなくなった。

小次郎は力にまかせて深く切りすぎ、出血がひどくて意識が霞んでしまったが、それでも白妙を介錯するつもりで、這いずるようにして白妙に近付き、手を伸したが、その手が

まだ白妙の体に触れぬうちに、すうっと引込まれるように気が遠くなって行った。

ぬいは血だらけな手をぶらんと下げてぼんやり突立っていたが、白妙にペッと唾を引かけると急にしやくり上げはじめた。そしてペタンと尻餅をつくように地べたに坐ると、小次郎の上に突伏してわアわア泣き出した。

「この女に小次郎さまを取られてしまった。わしのような虫けらみたいにつまらない女でも嫉妬するぐらいは許されてもいいだろう」  
 そういいたげに、ぬいは小次郎の屍にすがって何時までも泣きつづけた。

残照は消えて、丘の上には暮色が迫ってきた。ぬいは涙にぬれた顔をあげてつぶやいた。

「わしも腹を切ったら侍の娘になれて、小次郎さまに可愛がって貰えるかしら」

白妙の背から懐剣を引抜くと、放心したようにその刃の先を見つめた。刃についた血の脂が、夕闇の中でギラギラと光っていた。

(おわり)



## ルポルタージュ

未<sup>み</sup>決<sup>けつ</sup>監<sup>かん</sup>に蠢<sup>うご</sup>めく

蓮池和邦

(A)

身体検査に指紋調べが終ると、ニューム製の茶碗、皿、湯呑み、そして食器箱が渡された。

「同姓同名があるから、収容者は番号で呼ばれる。よいな」と、黒地に白ペンキで数字の記された小さな木札が握らされる。

異常な環境に苦悩する人間像、つまり警察の留置場（所謂ブタ箱）とか、刑務所に収容された人々を扱った作品は屢々見かけますが、留置場から本格的に刑が確定して刑務所へ送られるまでの間、拘留され、或は検事調べの間、収監される未決監房の内状を述べた作品を殆ど見ません。

私は△△選挙の時、選挙運動に従っていた関係で思わぬ公選選挙法違反の疑いを受け、暫し、収監の憂目にあつたので、その切実な体験を、ここにメモによって報告したいと思います。

「その番号を絶対に忘れない様に、朝夕の点呼にはそれで答えるのだ。よいな、君は一五三番だぞ——」

O・K、一五三番。私の新しい名前は「一五三」、車のナンバー、通信販売の注文番号、芝居小屋の下足札番号、百五拾参、一五三、153……それは電話帳みたいに収監者名簿に載っているだろう——拘留事由、選挙管理法違反、称番号一五三番、という具合に。

両側にずらりと監房の並んだ中央廊下を歩かされる。各房の鉄格子の入った窓から、人間の顔が鈴生りになって此方を覗いている。いよう新入り、何をして来た？ 戸惑ってやがる。びくびくすんない。落着けおちつけ。何房へ這入るんだ？ F T C——。

「一五三番はこの房だ……」

世話をやかすんじゃないぞ、俺は忙がしんだ。と云いたげな看守が警棒と呼子の間から大きな鍵を取出す。ガチャガチャこね繰り廻して、漸く戸が開く。広さは十二畳敷き位。廊下に面して三寸間隔に鉄格子の嵌った小窓が扉を中心にして左右に二つ。高いコンクリート塀をめぐらした裏庭に向って稍大きめの窓が三つ。セメン梓の細長い洗面所。そして一米四方程の穴倉みたいな兼用便所。——未決監第十六房。私の新しい住居。私は其処で眠り、食事をし、用を足すのだ。

壁に凭れたり、あぐらをかいたり、難し気に腕組みをしたり、思おもいの姿勢をした先住者達がせんさく深い眼差しで私を瞷める。ずらりと並んだ試験官の前でテストを受ける——あの感じだ。

「皆と協調して規則を守るよう……」

看守の宣告と共に、ボタンと扉が閉まった。ガチャリと錠の音。

——気に入ろうが入るまいが、これで一巻の終りである。

先客（十一人居た）の中から狐みたいな顔をした小男が出て来て「あの人が監房長だ」

と、大きな軀をした目つきの鋭い若い男を指差して云った。

「挨拶をしな」

斯ういう所には監房長なる者がいて……と話には聴いていたが、実際に直面したのは初めてなので、私は些か戸惑い乍らも、兎に角

自己紹介をした。

「まあ、ゆっくりくつろぎな。俺は此処に百日近く居るが、なかなか乙なもんだぜ。据膳で、おまけに夜は盗人の番までしてくれて、一文の宿賃も要らない。只こうやってぶらぶら遊んで居ればいいってんだからな」

是が私の挨拶に対する監房長なる男の答辞だ。有難う北京原人君

！感謝するよ。さぞかし居心地が良い事だろうな。え？ だからお前も百日も居れて云うのかい？ いやそうは行かないよ。俺は滅法忙がいんだから……見ろ！俺の脳髓を。土まみれになって周章でて外に出て行くじやないか。え？ 念のために今一度、見物に行っただんだけ、きつと……何が見えるか？ ぎらぎらして冷たい大地で、腐爛して悪臭を放つビルとバラックが爛醉狂気の乱痴氣踊りを踊っている。都市は一種の人間の捨場だ。梟の様な男、家鴨の様な女、ボテ腹の小僧、それらが一緒に右往左往よろめきふためき、或いは蠅の様に或いは蚊の様に群っている。ネオンが。ジャズが。三味線が。吸い寄せられた酔っぱらいに、青白い女がたかり、ポケットに手を突っ込み逆さにする。娼婦は「またネ」と囁く。スピーカー、サイレン、救急車、尾をひく悲鳴。ラジオと新聞、賃上げとポスター、ストライキとプラカード、鉄兜と白鉢巻き、要するに一切は規則に従って盲滅法に進行中で、誰にも逃げ路がない……

「何をやらかして来たんだい？」

と監房長が訊く（この男は松原という姓だった）私は「ちよつとね、詰らん事さ」と云って後は薄笑いで誤聞化した。留置場以来、この質問には食傷気味だ。

「おかしな奴だな、お前」



松原は頭をかしげて云った。

「斯ういう所へ来ると、無罪を云いたてる初犯も、前科の数を誇る累犯も、大抵古事来歴を披露に及ぶものなんだ。そして針みたいな事件でも丸太の様に吹聴して、同房の者達に威勢の良い所をみせようと計りやがるんだ」

「そうらしいね」

私はうなずいた。僅か三百円相当のコソ泥をして捕ったのが、同房の者に、自分は百万円近い窃盗犯だと広言していた男や、短刀一口しか持っていなかった癖に、ピストル二挺に、どすをのんでいて捕ったと凄んでいた奴を、私は身近かに経験して知っている。

松原は先程の狐みたいな小男を指差して

「彼奴がそんなハッター屋のいい標本なんだ。奴は初めて此房へ這入って来た折、斯う云っておどかしやがった『俺は拳銃を持って銀行を襲い、五百万円を強奪したんだ』とね。俺達は話半分にしても、相当素走ッこい野郎だと思っていた。処が近頃になって、奴が只のケチ臭いチャリンコ野郎だってエのが曝れたのよ」

と笑い、隅の方で黙念と天井を眺めている。三十前後の青白い男を顎で示し

「それに引替え、あの男は薄気味の悪い奴よ。根掘り葉掘りした揚

句、やっと実は人一人殺害めたんだと吐かした。左様かと思っていた処、どうも一人じゃあないらしくなった。看守の口裏やら何やらで考えると、三人かそれ以上、殺っているらしいんだ。何か、こゝろ、気味の悪い男だよ、奴……」

すると、将棋の駒を転がしていた二十四、五のちよつとした男が「併し、泥棒したり詐欺<sup>かた</sup>ったりした人達は、何んとか美味い汁をすったんだから諦めもつこうけれど、僕の場合は全然良い所なしの悪い事許りなんだから、どうにも我慢出来ないよ」

松原はニヤリと笑い、手を打って云った

「お前の話は何度聞いても面白いよ。実感が有ってさあア——も一度やれよ。詳しくな」

皆どつと吹き出してこの男を取巻いた。男は何度話しても腹の虫が治まらぬと許りに、勢いこんで話し始めた。

「事の起りは、『ダケール』ってバーで一杯やったのから始まるんだ。それ迄にもう五、六回その店へ行つて居り、どうやら馴染みになりかかっていたんだが、そのルビイって、ちよつとふめる女給がね、其晩はいやに僕にサービスが良いんだ。こりやアしめたぞ、とまあ助平心を起して、今晚つきあえよとか何んとか話している中にかんばんになって了った。この儘じゃどう考えても諦め切れな



い。僕はルビイに、もっと遅く迄開けている店に行こう、良い所を知ってるんだ、と誘った。処が「ええ、いいわ、行きましょう」と来た。そして『あたしの知ってる店で、とても感じの良い店があるの、其処へ行きましょう』と云うんだ。ルビイとさえ一緒なら何処でも結構さね。僕はO・Kした。処が行って見て吃驚したよ。『サロンふじ』と云って矢張りバーなんだが、この店は高いので有名なんだ。こりやアほられるぞと思ったが、今更引返されないやね。仕方がないから覚悟を決めて飲む事にしたんだが、もとより用心し乍ら呑んださ。で、潮時を見て勘定を頼んだ訳だが、おッ魂消たね。何んと一万二千円也の請求さ。驚くじやないか、ビールが十本余りにウイスキーと外にあれこれ幾ら高く見積った処で五千円以上って訳はない！僕は腹を立てて大いに文句を云ってやった。併し、すったもんだを繰返す許りで話にならない。おまけにルビイの奴まで、払ってくれる様に、此の店へ案内した自分の立場を考えて貰い度い。と云やアがる。ははあンさては、と僕は気がついたね。ルビイの奴、初めから斯う云う魂胆だったんだ。この店から後で何割か貰う約束でもしていやがるんだ。つまり僕はカモなのだ。と、ここまで考えるともうこれ以上争うのがバカらしくなったので『僕は今、八千円しかもってないから、後の四千円を自宅で払う。ルビイ家までついて来てくれ』と云って、躊躇するルビイを無理矢理に引張って出たのさ。ルビイは頻りに車を呼びたがったが、僕は『直ぐ近所だし、金もないから』と断ってやった。そして人氣のない公園まで来たとき急にある考えが浮んだ——此処で仇をとってやれ、少しでも損を取返す事になる——僕はものも云わずいきなりルビイを羽交締めにした。吃驚したルビイは『や、止めて、乱暴しないで』

と、懸命に跪いたが、何んのその。僕は其儘芝生の上に押倒してやった。すると、ルビイは『ね、云う事をきくから、そんなに乱暴しないで。ね、お願い。こんな所でなく、貴方の家に行ってからにして』と云うんだ。僕はそんな言葉にだまされる程甘い人間じゃないさ。駄目だ！っていうとアイツ途端におとなしくなりやがった。帰りの自動車賃を奮発してやって仇はとったつもりだった。処が翌朝、ポリが来てちよっと同行してくれって云うんだ。何事かと訊いたら、何んと、あの仇討が婦女暴行と云う事になってるんだ。仰天したね、僕は。飛んでもないやね。これは。僕は必死になって抗弁したよ。ルビイにつけられたキスマークまで示して『絶対に暴行でない証拠に、これこの通りだ』と説明したんだが、ポリ公奴、それは彼女が反抗して咬みついた傷跡だろう、なんて吐かすんだ。処置なしだよ、斯うなったら——。サロンふじのマダムと、ルビイが二人して訴えてやがるんだ——どうにもならないよ。いまいまして、是程、いまましい事ってあるもんか』

男は一息つき、何度も何度も残念そうに舌打ちする。皆はそれを嗤し立てる様に笑った。男は尚、一膝乗り出して云った。

「それでルビイの奴、警察で、強く反抗すれば殺されるかも知れない、と恐かったので口惜し涙を呑んでおとなしくしたんだ、と申立ててやがるんだ。白々しいにも程があらアね。猶、腹が立つ事は、その翌日よ、どうもおかしいと思ったら、紛れもないおみやげまで貰ってたって訳さ。正に泣面に蜂じゃないか！」

(B)

突然「薬缶用意イ——」といやに尻上りの声が聞こえて来た。食



事が始まるのだ。

やがて中央廊下を青服の受刑者が、ぐらぐら沸きたった湯を入れた大桶を手押車で運んで来て、窓の鉄格子の間から、長い筒を突き出しては房内の薬缶に湯を満して廻った。

殆んど同時に、入監者達から爆弾と弾されている、直経約十糎、厚さ四糎位の円筒型に固められ、五と番号の印された麦飯が、餅屋の配達みたいに運ばれて来た。是がつまり、何もしないで遊んでいる未決監房居住者に供される五等食というやつで、それはポストよりしく云った形で、廊下に面して口を開けている四角い穴から房内へ一個宛、各自の皿へ入れられた。次にお菜が配られる。

普通（シヤバを云う）は茶碗に飯をよそい、皿にお菜をつくのだが、此処では飯は皿に、お菜は茶碗に、というあんばいで全くの逆であった。又その食べ方たるや眼を瞠る程で、欠食児童の給食風景そのままだった。それは、食事を喫するなんて生優しいものではなく、油断してると皿までぱっくりやるのではと思う程の荒涼さだった。そして矢鱈に湯茶をがぶのみして、やっと一息つくのである。

何も斯様に慌てて食べなければならぬ規則は無いのだが、ゆっくり楽しんで味う程の御馳走でもない上に、先ず何よりも毎食の量が少いので、熊の様に腹を減らして居る収監者達は、食物を見ると我慢出来ないのだ。――



呆然として、尤もらしく考えこんだりしている間に、私は、どん尻になって了った。とつくに食べ終った他の者達は彼方此方に散らばって歯をせせったり、今食べたお菜の不足を云ったりしている。

「ああ女！」

突然、松原が突拍子もない声で云いだした。

「飯を喰ったら、無性に女が恋しくなった。くそッ！」

全くだ、同感だと云う様に房内がざわめく。松原は舌打ちして「俺は去年までキャバレーの用心棒をしていたんだが、其処に凄い女が居てね。メリーって云って凄いシヤンなんだ。凄いんだ――」

と、盛んに凄いを連発すると、暫く口を噤み、何事か思い出さんとする思い入れをした。すると、隅の方に居た例の狐みたいな小男が、凄い見幕で乗り出して来て、松原を睨みつけて云った。

「さア続ける！」

皆はどっと笑った。そのとき、奇妙にも私の脳裏に、ある男女の姿が浮び上った。

彼は中川と云って年齢は六十二、三才位、相当名の通った鉄鋼会社を経営していた。彼は自分の女秘書に夢中になって居り、彼女が居なくてはとても生きて行けそうもない程だった。

春日蘭子――これが彼女の名前だった。正にその名の通りに彼女は可愛らしく、見栄坊で、気取りやで、不貞で我儘であった。

中川社長は彼女を豪勢なアパートに囲い、彼女の欲する儘にドレスや其他の物を買ひ与え、毎週幾度も劇場へ連れて行き、彼方此方と旅行し、総じて大甘の鼻下長爺の役を演じていた。是等は私が仕事の関係で彼の所を訪れるたびに見せつけられていた。

処で私は蘭子を美しい女だとは思ったが、それ以上には友人の秘書としか感じないかの様に振舞った。これは彼女にとって大いに不満だったらしい。しかし彼女が如何に思おうと私は一向に平気だった。遊び相手としては悪くなくろうと屢々思ったが、人間としては屁とも思わなかった。だが、どういふものか、急に彼女の私を見る目つきが變つて来たのが、当の私に判然と分る程だった。それに、彼女はそろそろ中川社長に厭氣がさして来た様でもあり、何んとなく勝手な真似がしてみたい風であった。

——或る夜、中川と私は新しく開いたナイト・クラブに行った。蘭子も一緒だったのは勿論だ。二時間もすると、中川はしたたかに酔つて其儘ボックスで寝込んで了つた。私は蘭子を誘つて二、三回踊つた。何となく春の毒氣に満ち溢れた晩だった。帰りがけに化粧室を覗くと蘭子が居た。唇に手際良くルージュを塗っていた。私はつと中に入り、後手に扉の掛金を掛けた。そんな私の企みに気づかない彼女は、鏡の中で私に笑いかけた。私は彼女の肩に腕を廻した。

「あらッ」

と、彼女は心底から驚いた様な顔をした。

「ねえ、お願いだから離して——」

と彼女は抱擁から逃れようとし乍ら云つた

「パパに見付かるわよ」

彼女が腕けばもがく程、私は放埒で狂暴になった。

「爺さんなんぞ帰して了解よ。僕は今夜君を離したくないんだ——」

彼女はハンドバッグから鍵を出して

「これ、あたしの部屋の鍵。先へ行つて待つていて。あたしパパを本宅に送り届けといひて帰るから——」

その日以来、彼女は社長の来ない夜は必ず私に電話を掛けて来た。

「斯うしてるとき突然、中川のとっさんが来て見付けられたら、大変だとは思わないのかい？」

と私は訊く——附合い上では、私は中川氏とうまくいつて居るので、今更まずい関係にはなりたくないものと、私はこすつたらしく計算する——しかし蘭子はその事全然、顧慮しない。

「曝れたつて平気よ。さっさと別れて、外のお金持ちの助平爺ちゃんを捜すまでだわ——」

と涼しい顔をして云い

「それに、ちよつと曝れつこないと思うわ。宅まで送るのはあたしだし、パパはパパで、一旦、家に帰つたら最後、一歩だつて容易には出られないの。奥様がそれはそれは難かしんだから——」

と片付け、何の懸念も持つていない。中川氏こそ、いい面の皮であろう。娑婆にはなんと、この種の女の多いことよ。そしてまたこの種の鼻下長族も……

(C)

午後三時に、三十分間の運動があり——と云つてもコンクリート塀に囲まれた狭い裏庭を只ぐるぐると歩き廻り、日向ぼっこをする



位のものだったが——四時半には、もう夕食だった。そして、五時半に夕迎の点呼が行われた。

点検の合図で、番号の若い順に正坐した収監者達は、担当看守の「——房×名。番号ッ！」と云う号令で、各自が出来るだけの大声で、自己の番号を申立てる。これを部長看守が、収容者名簿と一つ一つ照合し乍ら全監房を廻るのだ。この点呼が全部終了するまで約二十分掛る。その間中、看守の「番号！」と云う号令と「——番」と答える収監者の叫びが、房舎内にわんわんと反響して、一種、壮快な感じさえする。

終日、大きな声を出す事を厳禁されている収監者達は、この時と許りに、練兵場の指揮官よろしくの奇声を張り上げて、もう自分は大声は出なくなったのではないかしら、と云う杞憂と、強制された静粛の鬱憤を僅かに晴らして、どうやら一息つくのだった。

就寝は大体七時頃で、担当看守が各房に就寝だと云って廻る。この知らせがあると、眠くなかろうが何んだらうが、兎に角、寝具を敷かなければならなかった。布団は受刑者の戒衣と同じ青色で、上下各一枚が一组として各人に渡されている。それはふんと黴臭く、あちこちに訳の分らない汚点が附いていて、どう我慢しても安眠出来る代物ではなかった。それでも皆、詮方無く潜り込みはするが、誰も直ぐには眠らない。種々な話題を持ち出して、とりとめもなく

話してむのだった。

斯ういう無駄話には、慨して殺人とか放火と云った重罪を犯した者は余り喋らない。彼等としては、無期懲役かな？、ひよっとすると、死刑になるのではなからうか？ と云う心配の方が大き過ぎて、詰らぬお喋りをするところではないのだ。

これに引替え、コソ泥みたいなケチな犯罪人は大抵酷くお喋りで、失敗したよ、同じ捕るのだったら、もっと大掛りにゴッソリやるのだった。今度やるときにはもっと手際良くやって……と改悛どころか、新しい手口の研究によりせいを出す奴も居れば、一、二年ゆっくり只飯喰って養生するさ、今頃みてエな不景気な娑婆では余りぞっとする儲けはないからな。その中、景気の良くなった頃出て行って一時に取戻すのさ。と、まるで出養生に来たみたい嘯ぶくのも居て、犯した罪を償なおうと云う気持の更に無い者が多かった。

中でも、例の狐みたいな顔をした小川と云う男は、その最たる者で、彼は昨日、最終公判で二年の判決を受け、近日中に刑務所へ送られる事に決ったのだが、てんとして動ずる様子もなく

「——ええ、このたび当小川朝夫は、司法施行にかかわる採用試験に、警察、検察庁、裁判所と三重の関門を突破致しまして、晴れて当地刑務所労役課へ就職の運びとなりました。尚、勤務期限を一応二カ年と契約致しましたのでありますが、是は成績次第で多少変更

される見込みであります。是一重に皆様方の御援助の賜と衷心より感謝致すものであります。オワリ」

と憶面もなく述べ立てる始末だった。

尤も、こんな手合は独り者に多く、家族持ちは矢張り何かと沈み勝ちになるのは争えなかった。しかし、そうかと云って彼等は残して来た家族の事を、それ程深刻には論じ合おうとはしない。大抵、うむ、それは可哀そうだな。苦勞するだろうな。でも何とかやって行くさ。余り心配するなよ、と簡単に片附けて了い、なるべくその問題に触れない様にするのだった。只さえ収監の憂悶に打ちひしがれているのに、その上、残して来た妻子の事で改めて心の傷を掻き廻されるのは耐えられないのだ。だから、立場の似た者の話を聴くのは、取りも直さず、己れの苦惱を掻き立てる事になる訳で、お互に是を遠慮し合うのだった。

扨て、斯うした無駄話は結局、各自が犯した罪の批判に落着いて行くのだったが、これはまた諸々の性格を持っていて、其場限りに聞き流されないものがあつた。

他人の犯罪経緯を聴いては各自が、いやそうしたのが悪かった、いやその手が不味かった、その方法は間違っている等と様々にこきおろしたり残念がったりして、自分だったら斯うする。俺だったらその場合は、等と懸命に秘策を練ると云う具合なのだ。

しかし、殺人に就いてだけは誰も論じようとはしない。皆、一樣にその殺人犯の話を熱心に聴くだけで、批評はせず、せいぜい溜息をつく位が関の山で、大抵、黙り込んで了うのだった。

斯うして午後九時になると、ラジオの舎内放送が切られ、お喋りも少くなり、ぼちぼち本格的に眠りに就く。――

広い房舎がしいんと静まり、見廻る看守の靴の音だけが小さく、コツコツと聴えるだけになる。それでもまだパツチリと眼を開けて、じっと天井を睨めている者や、拘置所文庫本をゆっくりめくっている者が居る。

私の隣の殺人犯の男(この男は多田という姓だった)も一向に眠ろうとしないので、その訳を訊いてみた処、彼は困った様に「余り早く眠って夜半に眼が醒めたら耐らないからね、色んな事が眼の先にちらついて――」

と答えた。すると、その向側の中年過ぎの男が

「そうなんだ――」

と相槌を打ち

「夜半に眼が醒めるのが、一番辛い。だから、愈々眼がつむる迄、斯うして面白くもない本を読んで居るんだよ」

と力無く、恥かし気な笑いを見せ乍ら云った。

遠く微かに列車の轟き。そして案外、真近かに、電車の警笛や、自動車の疾走する響がする……蕎麦屋の笛の音も――。

「ああ出たいなア。俺はあの音を聴くとたまらなくなる……レールに軋む電車の音って、案外良いもんだなア。スパークしてパチッパチツと散る青い火花が眼に浮ぶぜ――」

と、誰かが布団の中で感嘆して呟くと、又もう一人が

「本当に。俺はあの音を聴くと息苦しい程に胸がどきどきするんだ――俺は、あの電車のブフウ、ビヒイって云う掠れた様で瘤高い警笛がこたえられんよ。電車の周りには。ピカピカのハイヤーがすっ飛ばしている事だろうなア。船みたいに、ふわッふわッとし乍ら、ガスの匂いをさせて、しゅッ、しゅうッと走っているだろう……」





そら警笛が、そら、ブフウ、ビヒイツてね。きつと摺れ違つた所だぜ。そらまた——」

・ブフウ、ビヒイツと、それは長い余韻を残して、次々と流れて来る……。先程の老人が本を閉じて枕を胸の下に抱き乍ら云つた。

「死んだ女房が元気だったときは、よく郊外電車で田舎へ良い空気を吸いに行ったもんだ。……息子もよくついて来て、儂より沢山雉を撃つたつけ。帰りの電車の中でも人々に獲物をうらやましがられたもんだつた。……一人っ子で甘やかして育つたので、少し我儘の所も有つたが、元気で良い子だったがなア……幸福だったあの頃……戦争が始まり……息子は戦死して了つた……女房も死んだ……儂だけが斯うやって……何んの為に生きていて……こんな所に……儂は、俺は——」

その途切れ途切れの呟きは、夜の雨の様に低い囁きになり、そしていつしか止んだ。老人は俯向きに臥せ、顔を横向きにして目をつむっていた。その皺の寄つた小鼻が、ときどきピクピクと動き、頬の下敷布団が円く濡れていた。

# (D)

午前七時——サイレンが唸る。途端に、しんとしていた房舎が騒々しくなる。

中央廊下を夜勤の看守が足早に歩き乍ら各監房を覗きこんでは、

起床!、と嗷鳴って行く。睡眠不足で眼が赤い。

「ちえッ、もっと寝といて呉って頼んだって、寝とられるもんか。腹がぺこぺこだ」

と誰かが吐き出すように云う。いつも黙々としている多田が、頓狂な声で云つた。

「今朝のお菜は何んだらう。薯かな?」

一大事みたいな顔附きだ。ズボンに脚を突込み乍ら、松原が忌々し気に打ち消した。

「——朝食は小便汁(みそしるの意)に決っているじゃアないか。それと有難い爆弾だ」

「いや、こないだの朝は薯の煮つけが附いていたぜ——薯のお菜は良い。腹が太るからなア……」

起床第一声がこれだ。絶対量が足りないの、兎角こうした話になり勝だった。

金さえ出せば、差入屋からどんな豪勢な料理でも取れるのだが、一番安価なのでも三食で六百円余りもするので、殆んど収監者は手が出ない。僅かにパン其他の間食を購入して我慢しているのだ。それも多小なりと小遣いを所持している者の話で、無一文の者はどうする術もなく、ひたすらに官給食を頼みとするしかなかった。

「俺は昨夜、こんなにでかい——」

と取り逃がした魚の大きさを示す様な手附きをした小川が、世にも無念極る所作で云った。

「ビフテキを出されたんだが、此奴がどう焦っても喰えないんだ！ フォークで一生懸命に口へ持って行こうとするんだが、何度やっても、すり抜けやがる。えいクソ、面倒だ！ と、いきなり皿ん中へ手を突込んでやったら、畜生奴、テキの野郎、消えちまいやがった。しまった！ と叫んだ途端に眼が醒めちまった。夢でも良いから兎に角、喰いたかったよ……」

「詰らねエ話をすんない——腹がきいきい云わア……」

と、松原がしかめつらで、尚も続けようとする小川をおさえる。

大の男達が子供の様にがつがつと食べ物事を話合ふのは、滑稽を通り越して何かしら鬼気に似たものを感じさせる。

朝の点呼迄に房内の掃除をするのだが、皆のうのうと大儀そうに動くので、なかなか手際良くは片附かない。粗食による栄養不足で軀がだるいのと、只、寝たり起きたりの動きのない生活に、活気が脱けているのだ。

朝食後、暫らくすると、検事調べや公判の有る者の呼び出しがある。これを出廷と称し、その朝は私も呼ばれた。

書信室前の廊下に、呼び出しを受けた者が五十人近く集っていたが、皆、申し合わせた様に、きちんと折りの利いたズボンを着き、糊の利きたワイシャツを着ている。娑婆に居たなら、とても斯うではあるまいと思われる男でも、小ざっぱりとした恰好をしているのだから如何にも不思議なものだ。これは、ただぼんやりと、する事も無く過す毎日の退屈凌ぎの一手段であった。彼等は丁寧にズボンに折りを着け、食事の際ほんの少し残した飯を、これも酷く念を

入れて作った糊袋に入れて水で溶き、それをワイシャツにつけるのだった。糊づけ後は娑婆ではアイロンを掛る処だが、此処ではそんな物の使用は許されないもので、末だなまがわきの中に折畳んで形を整え、就寝時、敷布団の下へ入れておしをする。翌朝には、ぱりつと糊の利いたワイシャツとなる。と云う具合だった。

退屈凌ぎには各自、色んな事をする。どんな馬鹿氣た事——娑婆では見向きもしない事を種々思いついては熱心に又、念を入れてする。不用になった齒刷毛の柄を——と云っても刃物はないので他の方法でそれを削る。例えば流しのコンクリート枠で氣長にこすったり等をして——細工した素晴らしい耳かき。バターの外箱や、キャンデーの包紙で作った見事な箸箱や将棋の駒入れ。箒の柄をちよん切り、外側を色とりどりの紙で飾った、一輪差しの花瓶。それに齒刷毛入れ。可愛らしい造花。靴は入所する時、取上げられているので、いる筈のない靴べら。竹製ピンセット等々、根氣強く趣好を凝らして作り出すのだ。

扱、呼び出された者が全部集まると、二人宛手錠で連がれ腰縄を掛られる。斯うして二列に並んで、所外の控え所迄連行されるのだが、恰で芋蔓の様にずらりと連なった様子は、何んとも浅間しく、是が娑婆で右往左往しているのと同じ血が通っている人間なのだろうかと考えこませる程に、珍奇で獣じみている。此の場合、私もその一人なのだから、何んともほぞを噛まずに居られない。

収監者達は、控え所を鶏小屋と呼んでいた。多分その周囲に張巡らされた金網から、そう名附けたのだろう。此処では大体二十人を一組として、夫々違った監房に入れられる。そして房内では一言も話をする事を禁ぜられる。終日、無言で坐っていないければならない



のだ。もし禁を犯す者があれば、忽ち引張り出され、後手に手錠を掛られて肩がねじれる程に吊り上げられる。斯うして、三十分余りも其儘に置かれるのだが、これをやられると、どんな我慢強い者でも、顔面蒼白、額から脂汗を滲ませて悶え苦しむのだ。

此の日には、三人も廊下へ引張り出されて、此の懲罰を受けていたが、固く手錠を掛けた上に警棒を通してねじられたので、手首の皮膚が破れ、血の滲んでいるのが居た。看守は傍の椅子にふんぞり返って煙草を喫い乍ら、さも偷決そうにこれを眺める。

「——誠に結構な御様子だよ。そんな姿を、お前達の親に見せてやりたいね」

と、その看守は云う。

「話をするんじゃないと何度注意されても判らないのかね。口で云ってきかれない奴は斯うして徹底させるんだ。たんと話をするが宜い……」

中の一人が遂に音を挙げたのを見ても看守は何等動ぜず、冷然として云った。

「まだまだ、腰抜け奴。もっと苦しいやり方もあるだぞ。そんなのはまだ序の口だ。何んだ、その面は。昔なら腮骨をぶち砕いてやる所なんだがな。そうされぬだけでも有難いと思え」

——罰を受けている本人も苦しく憤りに燃えようが、それを見せ

つけられている房内の者も、それに劣らぬ憤怒を覚える。彼方此方で怒りのこもった低い呟きが起る。

(畜生奴。娑婆で逢ったら只じゃおかぬ) (ぶち殺してやり度い、あん畜生!) (娑婆では、まともに相手にされねえものだから、此んな所でいた、だかになりやがるんだ) (弱い者いじめにも程がある。少々小声で話をしたのが、どうしたってえんだ。共犯は別々にされてるんだから、そんなに嚴重にする理由はない筈だ) (手前の暇潰しに勵りやがるんだ、畜生奴。娑婆で逢ったら、吹っ飛ばしてやる) (大方、手前の不細工な嬬ひかあにも大事にしてもえなかつたんだらう。このひょっとこ奴) 等々、爾々云々。

——私も是には例外でなく、腹の中で憤怒の上げ下げをやっていた。が、ふと突拍子もなくグリーンンの「権力と栄光」を思い出した。今の場合、何故、斯様な物が頭に浮んだのだろうか? と不思議に思い、筋の中に警察と留置場を扱っているからだろうか? それならミラーの長篇にもっと面白いものがあつたと思いつき、主人公が刑事に向って述べ立てている一節を反芻する。それは斯うだ。

——随分、君は沢山の鼠をひっぱたいただろうね。誰かに其奴を抑えつけさせて、大袈裟な悲鳴を挙げる迄、君がやつつけただろう。それから君は塵を払って一杯ひっかけただろう。其奴は鼠なんだから、其位の事を受ける値打ちはあつたよ。ただ君こそ大鼠に違いな

い事を忘れないならばね。君は人を痛める事が好きだが、おそらく子供の折、蠅の羽をひきむしったりするのが好きだっただろう。几帳面に教会へ礼拝に行つて懺悔をするが、本当の事は打明けやしない。本当はどんな鼻もちならぬ浅間しいやくざ野郎かと云う事を教父に決して告白しないで、ほんの些細な罪だけを打明けらんだ。防ぐ術もなく、君を少しも痛めない野郎をひっぱたいて、どんなに面白がつているか、一度も洩らさない。誰も彼も、何んてまア君は素敵な男だと云う。只、君が引つ捕え、ひっぱたいて小便をひらせた哀れな野郎共の外はね。君はそれが自分の仕事で、何も好き好んでやっているのではない、と自分に云つてきかせる。もしその仕事を失つた場合、外に出来そうな事を判然と予想するのは君にとって難かしからう。資産も無からうし、何にも大して精通してまい？得意なものもあるまい？と云つて確かに君は掃除夫か屑拾いにはなれるだろう。だが、有益な事は余り出来ないだろう。いつか君は悪い奴を殺しそうな破目になったときは如何する？其時は君の為に嘘を吐いてくれる誰か、君の代りにピンチ・ヒッターになつてくれる誰か、その一つかけらの人間性も一点の人格も持たない君と同じ様な仲間が欲しくなるだろうじゃないか。それで君はそれのお礼に其奴等に頼まれたなら、君は諾々と人殺しをするだろうよ……」

こいつを、あのふんぞり返つて鼻糞をほじくっている看守に、面と向つて云えたら、どんなに宜いだろう、と私は思い思ひしたのだ。

## (E)

その日、終日、窮屈な思いをして待っていたのだが、遂に私は一

度も検事に呼ばれず終いだつた。だが、こんなのは珍らしい事ではなく、酷いものになると、七日もぶつ通しに呼び出されておいて、只の一度も調べられなかったのも居るといふ事だつた。彼等はこれを、一人も客がつかずに売れ残つた廓の女郎に例えて「お茶をひいた」と称していた。

併し、話も出来ず、終日、無言で坐らせられているのは、相当な苦痛だ。調べでもあればまだ気分も落着こうというものを、今か今かと待ちくたびれている間に、昼になり、夕になつて了つてゐるのは、いい加減、神経の太い者でも閉口する。監房に居れば、本も読めようし体操も出来る。理髪も出来れば、書信も順番で書ける。処が斯うやつて呼び出されて居ると、それ等が全部犠牲になるのだ。いらいらせざるを得ない。

夕食直前に、私は所謂、お茶をひいて十六房へ戻つた。

——中に見知らぬ若者が一人増えて居るのに気がついた。りうとしたダブルを着て、壁に凭れて、小声で流行歌を口ずさんでいた。

「新入りかね？」

と、私は将棋を指している松原に訊いた。

「あの男か——」

松原はいかにも可笑しそうに咽喉を鳴らして云つた。

「新入りみてエで新入りたア違ふんだ。おい、竜崎、此処へ来てお前の事を話してやんな」

「O・K」

と、竜崎と呼ばれるその男は、態度に似合ぬ案外の気軽さで私の傍へやつて来た。

「——やあ、御疲れさん。あんたとは初対面だったね。俺は竜崎と





いって、つい四、五日前までこの未決に居たんだ。尤も房は違つて隣の十七房だったんだがね……」

彼は恐ろしく早口に喋り出した。その云う事に依ると、彼は詐欺で収監されていたのを、二万五千円の保釈金を積んで五日程前に出所した。処が、先に同じく保釈で出ていた窃盗専門の同房の男に誘われて、今度は質屋に押入り強盗を働き、二拾万円余りを強奪した。そしてその翌日逮捕され、出所後僅か五日で、再び拘置所へ舞戻つて来たと云うのだった。

「馬鹿だよ、お前は」

と、松原が云った。

「まるで、二万五千円出して、此の先何年分かの懲役を買った様なもんじゃアないか。保釈で出たりせず、此処で温順しく坐つてりやア、詐欺罪だけで、せいぜい一、二年程勤めてケリがつく処だったものを、本当に馬鹿だよ、お前は。今度は強盗が重つたから、十年は喰い込む事になるうぜ——」

「ほんとだ、松原のいう通りだぜ」

小川までが馬鹿だと断じて云う。

「大体お前、詐欺で捕られた時は、初犯だったんだらう？ それも何十何百万でエでけエでなく、ほんの小指程の詐欺だったんだらう。だから初犯じゃあるし、うまく行けば執行猶予でにげられた

かも知れなかったんだぜ。悪く行つても一、二年位なもんで、これっぽちは只みてエなんさ。それを——」

と後は松原の云つた様に、罪二つ重つて十年は懲役だ、竜崎は馬鹿だ、と結論するのだった。

これを竜崎は複雑な表情で聴いていたが

「他人の事はどうとでも云えるさ。いざお前達が俺みないな立場になつてみる、必ず俺と似たりよつたりの行動をとるだらうよ」

と云い、自嘲めいた態度と口調で

「先ず保釈金の二万五千円だ。此の金は一体何処から出たと思う？ これは十七房で俺と一緒に居た金子という男、詰り、今度一緒に強盗をやつて捕つた金子から出ているんだぜ。俺が十七房で出たい出たいとこぼしていた時、金子の奴が、じやア保釈金を積んで出るが宜い。その金は俺が借そう。どうせ真当に稼いだ金じゃないんだから、急いで返してくれなくても宜いんだ、と云うのさ。まるで棚からぼた餅じやないか。俺はほんに嬉しかった。それから金子は先に自分が保釈で出て、直ぐに俺の保釈手続きをとってくれた。俺は礼を云うのもそこそこに、家に飛んで帰つた。処が、家ん中の空気ががらりと交つてゐるんだ。俺が挙げられる迄、あんなにちやほやしていたお袋が、と云つても継母なんだがね、それがつんとして『お前のお蔭でいい恥じをかきました。今まで曾って、家から縄付きが

出た事なんて一度もなかったのに——』と毒づき、妹は妹で『兄さんの為にお嫁にも行けないわ』と、攻撃するんだ。恰で死んで了えと云わん許りさ。会社も勿論クビになっていた。斯うした八方塞がりの所へ現れわたのが金子で、二万五千元、利子を附けて直ぐ返してくれて云うんだ。約束が違うと云っても、金子の奴、少しもきかないんだ。『兎に角、急に入る事が出来たんだから直ぐ返せ』と、ぎやんぎやん催促しやがるのさ。困ったな処の騒ぎじゃないぜ、これは。すると、金子の奴、妙な妥協案を持ち出してね。自分の今計画している事を手伝ってくれたら、借金を棒引きにした上に儲けの半分を出すが如何だつて云うんだ。勿論俺は奴の計画がぴんと来たから断ったさ。でも金子は、ねっちねっち誘うんだ。今はそつうやつて娑婆の風に当っているが、公判で判決を受けると、早速喰い込まなくてはならないんだぜ、とか。それ迄の貴重な毎日を、指を咥えて家でくすぶっているのか、とか。恥じをさらしたんだから家には居辛からろう、とか。そうかと云つて、外で楽しもうにも金があるまい、とか。自分と組めば絶対に損はしない、とか、いちいち俺の胸に響く事を云いやがるんだ。結局、一晩だけ考えさせてくれと待たしたんだが、何も考える事はありやしないさ。金はないし、家の者には出て行けがしに云われるし、行きつく先は決まっている様なもんさね。決心をきめると早いやね。俺は家の者を叩き伸してやつて飛び出したさ。後は御覽の通りとなりけり、だ——

——聴けば実に他愛もない話だ。蛮人が文明社会に迷い込んだのに似ている。彼の眺める風景には、動物も植物も山も川も、普通の姿としてではなく、奇怪な一枚の絵看板として存在している。未来なんて考えた事もないし、考えようもしない。彼には只、眼の先三

センチメートルがあるだけだ。道義心の欠除なんで云う生優しいものではない。彼にはそんなものは、これっぽっちもありはしない。神を説けば、それを見せると云うだろうし、見せたとすれば、入質すれば何程になるだろうか、と値踏みするだろう。彼は器に入れられた卵の白味みたいなもので、始終、右往左往と落着かない。どうしても、火を通して固めなければ。

然らば、私はどうだ？

私はとるに足らぬ人物であり、混雑に見失われる人物である。存在すら気づかれぬ位の極めて平凡な人間である。少くともそうらしい。私は日本海流に漂よう小枝宛らに闇の中に横たわっている。いかにも頼りなげに蠢いている。その故とも限らないが、私は敢えて自我を暴露したがる。私は危険な生き方をしている。それと云うのも、自分が強いからではなく、他人の強さを利用する術を知っているからにすぎない。事に臨んで、余り恐がらずに行動するのも、じつとしていると意気銷沈するからだ。又、私は真実に対する理解力をより深めるには如何にすれば宜いのか、日夜焦りに焦っている。それがまるで暗中模索で、何れの方向に向っているのか、てんで判らないでいる。私の存在は殆んど無いみたいだ。私は、骨、髓、血、脂肪、淋巴、胆汁、臓腑、などのごたごたした諸道具を、だらしなく掻き集めておしこんだバッグであつて、ひと度、その殻を死神に引渡すべき時期が到来すれば、汚れた爪の下にぴしと捻り潰される一匹の虱と大して変りはしないのだ。只、私は、その時が来るまで、この集團世界の穴倉の中を自分を存在づけ様と必死に試み続けるのだ。私は眼に写る総ゆるものを信ずる如く、私は自分の精力を信ずる。私は何ものをも恐れず、第一に至極健康でありた

い。身も心も。……

竜崎の話でちよつと口を歪めていた松原は、やがて、組んでいた腕を解いた。最早、何んの表情もない。自他をちゃんと割り切っている。彼は薄笑いを洩らして云った。

「もう、どうぼやいた処で詰らない。現実には斯うなつて了つたんだからな。それよりどうや、ちつたア遊んで来たかね？」

「勿論だ——」と竜崎はそれ迄の感情走つた態度を急変して、俄かに活気づいて云った

「山分けの十万円を懐にするとすぐ俺は“ニュー・ハレム”に飛んで行つたね。その晩から、とつ捕るまで二日間、ずつといつづけさ。相手をした女は紅子と云つてね、ほら、ジーナ・ロブリジーダって女優が居るだろう、あれにちよつと似ていて、いい女だった。是がね、一週間程田舎へ、暇を貰つて息ぬきに行つていて、恰度帰つた許りの所だったからたまらないやね。金はたつぷりあったし、そうやって休養充分な紅子みたいな女にはぶち当るし、こんな良い事って有るかい？、全く、神様のお助けだと思つたよ……」

「莫迦野郎、そんな所へ神様を持って来る奴があるかい。お前余ッ程いかれてやがつたんだな？」

「どうとも思うがいいさ。兎に角、紅子はのぼせ上つているし、俺は俺で長い間のお精進と来てらあ。此の二人が衝突ぶつつたんだから、そりやア凄じいものさ」

「ちえッ、どやすぞ此奴」

松原もついつられて舌打ちする。

「やれやれ、溜息を吐かせやがる。——だが、ようく覚えてろよ。何しろ、それと十年也の懲役と釣替えたんだからな」

と、松原は哀れ味とも、同情ともつかない云い方をした。

(F)

夕食には珍らしく魚がついていた。娑婆なら、きつと顔を顰めたであろう、その塩魚を、皆、大喜びで喰べるのだった。

朝起きると先ず食物の話、次に女の話、又食物、それから女、又食物、又、女、食物、女、食物、女と、此処では主題となるのは、此の二つが総てだ。外の事物は綺麗さっぱりと、別世界に追放されている。

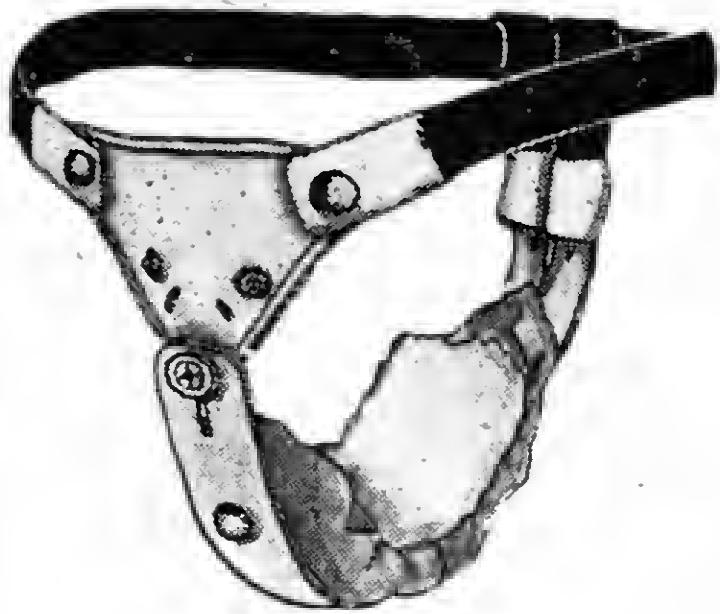
人生とはそんなものではないが、イスラム教徒に対するコーランの如く、未決監では、食と性の二つが厳然と支配しているのだ。勿論、人間として自由は欲するが、未決族にはそれは問題外のものと写るらしく、どうも同等には扱わない。先ず口にするのは食物、そして女であつて、自由は「」の中に納められている。

それが正に、無為徒食する未決族に相応しいのだ。

私はその翌日、何んとか起訴猶予になつて出所した。

背後に閉る鉄扉の重く軋る音を、生涯の記念に注意深く脳中へ刻んで、私は待つていたハドソンに乗り込んだ。

長い外国放浪から漸く帰国した者みたいに、私はそわそわと四囲を見廻し、懐かしいビルディングを、アスファルトの舗道を、電車を、ネオンを、鈴蘭灯をガリガリと噛み下し、ガソリンの、デパートの、雑踏の、街路樹の、中華料理の、煙草の、匂いを胸一杯に吸い込むのだった。——確かにそれらは生きていた。



メンチシスト（月経綿崇拜者）の告白

## メンス考現学

古井真哉

眼を向けました。だが、何も関係をもたない私が門をくぐることは困難です。ましてトイレへなどは尚更のことです。

いろいろ考えをめぐらせた末、魅力をもって頭に浮んだのが、男女共学の高等学校だったのです。

何しろ、戦後にわかに一緒になつたまま、まだ便所まで、はっきり区分けしているところは少いのではないでしようか。私の家の近くにある高等学校は区別してないようです。

何百人という女生徒達。その若さに溢れた生徒達のうち、生理日だからといって休む生徒が何人居るでしようか。

コワイおじさんや、おばさん達には叱られるかも知れませんが、高等学校のトイレは、私にとっては素晴らしい宝庫とは思えなくなっていました。

事実、勇を鼓して人気のなくなつたトイレを密かに訪れてみた時に、カンのふたが盛り上っている

婦人専用のトイレには、男子用

にはないものが、一つだけ余分に備えつけられています。

それはいうまでもなく、女性の生理を処置したあとに必要な汚物用カンですが、このカンこそ、私の心を強力に惹きつける力を持っているもののなのです。

中に捨て入れられたものこそ、汚物どころか、私にとっては何よりの魅力をもつ宝物なのです。

だが、男性たる私が、このカンの中を覗くことは仲々容易に出来

ることではありません。

よく女性の集るビルや百貨店などでは、はっきり区分けがしてある上に、いつも沢山の人眼があつて駄目ですし、旅館やアパートなどのトイレには、そう度々行ける機会を持ちません。

たまにその機会があつたとしても、必ずしも希望のものがあつては限らないのです。私の遍歴のうちでも、何週間もほうっておかれて、コチコチの嘔吐をもようすようなのだとか、流してしまふべき

ものが大きな顔をして入っていたり、たまに新らしいのを見つけたと思うと、とんでもないものがついているといったのが多いのにはガッカリします。

だがしかし、絶えず私の願望は私をけしかけます。適令期の女性のうち、七人に一人はメンス中なのだから、集団している場所を探せば、処置後のものなど、きつと掃いて捨てるほども見つけることが出来る筈だと……。

私は幾度か、洋裁学校に憧れの



のや、入りきれずに、辺りに散らばっているのを発見して、天にも昇る気持になったものです。

近頃はよく、ティーン・エージヤーに処女は少ないなどと云われているようですが、そんなに気を揃えて放らつをするわけがありませんから、この云い方は、無責任な一部のジャーナリストの誇大記事からでも出たことではないかと思ひます。けれども、彼女達の捨てたものは、私の眼から観ても驚くほど多種多様です。

いつでしたか、夕闇も迫って、勿論人の気配もないガランとしたトイレボックスの一つに入って、カンの中のものの物色を楽しんでいるとき、急ぎ足でやってくる小さき足音が聞こえました。

「しまった、もう誰も居ないと思つたのに……」と、私は緊張し、多少ウロタエながらも、息をこらして聞き耳を立てました。足音は私の入っているボックスの前辺りで停りました。私はハットしまし

た。でも、それは隣りのボックスらしく、コツコツとノックする音が壁を通して聞こえました。と、

ほとんど同時にドアが開けられ、そして閉まる音がしました。私はホッとすると同時に、隣りの気配に注意を向けていました。

隣りでは、二、三度足ぶみをしたようでしたが、一向に用を足した様子はありません。時間を置いて動く気配はあるのですが、早く出て行ってほしいと希う私には、とても長く感ぜられる静寂です。

だが、しばらくして、意外なほど高く響く、カンのふたと胴金の触れ合う金属音を聞いた瞬間、私の心臓はキューンとちぢみ、体がぶるぶる震えたのです。

ボックスを出た足音が手洗場に向つた気配に、私はホッとして、こわごわながらドアを細目に開けて眼を押しつけました。

手洗い場で、スカートのポケットからハンカチを取り出そうとしている手の白さが印象的に映りま

した。そして、スカートの裾をゆらゆらさせながら、去ってゆく女の後ろ姿が見えました。おそらく私などよりずっと高いだろうと思える、スラリとした背丈でした。

足音が消えるのを待ち兼ねる氣持で、私は早速にそのボックスに移りました。

かすかな残り香と混じって、生ぐさい、私を魅了するものの匂いがたちこめているのを、私の臭覚は敏感に感じとります。

私の本能的な直感に狂いのなかうたことは、もはや明らかです。

何たる幸運！

私は自分の騒ぐ胸と、はやる手の動きを押えるのに一苦労しました。まずドアに錠をかけ、震える手をゆっくりとカンのふたに伸して、音のせぬように取りました。

長い間求めて得られなかった処置直後のものが、今、手のとどくところにあるというこの嬉しさ。いや嬉しさというよりも、それはいい表わしようのない感激とでも

いうべきでしょう。

その感激に震える手は、カンの一番上に置かれているものをとり上げました。そして私は初めて覚える奇異な感じに打たれました。

それは、丁度、リングが店頭に並べられるときに包まれているように、白い紙袋にくるまれていたのです。

何んというたしなみのよい、奥床しい処置でしょう。いえこれが当然かも知れません。ただ、私が今まで知らなかっただけなのでしょう。でも、そうだとすると、世の中にはなんとたしなみをわきまえない女性の多いことでしょう。とにかく遍歴を続けて来た私が、初めてぶつかった処置法なんですから……。私はそれをみて、途端に、さき程見た女の後ろ姿が、素晴らしい美女だったように思えて仕方ありませんでした。

宝石箱のフタをあける気持、といえ、ちよつとオーバーに過ぎるかも知れませんが、その時の気

持は、たしかにそれと相通じるものがありました。

思いがけない女のたしなみというものにぶつかって、最初に感心させられたせいか、しらずしらずのうちに扱いも丁寧になっていました。

袋から出て来たのは、チリ紙の包みでした。かしわ餅のように中身を包みこんで、四方の角をつまみ捻じにしてありました。

私はそれを掌にのせ、押し戴くような恰好で、そっと鼻先に近よせてみました。香水でも滲ませてあるのでしょうか、なんとも云えぬよい香りがしました。

震える手が、そのチリ紙をひろげます。特有の匂いが、香水の香りを打消して私の胸の内をゾクリとさせました。

綿は良質のものでした。

白と赤の鮮やかな対象。

私は、その見事さにしばし見惚れました。

白いパンの上に塗られたイチゴ

ジャム、……そんな連想がされました。それに、奥床しさばかりでなく、実に行儀正しいこともハッキリとうかがえるのです。

私は改めて彼女の後ろ姿を思い浮べていました。どこかの令嬢、いや、高貴なお姫様が、いやしい下僕に下賜されたごほうび。そんな空想が頭の中一杯に拡がると、クラクラするほどの、感激を覚えて夢中になってしまいました。

密やかな遍歴中、初めて行き当ったこの清潔さ、そしてこの幸運は、一生私の脳裡から消えることはないでしょう。

けれども、このような素晴らしなものには、再びお目にかかる機会があるかどうか。滅多には恵まれないだろうと半ば諦めていました。それ程、その場限りのものが多いのです。世の淑女達よ、もう少しつつましくかにせられたら如何ですかと云いたい程のものが大半なのです。

中には新聞紙やザラ紙だけで済

ましているとしか思えないようなものまであって、私に保健上の心配までさせます。

使用の綿なども、実に多種多様で、我国にも、こんなに多くの種類の綿が製造されているのかと感心するくらいです。でも、やはり意識して不適当なものを使ったと思われるもの以外は、さすがに良質なものばかりです。

全国で一日にどれ程の綿が使用されるのかを計算してみたこともありすが、莫大な量です。私の足で廻るだけでも、その気になればポストンバッグ一杯ぐらいは、ほんの一廻りですから。

私は前に女性の行儀の悪さを強調しましたが、全部が全部という訳ではありません。もちろん、感心に価するものは極めて少ないのですが、まずまず程度のもは相当にあります。私の保存箱にも少なからぬ量が入っています。

でも、悲しいことに、これと思えるものを保存しても、口を縫

るにつれて変色し、汚なくなってしまうって、見るのもいやになってくるのです。

そこで私は考えています。目的のものは絞り取ってアンブレに入れて保存する。そして、残りの綿は水洗いでもして、布団にすることは出来ないものだろうか……。

もちろん、そのまま利用出来れば、これ以上のことはないのですが、これは到底無理な願いだろうと思います。

折角の魅惑の匂いが消えるのはどう考えても残念ですが、やむを得ないことで、あとは空想と憶い出に頼るより他はないだろうと諦めています。

その夜具に包まれて、夢を結ぶことが出来たら……。私は、そんなことを空想しながら、果しない願望に身を灼かなければならない運命から、いつまでも脱け得られないのでしょうか。

【本誌最近号総目次】

十一月特大号 (定価二百円)

目次裏「川柳・マニヤ幻想句」	「リン
チに導く小鳩」	第一グラビヤ「緊縛美
の祭典」	第一口絵女相撲「外掛け」
スケを張れ。坊主の嫉妬。車輪とムチ	深夜のオフィス。悪童日記。学生馬。
殉死。第二グラビヤ「アブ双曲線」	第二口絵「雑踏の中の孤独」
奇クの性格について	衣
奇譚三十九夜物語	辻村
東映、最近の縛りシーン	黒山
野に散る花(女学生切腹)	小林
生涯の灯は何処に	雪崎
女斗美絵巻「熱戦譜」	丘
シナリオ「ジェラシー」	与
緊縛フォト撮影の実際	塚本
猿轡考	原
切腹実見記と雑感	田
フアンタジヤ・マノヒステイカ山本	節
切腹と白足袋と女装	桜
女相撲物語	雪崎
連載「宇宙のどこかで」	佐
創作「異教徒」	草
奇クサロン「作者名について」	流
詩。私の描いた貴族。切腹レボ。ある	風
サド談義。我が思いを託して。ある	力
メラマンの自伝。絹さんの麗姿。解	
創作「樹の壁」	榎
ぜいにく	村
大奥裸女血斗の果て	北
灸責め熱海の一晩	吾
わが甘美なるもの	保
手記「私の実験」	と
麻生保氏の生活と意見	笹
おまじない	垣
告白「足の美しい女」	中
「火星への招待」	三
読者通信	好

十二月特大号 (定価二百円)

目次裏「川柳・情緒日本調」	「獣人街
の競り市」	第一グラビヤ「緊縛美の祭
典」	第一口絵雨の中の折檻。カラス蛇の
鼻。高慢な鼻を灼く。奇怪な湯浴み	場。第二グラビヤ「美しき女囚吊り
他。第二口絵「緊縛フォト撮影の実際	」前手縛り縄抜けの一例
千草氏の論理	宇
告白「賢者」	宙
女斗美絵巻「引落し」	雪
体験告白「黒いコート」	野
思い出すことども	中
奇譚三十九夜物語	辻
マノ小説「奴隷哀歌」	村
わが身を灼く屈辱感	と
創作「ミシンを踏む女」	三
レボ「ひろ子緊縛記」	条
女性切腹「凶札式」	寄
おむつ通信「馬と女性」	良
創作「老画家の手紙」	榎
女形の想い出。仮装の一夜	阪
平家の馬場秘聞	桂
奇クサロン「泥中の運たれ。灸責	フ
思いつくまま。絵画と写真のアイ	デ
ア。私の好きなネル。倒錯のための	倒
錯行。私の切腹。あるカメラマンの	倒
自伝。連作「少女」	花
頌歌。サドと呼ばれる出戻り娘	他
連載「宇宙のどこかで」	佐
洗腸雑記	北
日本アマゾン記「遠淡海」	二
旅と女と縄と	南
続・白足袋のこと	木
梨花悠紀子と猿轡	藤
体験小説「愛のプレイ」	志
絵物語「嫉妬夜叉」	杉
読者通信	原

昭和三十七年

一月特大号 (定価二百円)

目次裏「悦庵川柳ムード集」	「少女大
相撲」	第一グラビヤ「美しき緊縛」
一口絵「安祈願の生簀屋。踊子の訓	多
奇妙なドレス。尻の玉屋。新年歌	多
取り。重量感。人妻椿。十五夜。第二	多
グラビヤ「捨てられた人形」	他。第二
口絵「続・ひろ子緊縛記」	おしめ。カ
際「逆エビ縛りの一例」	緊
懸賞応募「うづはかすら」	巽
女性切腹小説「十五夜」	石
告白「女の復讐」	岸
体験「女装生活の幸福」	長
マノ放浪記「美しき脅迫者」	恒
少女のお灸折檻	水
私の楽しみと洗腸プレイ	江
連載「宇宙のどこかで」	佐
ヘルニア少年特別検診	北
創作「雪責抄」	森
馬化狂通信「馬風流譚」	と
わが生涯の良き日	倉
奇クサロン「K誌はエロ誌か。白い	肌
縄。巷に拾う「洗腸」の絵。他	
体験「釜ヶ崎の女」	長
御土産女相撲	山
女斗美絵巻「あわやの瞬間」	雪
蛙腹のアイディア	瀬
川端多奈子嬢に	近
体験小説「禪(さいじ)」	久
麻生保氏の生活と意見	我
奇譚三十九夜物語	辻
白い部屋。片隅から	東
針とお臍と	須
創作「体液銀行」	角
体験小説「夜の告白」	村
絵物語「狂熱の鞭」	岡
読者通信	千

二月特大号 (定価二百円)

目次裏「風流いろは歌留多」	「珍魚吊
り」	第一口絵仇な初雪。香水のかおり。
あばら家。珍妙ビール飲法。迷える小	羊。柱と鏡。晴衣の令嬢。懐懐のイメ
ーシ。グラビヤ「粘着する嵌口具」	他
第二口絵女相撲図絵。四馬孝新作實画	集。緊縛フォト撮影の実際
K誌はマニヤ誌である	南
小論「私の希望」	西
淡い想い出「賢母」	赤
奇譚三十九夜物語	辻
フアンタジヤ・マノヒステイカ山本	節
創作「絆」	と
わがしは奉仕がしたい	近
連載「宇宙のどこかで」	佐
女性切腹「百舌鳥」	石
提案「私は訴える」	高
通信「洋画の縛り映画」	東
女斗美絵巻「芳汗淋漓」	雪
奇クサロン「悩みに答える。天声	虹
奇ク論争に寄す。最高のキス。未知	へ
の恐怖。私のサド遍歴。禪について	
M謎々。女体と縄の反応。船倉の少女	
首締め。ある女とある男。「女神」	
のあこがれ。竹野ひろ子嬢へ。メンス	
の数学。アブ誌探点表。韓信の股く	
り。まご川柳自駐。アブチック・ア	
リカ。奴隷の一日。切腹のSM性。他	
願望告白「黒い夢を抱いて」	京
「こんな映画をつくりたい」	津
空の洗腸器	南
妄想「少年モデル訓練所」	山
妊娠の切腹。絢爛たる復讐	杉
百枚読切「契約書」	北
色頁「魅せられた舞台」	柴
読者通信	里



九月三日、フジテレビ「怪猫有馬城」鈴木澄子一座

昭和の初期スクリーンで妖婦役として大活躍した鈴木澄子主演の化け猫劇だが、愛妾お京の方が嫉妬に燃える奥方一味に迫害され、揚句の果に「一糸まとわぬ素裸になれ……」と中老岩波の激しい侮辱を浴びる場面がある。

又、奥方お千代の方が怪猫に惨殺される一幕では長襦袢一枚で操り人形のようにアクロバット式に散々弄ばれ、最後に肩口を噛みつかれ断末魔の悲鳴をあげて悶絶するという場面も出てくる。

九月十一日、フジテレビ「血汐笛」小堀明男、扇町景子

この中では、「裸女吟味」というショッキングなシーンが出てくる。それは捕われの美女由香（扇町景子）が入浴中一橋治済が無断

侵入し「浴槽より出てそちの体をよく見せい。予が吟味してくれる……」と、羞恥と屈辱に身をすくめる女の前に仁王立ちになる場面だが、テレビでは稀れなサジスチックなエロシーンである。

十月二十四日、日本テレビ、眠狂四郎「異端の貌」江見俊太郎

最初、薄幸の女（本山可久子）が「シマ荒しの罰」として夜鷹の女達にリンチを受ける場面は呆気なく終るが、子供を取戻すため大地に土下座して女達に哀願する狂四郎を散々罵倒の上、打撲して引揚げる場面は強烈な女サジを扱ったものとして極めて興味深い。

最初、薄幸の女（本山可久子）が「シマ荒しの罰」として夜鷹の女達にリンチを受ける場面は呆気なく終るが、子供を取戻すため大地に土下座して女達に哀願する狂四郎を散々罵倒の上、打撲して引揚げる場面は強烈な女サジを扱ったものとして極めて興味深い。

十月二十七日、東京テレビ「燃える上海」原保美、川路竜子

昭和二十九年頃の現代プロ作品だが、昨年十月のKRテレビに続いているテレビ再登場である。

この中では憲兵隊における女スパイ（三冬マリ）の拷問が圧巻である。特別出演の三冬マリは当時浅草フランス座の踊子だが、彼女が吊し責めにされ、裸の上半身を散々鞭打たれ、最後に露わな下半身にヤキを入れられる場面は凄絶を極めめる。

以上が最近見たテレビのサジシーン数態であるが、昨年十二月、東京テレビに出た「風流あばれ奉行」におけるストリップシーンの生々しい迫力には及ばない。

これは幕閣の大立者中野碩翁の淫豪振りを描いた一場面だが、夢殿の中で浪人を誘惑する手段として絶世の美女を裸にするのだが、元達によって一枚一枚肌身から剥がれる毎に灯台の灯が一本ずつ消され、最後のものが落ちる瞬間最後の一灯が消されるという一風

変った趣向である。

男の目の前で裸にされる事は女にとっては誠にたまらない屈辱であるが、見る男にとっては此の上ない法楽である。こゝに女体裸責めの魅力がある。碩翁もこの理念を弁えて居り、裸女鑑賞という最後の手段に訴えたものと見える。

同様のストリップシーンが三十年前マキノ時代映画「刀を抜いて」の中に出てくるが、こゝでは湯女お光（岡島艶子）が多勢の悪旗本達の目の前で、莫連女達の手で盃を干す毎に一枚一枚、衣類を剥がれ、最後に乳房も露わな腰の物一つにされるといふ珍趣向で、当時としては破天荒な筋書であるが、せっかくの見せ場も検閲のためすっかりカットされてしまった。

さて最後に編集部へのさゝやかな希望であるが、東京、大阪その他の都市で上映、演劇、ショウ等におけるサジシーンの紹介を、もっと活発にやって欲しいものである。最近某誌に新宿コマ劇場の八月公演「執念泥沼地獄」というサジ劇が、写真入りで詳しく紹介されていたが、こうした企画は本誌においても是非取り上げて貰いたいものである。

テレビにおけるサジシーン 木更津 敬



〔読者サロン〕

新年号を読んで思うこと

羽村京子

待ちに待った新年号を入手し、一気に読み終えました。江波好子さんの「告白」、瀬沼四郎さんの「アイディア」など、いずれも興味ふかいものでした。

江波さんには、バスタブの中でお腹がポンポンに張るほど洗滌液を入れたのなら、そのあとでもう一度、パンパンになるまで空

気を注入して、ぼっかりと浮かぶプレイをおすすめしたいと思います。せまい洋式のバスタブでは、膨らまされて川に投げ込まれた蛙のように、おおむけになってバチャバチャと手足で水をはね飛ばして暴れることはできないでしょうが、腹を上にしてひっくりかえって、ブクブクとお尻から泡を吹き

出しながら、広い湯槽の中で思い切ってあばれ廻ってみたいような気がします。

瀬沼さんの提案、大賛成です。

一五八ページの「短信往来」の女性のモデル募集を見て、妊娠したかしら、とそんなことを考えています。しかし瀬沼さんのアイディア、(1)の口から水を飲まされるのは、私の経験では、あとが相当苦しいので、梨花さんでもどうかと思います。胃にたまった水を、くびられた胸を通して、腸に流すためには、ときどき膨れ上がった胃部を手でおさえてやらねばならないでしょう。食道を逆流して来る水と、ゴボゴボと音をたてて、下にさがって行く水の動きが、外からでもよく分るでしょう。しかし、大変な苦痛です。私なら、どれだけたく山入れられても、やはりお尻からの方を希望します。

第一口絵、滝れい子さんの「泰安祈願の生贄」、下方に湯もじ一枚にされた孕み女が、後ろ手、猿ぐついで尻に縛りつけられているのも、面白く思いました。どういう設定になっているのか分りま

せんが、そのあと、彼女は、狩猟の獲物のように屠殺され、料理されて、氏子たちの宴会で食べられてしまふのでしょうか。その場合膨大し切った妊娠子宮が注意深く切り裂かれ、羊膜を少しも傷つけることなしに、成熟した人間の卵が完全にとり出されるならば、半透明の羊膜を通して、羊水の中の胎児と胎盤と、それを結ぶ臍の緒が見えるでしょう。出産直前の妊婦の子宮の中には、成熟し切った人間の卵が入っているのです。

昔は一回の分娩に二つ以上の子を産むことを「畜生腹」と言いました。双胎の場合に、ザ・ピーナツのような一卵性双生児でなく、二卵生であれば、当然男と女との双生児を産むこともありうるわけで、そのような子は、前世心中した者の生れ変わりと言われ、かならず夫婦にしなければならぬとされていた。この男女の双生児のことを、とくに「畜生腹」と呼ぶこともあったようです。(広辞苑「畜生腹」の項を参照)一度に三つの胎児を産むことを「品胎」と言います。

二つ以上の胎児を孕んだ女の腹は、もちろん普通の妊婦よりも大きく、腹囲一メートル以上あれば





「たわごと」

## マニヤ放屁譚

香織 伴助

何となくうら悲しく、そのくせユーモラスでとらえ所のないものに放屁がある。寡聞にして余りそうした特異な記事に出くわさないのも当然とは云え、あまのじゃくな小生にはいささか物足りないと思っていた。有名な放屁の出る小説として谷崎文学の「闇間」

で、三平が神原の旦那のかゞされて「結構なじゃ香でけすな」等云う条りもあり、芥川文学の「澄江堂雜記」中に「放屁」という随筆があり、青木健作及び中戸川吉二両作家の小説中の特異な放屁描写について書いたものがあつたと思つたが、一般にアブ誌に於てもコプロ趣味は相当出て来るのだが放屁は案外見ないものである。所で最近読んだものの中に二個所もそれがあり、而も中々すばらしい描写をしていて一寸嬉しくなつたものだ。その一つとは他でもない。我が「奇ク」誌であり、「

当代女武勇列伝」(諸岡堅雄氏)でS的女性敏子嬢が男共へのこらしめに放屁のご馳走をしてやる所は未だ記憶に新しい素晴らしきだつた。(四月号)ハ「その大きなおいどで屁たれたらドンみたいやろな」と罵つたこの虫けらに、本物のご馳走をしてやる氣になつた。が、このまゝの姿勢では面白くない。そこで腰を上げ、男の首の上に跨ると、丹田に力をこめ、思い知れとばかり、ズボンごしに息づまるような熱風を送つたVという所などは正にその光景を眼の当りするような見事な描写と云う

他なく、放屁というコミックで特異な現象によるS・Mという眼新しさからだけでも、特筆ものと思つた次第。

この「当代女武勇列伝」は8月号にもオートバイ上での放屁のS・Mシーンを点綴してくれている。諸岡氏の「当代女武勇列伝」の続編が又のらぬかと、実は小生、毎号楽しみにして待っているものである。

その二は有名なサドの「ソドムの百二十日」の抄訳に於てだつた。その第六日の実に愉快な話の中に全く堂々と放屁趣味(

?)が披露されていて聊か参つたものだった。

ハ「なんてこつた! わしの口へ屁をひるなんて、じつに大胆不敵なやつだな、おまえは」

彼は、またすぐ口をおしあてました。

「はい、だんなさま」わたしは二回目を放ちながらいゝました。

「私のお尻にキッスをなさる殿方には、いつもこうやってお礼をいたしますわ」

「そんなら、けっこう! ださなければならんのなら、さすがにいくらでも、なんべんでも屁をひるが!」デュポンはそれを口や鼻でうけとめて、喜悦に身をふるわせました。V

語り手デュクロの第六日の物語り。六十がらみの男で、でぶの好色漢デュポンとデュクロとの間の放屁をめぐる思ひ出話であるが、まことに斬新、且つ愉快的な描写ではありませんか。

以上二つの傑作にふんだんにこの滑稽な生理現象がとり入れられている物珍しさは嬉しいという他なく、放屁なる殆んど陽の眼を見ぬ愉快な現象を利用したS・M感のユーモアは得難いものと感嘆す



6  
アンボクボリ  
ペンシヤンボ  
ムクウジスボ  
トッポタタハ  
アマヤカボレ  
チンダラカシム

文  
誤  
あ安い争です東方五  
百里の海上にある日本  
国の美少女の生きさま  
を召し上げるがよろい  
これこそ靈妙なる神  
業でござりまするぞ

帝多いに憶ひ即キンチャクカッを召し詔  
してのたまわく。汝がしこに到つて美少女多  
数を拉し来れ。朕が命に違背あるやからづ

8

皇帝はそれから傑作  
を山作らせやがて  
是に美少女達が括ら  
れて料理されるであ  
る光景を空想し一  
先に入つていたキン  
チャクカッの仕事とは  
その様なものなのだ



る次第で、「奇ク」でもこの後も稀にも放屁記事があったら取り上げてくれるよう切望するものである。「ソドムの百二十日」第六日の中では、アニス油を半クォートお腹に流しこんで、あとすぐバルサムの香りのする液体を大グラスに一杯飲んで放屁しやすいようにして好色漢デュポンを喜悅させるようにした。とあるが、催ガス（？）剂乃至物質を強引に又は内緒に生贄の女に飲食させておいて、その何とも云えぬ羞恥を楽しむ、というような設定のアブ小説なども出現してもいいのではないかと、思ってみたりする。ともかく愉快

な生理現象であるから、他のコプロものよりこっけいで救いがあるし、第一暫くして正に屁の如く消散してどこも汚すおそれがない。

### △詩▽

#### 破れ易き紙

書かなければ、堪らなかつた。白い紙の上に、ボールペンの太い字をぶっつけなくては、耐えられなかつた。  
嵐のように襲ってくる女体加虐症の再発は、ペンを走らせて心のモヤモヤを吐き出さなくては、納まらなかつた。  
破れた紙が、机の下に白い花びらのように散っていた。(森川弘)

### △告白▽

#### 座食職人の空想

私は同性に責められたという自分の奇妙な性癖に対して、何故このような考えが起ってくるのかと自分ながら本当に不思議に思っています。年は二十八才でセブンペイ焼の職人をしていいます。もう十年近くもずっとこの仕事をしていますので独立してでもやってゆけるのですが、まだ資本がないので一人立ちは出来ません。  
奇譚クラブをもう数年も続けて愛読していますが、自分のような嗜好の人はまだ見当りません。私は思春期の頃は、色の黒い、或は陽に灼けて真黒な肌をした同性のヌードを見たいという気持ちが強く、自分と同年輩か、少し年上位の青年の裸を見たくて、海水浴場へ行ったり、わざわざ漁師の来る海近くの銭湯へ行ったりしたものです。  
二十四、五になった頃から、年上の同性に責められたという気持ちが嵩じてきて、一時はその妄想で夜も眠れぬ位でした。その時に出てくる相手は、土方とか船員とかいった荒くれ男で色の黒い毛むくじゃらの乱暴者

です。やくざ男も出てきますが、服装の整ったやさ男タイプではなく、垢じみた労働服の浮浪者タイプの男です。

きまって私は、このような薄汚れた汗だらけの逞ましい中年男に殴られ辱しめられ、果てはもう何日も風呂へ入らない地下足袋にむれた足を舐めさせられたり糞だらけの毛むくじゃらの尻を舐めさせられたりするのでした。こんな境地に立たせられた時、私は一番に亢奮するのでした。それが不思議なことに、立派な服装をした相手であったり、色の白い好男子であったら、一向に興味がないのです。

一体、これはどういう原因からなったのでしょうか。異性に対しては一向に興味がないのです。今でも、色の黒い、肉体労働で筋骨隆々とした青年の裸体を見たという気持ちには変わりありませんが、想像力に乏しいとでも言いましょうか、自分で筋書きを作り出すということは、ようしませんので、貴誌の小説の中、人物を変えて、責められる女性を男性の自分になぞらえ、責め手の男を醜怪な人物に変えたりして僅かに慰めております。



A・S・M通信V

## マゾ女性を結婚の対象としたい

## 男性からの便り

〔編集部読者係〕

このところ、マゾ女性と結婚したいから、紹介してほしいという便りを引続いて五通貰った。今までも、マゾ女性を紹介してほしいという希望は、少くはなかったのだが、近頃、このように纏って

通信がきたということは、辻村隆氏の「鑑賞用女性」である梨花悠紀子さん・「私を責めて下さい」の東浦ひかるさん。それに、最近の「読者通信にあらわれた」竹野ひろ子さん等の記事が、影響した

のではないかと思われる。マゾ女性の生涯の伴侶として不適は、いろいろと問題のあるところであって、経験のある有志読者の体験を伺いたいものだ。私の考えでは、単純な夫婦生活と違って豊富な内容のある人生を送ることが出来ると思うし、軽度のサドがかった男性とでは、それこそ琴瑟相和すということも、大いに想像される。

しかし、残念ながら、本誌は結婚紹介所でもなければ、又文通交際を斡旋する機関でもない。ましてや、仲人なんていう役割を果す柄では到底ありえない。従ってこういう通信に対しては、黙殺するより外方法はない。

次に文献的参考のために、その中の一文を左記に掲げてみよう。勿論、地名や人名は適当に改変しておいた。

○ 拝啓初冬の候と成りました貴社のKKの発展を心より御喜び申し上げます。私の様な愛読者が居る事を強みに、思い切ってペンを取りました。私は読者の一人となったのが今から十年前の昭和二十六年八月でした。会社が閉鎖す

る頃で組合員がするあのストです。其の職場待機中に、或る一組合員が色々の雑誌を持って来て居りましたが、其の中に貴社の書も混っていました。読む内に心の中にねむって居ったものが強く芽を出して、夢遊者の様にひそかに愛読して居りましたが、其れも大切な物でもむしり取られた様に取締りの為私の前より姿を消してしまいました。その内心に大きな穴でもあった様で今迄の本を読みかえたものです。

其れから再度貴社の出版が出来た時は私は蘇る事が出来たとしみじみ思いました。其の間、数多く買い求めたものの、家族に心の大切な部門を見られる事を大変恐れて、読むと焼き棄てたものです。(今思うと残念な事です)

最近では愛読者も多く、買う日が二、三日ずれる様な事になれば大変です。大阪迄出て行かないと買えません。ともあれ喜びにたえない事です。読者通信を見ても女性の方が多くなった事です。其の中から東浦ひかる様、竹野ひろ子様等々ファンの前に姿を誌上に見せて下さった事は、心強くファンの心を魅くものです。私が最近大変好きなモデルさん



12

然その頃にはすでにキングカッパ入団の少女狩は始まっていた。或は夕闇迫る街角から行方不明になった少女もあれば、大通りのない場所で突然黒覆面に囲まれ拉去られた子もある。然し変った事は、可成り領収書と若干の金を入れた封筒が置かれていた。つまり買っていくと云った意味だ。

少女は拉致された  
は果てはこうなるのか

をいうと梨花悠紀さん、大塚啓子さん、愛川悦子さん、それに東浦ひかるさんです。又、竹野ひろ子さんも好きになれそうです。私も辻村隆さんの様に心ゆく迄縄による女性美といえますか、縄の美といえますか、を味わいたいものです。今日では一人でアパートに居りますので買って来ても心楽しく、のびのびとして読む事が出来ます。

私では、辻村様の様に美を最大

限に生かした縄のさばきが出来そうにもありませんが、一度でもよい、好きなモデルさんを縛って見たいものです。又、緊縛フォト撮影でも拝見出来たらと思って居ります。夢の様ですが最近では強く願ひ、その心を私自身どうする事も出来ない昨今です。

読者通信に色々と思った心境が出て居ますが其の心境を文に書き表す事の出来ぬ私が恥を忍んでペンを取った次第です。其れも一年

や二年間思った浅い思いでなく、十年前からの思いを一べんに書き出した様で、文そのものは、とりとめもありませんが、どのファンよりも長く強く、何時迄でも愛するファンで居るつもりです。いや居ります。

『私の描いた責面』の高野ミヤ子さんの様な方々と文通したいと願って居ります。御手数でもマゾな女性、それも東浦さんや竹野さんの様な方々と文通を心より願ひ、

最適な方と結婚したいと迄願う氣持を御くみ取り下さいまして、御紹介下さる様恥を忍んで御願ひ申し上げます。

貴社に御願ひするより他に有りません。宜ろしく呉々も御願ひ申し上げます。

粗筆乱文にて失礼 敬具

茨木市富田新田二三六一

川上 康夫

十二月五日

読者通信係様

## 告白

### 昆 禪 記

森 太 一

九月。さしもの賑わった海水浴場も、夕方近くなると、釣りをしていた人影もまばらだ。

さっきから期待していた親子連れの釣りも帰り支度を始めた。私は氣長く待った報いが必ずあると信じた。

兄弟らしい二人の少年が、親の支度を待ってボール投げをした。私は急いで彼の少年から少し離れ

た草むらの窪地の中でズボンを下げた。新聞紙を破って買ってきた繃帯一卷きを出し昆布を出した。私の頭だけが少年達に見られた。禪をはずして繃帯を幾重にも腰に巻きつけた。

私は期待した。高鳴る胸の動悸を覚えて出した昆布を拵げて、一端を背後の繃帯に支えた。そして昆布を股にくぐらせようとした時、少年の声がした。私は絶好のチャンス到来とばかり、昆布を前の繃帯に挟む構えをした。少年は私の姿を発見したらしく弟を呼んだ。

千載一遇とは将にこの時。



私は繃帯と昆布で奇妙な越中禪をして見せたのである。少年は立ちすくんだ。私は二人の少年がどん

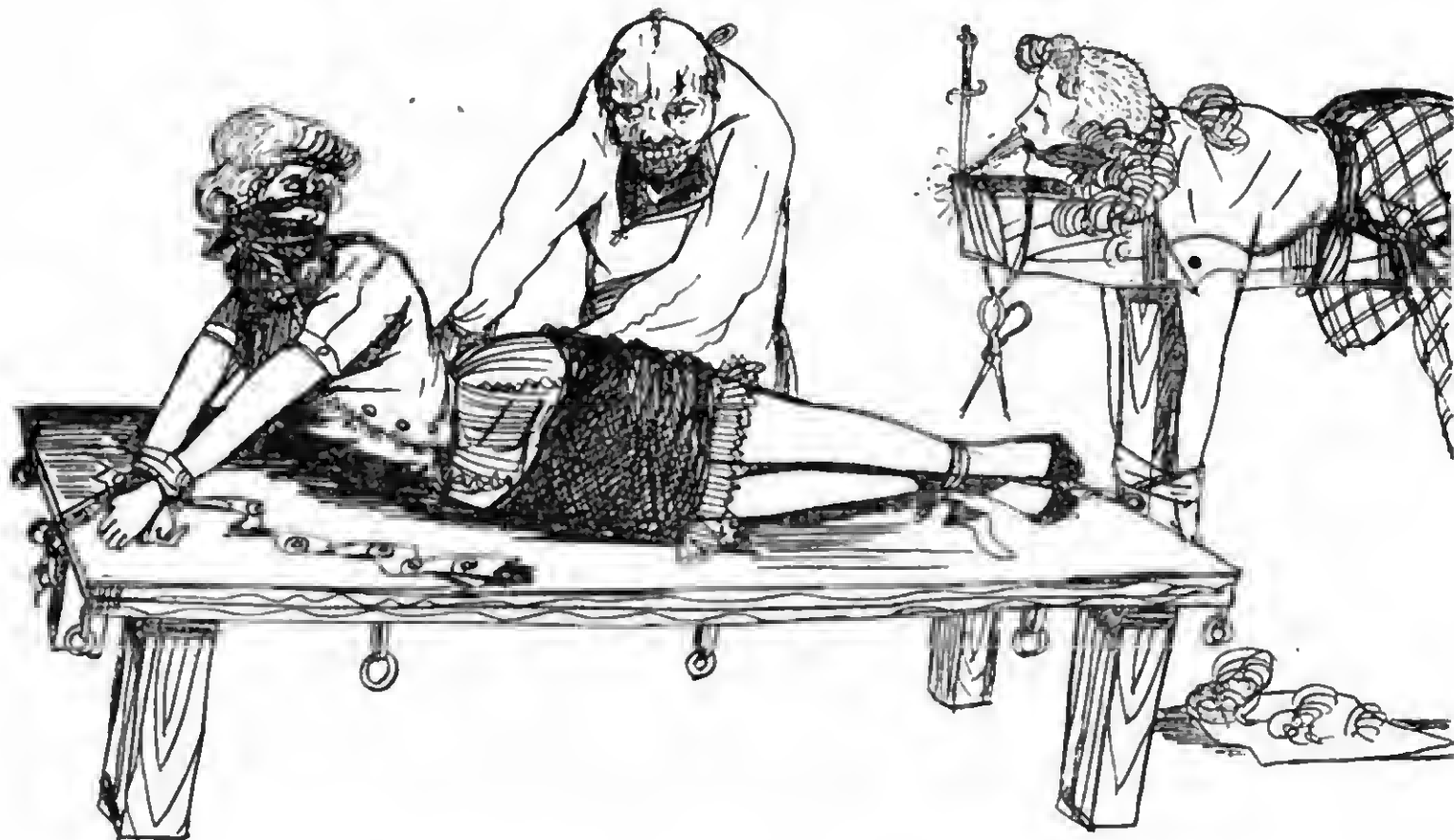
な顔で見下しているか、見上げる勇氣はなかった。さすがに顔を見られるのが恥しく、くると後を向いた。それでも昆布禪がはつきりと示せるのである。

私は少年達が如何なる眼で私の昆布禪を感じているか、その瞬間息詰まった。再び正面を向き昆布の垂れを上下に動かして見せた。「何と浅ましい姿」と自嘲しながらも理性を失わなかった私は、少年達が立ち去るまで哀れな恰好で突立っていた。

少年が立ち去ると私は、屈辱感がひしひしと心を痛めた。まるで家を追われた犬のように、すぐそこ親子から遠ざかった。

&lt;読者サロン&gt;——昭和36年12月号より——

## 最近号の読後感 近藤 一



十二月号、梨花悠紀子嬢の宙吊りがグラビアを圧して壮観。全身が完全に浮上ったポーズを好むという悠紀子嬢だけに宛ら水を得た魚のよう、活き活きとした佳作。鴨居からの逆吊りはサポーターが面白く、(もっと小さくてピッチリしたものなら尚佳良)ムッチリしたヒップから太腿の辺りが実に愛らしく艶めかしい。次に吊上がつて行く上体の形も愉しく、足指の動きも美麗。哀愁を漂わせた美貌だけに表情は実に美しい。

手摺縛りは、或は一番の労作かも知れない。凄愴美というか、無残美というか、単なる縛りでも苦痛の強いものを、猿轡を嚙ませられ、宙に大の字に磔られた身を足蹴にされ、拡がった太腿を更に曳かれ、首に廻った紐に足を掛けて引絞られる。項垂れ或はのけ反るポーズ。苦悶に歪み打ちひしがれた表情、咽喉を締められて窒息寸前の美女、唯、素晴らしいの一語に尽きる。

そして女囚姿の宙吊り。両腕を一字に括られている所は高々と十字架にかけられたポーズとして出色のもの。囚衣を着せられた彼女のショートカットの髪も女囚にふさわしく、荒縄の緊縛が活き、

股間縛りの窺われるのも嬉しい。初めのうちの不敵な顔、縄がずって胸を締付ける頃の困惑と忍耐、身も世もなく苦悶し、救いを求める表情。精魂つきてブラ下ったままガックリ頭を垂れた姿態など適確に捉えられたフォトで恰も十字架上、磔刑に処される若く美しい女囚の趣がある作品。背面絶佳。「制服のめしうど」の悠紀子嬢は嬌慢な女子高校生というところ。これ程健康な生理を営む一人前の女体を誇る美少女は、大いに責めるべきであり、それが彼女の美を弥増し、彼女の歡びを増す所以。

悠紀子嬢の活躍は今や辻村、塚本両氏の名伯楽ぶりで上昇の一途を辿り、リアルな迫力においてNO・1と云える。

絹川文代嬢のMぶりの停滞気味は残念。美貌と悦虐の表情の佳さはKKモデル中に比類ない彼女なのに惜しいと思う。脚線は絶品。ヌードは大塚嬢や桜井嬢とは異質なので、私としてはスリッパ姿かブラジャ・パンティ姿が、彼女の裸身を最も引立てると思う。和服なら彼女の長身と豊かな黒髪(？)が活きようし、八百屋お七やジャヌダークに意欲を燃やす彼女なら、もうそろそろ美姫の極刑が発

表されてもよい筈。緊縛の引廻しではだして歩かされ、花の盛りを虐殺に散らす無惨美が是非欲しいもの。「喘ぐ猿轡」の美しさに、しみじみ絹川嬢の佳さを思い、不朽の作品に主演する彼女を想う。「ネットの麗人」の南国的風貌、端麗な裸身。モデル嬢の氏名は不明ながら、今後の活躍が期待される。大塚啓子嬢も大活躍だが肉体の見事さと髪の新しさがあただけにベテラン級の表情で、切腹ポーズが美しい。前手縛りの縄抜けも佳く、次回は後手の高手小手首縄

姿で頑張って欲しいもの。辻村氏の緊縛記のモデル、竹野ひろ子嬢も稀少な存在。東浦ひかる嬢に続いて出現したマゾヒスティンとして期待される。均斉がとれヴオリュームの充分な肉体は得難いもの。紹介文によれば知性も豊かで羞恥心に富み、清潔な感じでも好ましい存在と云えよう。本格的猿轡と古川裕子好みの緊縛加虐は私の待望久しい所。今回の活躍が待ち遠しい。

麗筆で恰好の読物と云うべく、Kの特色をなしている。桂牧次郎氏「平家の馬場秘聞」の文語体の手記は流石。「悪魔の口紅」というタイトルと記憶している氏の古い作品以来、氏の国文学の造詣の深さには惹かれていたが、単なる時代小説でなく鏡花風の妖美なムードが独特のもので云えよう。

で、非現実的という批判もあるが、ロマンティックなムードの漂う麗筆として私の心酔する処。今後も氏の絵物語が欲しいものだ。福岡の藤本美奈枝、大阪の徳永津久子、霧ヶ浦の根本英子、神奈川の中野珠江という方々の通信を拝見して、読者通信欄の価値を改めて認識した。このような女性読者の新しい声が多くなる事は、K発展の一つのパロメーターとも云うべく、大いに歓迎したい傾向であろう。

## 生活の中のM

### 『尻に敷かれる』

春 木 俊 野

「尻にしかれる」これは恐妻亭主の言葉だが、私も又これが好き。若い女の子を相手に冗談口を叩くのにこれをよく使うが、面白いものだ。

「僕なんか毎日毎日、馬車うまだよ。朝はハイヨーツと鞭をあてられて家を出るだろう。会社で一生けんめい働かされて、今度は家に帰ったら、奥さんのお尻の下でぎゅうぎゅう云わされるんだぜ」

「僕は座布団だよ。え？ 座布団って何だ？ 座布団だよ。尻にしく座布団。僕はいつも女房に座布団にされているの」

「君なんか、さしずめカカア天下だな。夫を尻にしくタイプだよ。でもそれが一番いいんだよ、第一平和的だよ。君なんかおてんばだから夫の顔の上にペタリと本当に尻をすえるかもしれないね」

「今日はどうしたのかナ、え？ ううん。とても胸が痛いんだ、息をするのに苦しいんだ。原因？ いや、いろいろあるけど、やはりこれかな、え？ 冗談じゃない

よ。惚れたはれたで胸のうずく年じやないよ。女房だよ、女房の尻の下でね、君はしらないんだな。尻にしかれるって形容詞じやないよ。本当にやられるんだよ。体格のいいでかい女房の尻の下に、本当に馬乗りにおさえつけられて、一時間も苦しめられてみるよ、骨はバラバラさ」

そして中には、元気な娘もいるものだ。

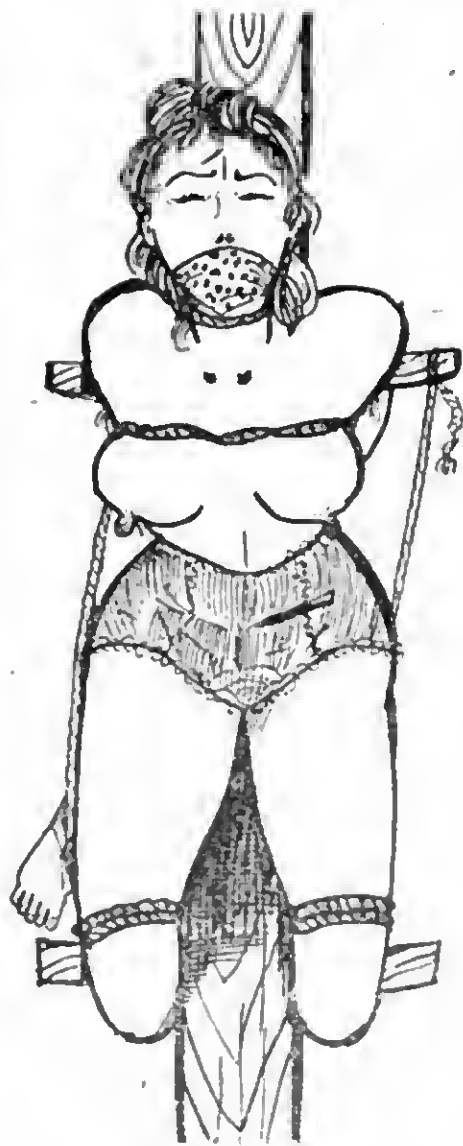
「わたし断然、夫は尻にしくわよ。男なんておさえつけておかないから浮気するのよ。浮いちゃうのよ」

## 「奇クサロン」の

### 原稿を募る

『奇クサロン』は愛読者の皆さまの共通の広場です。絵でも、写真でも、文章でも、通信でも、なんなりと御遠慮なくドシンドシお送り下さい。型破りの雑誌の型破りのページとして最大限に活用して頂きたいと思ひます。この欄だけは何んでもあけすけに言える楽しいセクシヨンとして、皆さまと共に末永く育ててゆきたいと思ひますので、どうぞ、よろしく。





あるカメラマンの自伝

## 小麦色の肌

毛利敏久

藤野珠子の緊縛ヌード・フオトは好評だった。シンのありそうな野性味を帯びたヌードが依頼主の氣にいったのだった。

珠子はどちらかというと小麦色というにふさわしい肌色で実際に女体を見た毛利の眼には、初々しい女の肌の美しさといったものが余り感じられず、只、すらりとしたスタイルにしては、お乳やお腹腰なんかの膨らみが豊かだと思っただけ過ぎなかった。

それが、ネガから印画紙に焼付けてみると、毛利自身でも驚いたくらい、素晴らしい写真になっていた。配光の加減もよかったのだが

陰翳を帯びた珠子の肌は妖しい輝きを帯びて、麻縄の厳しい縛しめの中でくびれていた。

印画の結果を見た毛利は、再度の依頼がなくとも、珠子をモデルとして、写真を撮ってみたいと思った。このモデルだったら、実物よりも相当見ばえのする写真になるだろう、という気持ちが若いカメラマンである毛利の頭の中に、安易に妥協したい気持ちが知らず知らずの中に湧いてきた。

然し、毛利のそんな気持ちに輪をかけたように、依頼者であるAは第三回目の注文をモデル藤野珠子と指定して詳細なアイデアと共に

持ってきた。三和銀行と刷ってあるメモ用紙に、ぎっちと細かい文字で、注意事項が書かれてあった。毛利は、この時初めて、このAが若いのか、老けているのか、と一瞬、今の今まで、自分が、彼の年令のことに注意していなかったのが不思議に思った。

何の商売をしているのか、とにかく勤め人、サラリーマンでないことだけは確かである。が、もし会社勤めとしたら、相当に上の地位、金と暇に自由のある重役とか取締役とか、と考えて、ああ、それだったら、勤めというよりも経営者なのだ、と思い直した。この頃、年の若い毛利に対して、頭ごなしにうるさい注文を出したりするAに対して、何かしら、わけのわからない反撥のようなものを感じているのを、今更のように自身で噛みしめていた。

カメラを持ってモデルに対している時だけが、そんな世間並の煩しさから解放されて、一事に熱中することの出来る青春の喜びが毛利の胸の中にふつふつと湧き上ってくるのだった。

午後のしじまのひととき、毛利はモデルの藤野珠子と相対していた。武芸者が白刃を合せて真剣勝

負をするときのような気迫で、毛利はカメラのファインダーからモデルの姿態を覗いていた。

Aのアイデアで珠子は両の手足を揃えて一緒に括られて右脇腹を下にして転っていた。そんなポーズの時、手足を首と足首とで揃えようとすると、どうしても脚の方が長いので十分に身体を屈めねばならない。珠子は膝を曲げ背中をU字型に曲げて、かろうじて手と足を一緒にしていた。

カメラは極度に屈曲した珠子のヌードの各部を狙って、七、八枚もシャッターを切った。毛利の依頼された第一のポーズの撮影は終わったので、当然次の指定されたポーズに移る筈だったが、この時、毛利の頭の中に不逞な野心が、ふと雲のようによぎったのだ。

只、モデル料が欲しいというばかりにあられもなく素肌を縄で縛しめられて写真を撮られている藤野珠子に対して、彼女が従順であり、しかも事務的であるだけに何かこの平穩さを破ってみたいという嗜虐心が起って。自分も又、Aという中年の依頼者から金を貰っているということだけで、唯々諾々として写真を撮っている哀れな道化師ではないかという、自嘲の

念がそれに拍車をかけた。

毛利は矢庭に珠子の脇腹に足をかけた。力をこめて足蹴にすると珠子の身体は一回転して、括られた手足が空を流れると、どきりと左脇腹を下にして転った。ポーズを変えろのだと思った珠子は、毛利の荒々しい足蹴の仕草に対して不審の念を抱くこともなく、顔を起して、毛利の次の指示を待つのだった。縛られた不自然な姿態で動く珠子の全身の筋肉の変化に、面白いものを発見して毛利は一瞬カメラに近寄ったが、静止したままの珠子の身体のとこからも、先刻の美しさは感じとれなかった。

痛いとか、いやとか、少しでも言ってくれたら、幾分でも張り合いが出るのだが、このように従順なのは、毛利にとっては一つのいらだたしさだった。何とか音を挙げさせてやりたい。という気持ちが不思議に或る一種の快さを以って毛利の心を占めてくるのだった。緊縛フォト撮影という共同目的に対して、モデルとカメラマンという違いはあれ、一緒に邁進している二人にとって、強い心の繋りを生じたのは、こういういきさつからだった。

### △通信▽

#### モデル嬢の飼育ぶり

長井辰夫

毎月の口絵を飾るグラビヤは私を本当に楽しくさせる。

ずっと引続いて見ていると、登場するモデル嬢の成長ぶりが、ありありと自分の目に映ってくるように、尚更楽しいのだ。

縄一筋に、よくぞここまでモデル嬢を飼育されたものだ、その努力を讃えたい。乳房に喰い込んだ縄目のけば立ちに、苦悶に曲げ



られた足の指先に、私はそこに責められる者と責める者の、ぴったりと合った呼吸を見る。

一枚の写真でも、そこに眼光紙背を徹すれば、いろいろの妄想が無限にひろがってゆく。

十二月号の「宙に耐える」の梨花悠紀子嬢の真迫した表情は、私の夢を最大限に伸してくれる。この五葉の組写真を元にして、私の夢は馳せる。手摺に宙に括られるまで、彼女はどのような経過で自由を奪われていったのだろうか。私は、かく完全に飼育されたモデル嬢と飼育者とを讃える。

### ■アブストラクト■

△立派な家があるのに、わざわざ街の温泉マークへ出かける夫婦がある。自分たちの同衾しているベッドへ女中に茶を持って来させ、困惑する顔を見て喜ぶのが趣味だそうだが、昨今の都会のホテルの殆どのベッドには大鏡の嵌め込みが常設されている、とか。

△鏡といえば天井は勿論のこと入口以外の三面が総て鏡張りのベッドルームを特別室として設けたホテルがある。比較的高い料金なのにも拘らず、いつも満員盛況なのは利用者の多いことを物語っているのではないか。△ある男娼の話によれば夫婦連れの客が時折あるとのことだ。中には常連となつて一月に一回ぐらい、きまつて訪ねてくる夫婦がある。彼等夫婦が男娼を前にして、どのような行為に耽るのか、鏡の間と考え合せて興味がある。△此の頃では、バスルームのついていないホテルの部屋は流行らないという。若いアベックが温かい湯気のもった密室で、或は中年の脂ののった男とバィのマダムとが、と空想すれば、楽しい私の夢は尽きない。

切腹小咄集

須藤 律 夫

(一) 切腹

大晦日の夕方、忙しい米屋の店先へ浪人がやって来て、物も言わずに双肌を脱ぎ、脇差を腹へ突き立てようとした。主人が驚き、裸足で馳け降りてその手を押え、  
『まあまあお待ち下さい、どう言う訳で御座居ます』と刀をもぎとる。すると浪人ははらはらと涙を流し、  
『腹黒き同輩の讒言にて主家を追われてより、ここに八年、今迄露の命を永らえて来たのは御亭主、一重に貴公のお蔭だ。よって今日の大晦日には如何にもして積る借金を払い度き存念なりしところ、いかさま金策の途も尽き果てどうにも才覚がつかぬ。なれど拙者も武士のはしくれ、その申訳には切腹してお詫びの他は御座らぬ、どうぞここをお貸し下され』と真心を面にあらわしての申し開き、米屋の主人はすっかり感激して  
『いやもう、そう言う思召しならお金は催促なしのある時払いと致

しましよう。浪人なさっても流石はお武家、御心底誠に恐れ入りました。まあその様に御心労なさらず、今日は御酒なりと召上って行つて下さりませ』

すると浪人忙しそうに身を繕るい、

『いや辱けないが、そうもして居れんのじゃ』

『と、申しますと？』

『未だこれから、酒屋と炭屋に、腹を切りに廻らねばならぬ』

(二) 十文字腹

息子が硯箱と脇差を持ってあたふたと二階へ上って行った。只事でない様子に親父がそつと覗いてみると、臍を中心に腹へ墨で十文字を書いている。

『おい、何をするんだ』

『実は私の言い交わした女郎、今度二百両で身受けされる事になりました。あんまり口惜しいので切腹して死のうと思うのですが、切り口がまっすぐになる様に、墨でしるしをつけていたのです』

『馬鹿め、そんなつまらん事で死ぬ奴があるか、お父っあんにも覚えのある事だ。二百両やるからお前が身受けしろ』

親父はそう言つて百両はおり出

した。

『お父っあん、之は百両、あと百両なければ……』

『心配するな、あとは掛取りから帰つて来てからやる、兎に角豎の棒だけ消して置け！』

(三) 御せんそば

或る手打そば屋の主人、ふと店先を見ると、やせ細った侍ががみ込んで大分疲れている様に仔細あり気と見てとった主人が近寄り『若し御侍様、如何なさいました』

女体切腹『夜散る梅』——腰元乃ぶ江の最期——



すると侍はどっかと座り直し、前を寛げると腹を撫ぜ上げ乍ら言つた。

『うむ……拙者、御せん……いやさ手討に……』

てつきり殿の御手討を逃がれて来た侍が、この店先で切腹するものと勘ぐった主人、

『では、御手討になるところを、ここで御切腹なさいますので……』

侍、左右に手を振って

『言うな亭主、身共は御せんではなく、手討そばが所望なのじゃ』